
これがオレの人生だ

頭隠して尻も隠す

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これがオレの人生だ

【Nコード】

N0518V

【作者名】

頭隠して尻も隠す

【あらすじ】

自分の母親が倒れているの見て何もできなかった。だから、オレは決意した。大事な人を救えるように、大事な人を守るように。そんな主人公の人生が此処から始まった……。誤字等あると思いますが気にしないという方だけご覧になってください。

第1話 決意（前書き）

いろいろと無理がありますがご容赦ください

第1話 決意

「母さん!!」

部屋で倒れ伏す母親を見る。周りには騎士甲冑をつけた人たちがいる。その中の一人が言葉を告げる

「済まない少年。お前の魔力も貰っていく。大丈夫、安静にすればすぐに戻る。」

その言葉を聞いた後自分の胸に女性の手が生えていた。それが、意識を失う前に見た最後の光景だった。

- - - - -

今、いるのはどこなんだろう？周りを見てみると病院の個室のような場所だ。あれからどうなったのか？一体やつらは何者なのか？母さんは大丈夫なのか？

そんな事を考えていると壮年の男性と二人の女性が部屋に入ってきた。3人に気づき体を起こそうとしたがうまく力が入らない。それを見た、男性が無理はするなと止めに入った。この人たちには見覚えがある。確か母さんが局で働いていたころの同僚だったはず。なんだか、うちに来たのを覚えている。

「こんな格好ですみません。お久しぶりですね。ゼストさん、クイ

ントさん、メガ・又さん。」

「ああ、そうだな。ジン。」

「久しぶりね。」「半年ぶりかしら？」

「そうですね。そのくらいのはずです。ルーは元気にしてますか？」

「ええ、元気よ。最近立てるようになったから動き回って大変なのよ」と苦笑いするメガ・又さん。

「それで、なぜ皆さんはここにいますのでしょうか？というより、此処はどこなんでしょうか？見たん感じ病院のようですが……」

ゼスト達の顔が暗くなる。その後、真剣な顔をしながらゼストが言葉を発する。

「ジン、おまえは、魔導師に襲撃されリンカーコアを吸収されて意識不明になった。その事件を聞きつけた俺達がお前の家に突入しお前とユーリが倒れているところを保護し病院に搬送した。」

「そ、そうだ！思い出した。ゼストさん、母さんは！母さんは無事ですか？」

その言葉に一層暗くなる。そこで、クイントが代わりに告げる。

「ジン君。落ち着いて聞いてちょうだい。先輩は魔力の急激な減少のため、今も意識不明の状態。そして、そのせいで、手術中よ。もうすぐ終わるわ。」

「だ、大丈夫なんですよね？」

「成功率は5分5分よ。」

「……」そんな衝撃の事実を告げられ、絶句する。嫌な沈黙が流れた時、部屋に看護師さんが入って来た。

「せ、成功です！！手術は成功し一命を取り留めました！」一気に部屋が歓喜に包まれる。その言葉を聞いた瞬間すべての不安が取り除かれ涙があふれる。そして、安心したのか、ドツと疲れを感じまた、意識を失うのだった。

- - - - -

あの後、2日も寝込んだらしい。ゼストさんが教えてくれた。そして、母さんの様態も。なんでも。命には別状はないらしいのだが、もう、魔導師としての生活はできないらしい。その点についてはもう母さんも引退しているので問題ないのだが、問題は下半身不髄ということだ。なんでも、リンカーコアが吸収された際、魔力減少に伴い、他の器官が正常に戻そうと無理をしたためらしい。人間の体は異常が起こった際それに反応して対処しようとするので、本来ならないリンカーコアという器官が急激に弱体化した事によって、他の器官に負荷がかかったようだ。母さんは車いす生活らしい。

それを聞いたオレはある決意をする。

「ゼストさんオレ魔導師になる。それも戦える医務官に！今回のように何もできないなんて嫌だし、それにただ医者になったとしても、大事な人を守れない。だから、傷ついた人をなくすために医者になるし、傷つかせないように魔導師になる！だから、オレに魔法を教えてくださいませんか！？」

ゼストは目を閉じ考える……そして、目を開ける。

「お前の目指す道はかなり険しいぞ。それこそ、執務官になるよりもはるかに。おまえにその茨の道を進む覚悟が有るか？」

真剣なまなざしで問う。それに、オレも答える。

「有ります。オレは必ずなってみせます。そして、母さんを治して見せます！！母さんを守って見せます！！」

その言葉にゼストも頷き

「オレは厳しいぞ。甘えは許さないからな。それと、後方系の魔法はメガ・ヌに教えてもらえ。あいつは、後方支援のプロだからな。回復系から転移系、結界、召喚となんでもこなす。あいつから得るものは多いだろう。」

「は、はい。よろしくおねがいします。」

そうして、魔導師の世界に踏み出すのだった。

第2話 設定

主人公 ジン・ヤナギバ

年齢 なのは達より一つ下

性格 比較的に丁寧語で話すが怒った時はその限りではない。ある事件を契機に考え方がシビアになり性格が変わり始めた。事件後はやる気を見せる事はない。ただ失ってはいない。めんどくさがり屋でもある。戦闘の際は飄々とした感じで戦うが、本気になった時は割とカッコイイ。雰囲気さがりと変わる。本気になると髪をかき上げるのは癖。

容姿 身長 177cm 赤みがかった黒髪は下ろしている。顔はイケメンな方。

資格 医務官（事件後は身内以外ではほとんどしていない） デバイスマスターA

魔力 AA+（リミッター時はBランク）

魔導師ランク 空戦 C

戦闘スタイル 近代ベルカ式

レアスキル 魔力変換資質 爆発 魔力を爆弾に変える事が出来る

紹介

闇の書事件の被害者の一人。ヴォルケンリッターに復讐しようとは思わないが快くは思っていない。発言にかなりの棘がある。はやてのことは気にしていない。例外としてリインフォース？とは仲が良い。シグナムやヴィータとは仲が悪い。ただ、弱くては何もできないと一つの真理をわからせてくれた事は唯一感謝している。

比較的頭はいいので医学書の類は子供のころに制覇する。得意分野はリンカーコアに関する物。そのせいで疑似リンカーコアの製作までしてしまう（発展途上）

戦闘スタイルはいろんな魔法を駆使し銃での戦いが主。事件前は正當な戦いをしていたが事件後は、相手を罠に嵌めたりする戦法をとるようになった。相手の魔法を利用するカウンタertype。普段は自分でリミッターをつけ、本気を出す時にはずす。

射撃に関しては威力よりも正確性と速さを重視する。誘導弾は弾速が遅くなるので嵌める時にしか使わない。集束魔法が使えないのであるののようなレーザービームは撃てないがそこは工夫する

魔力がAA+なのに、ランクがCなのはめんどくさくて昇格試験を受けていないからというのもあるが、戦闘スタイルをあまり見せたくないため（見せると何かしらの文句を言われるから）

魔力運用はメガ・ヌの指導のもとすごい事になっている。通常、魔法に必要な魔力を10とした場合、4〜5で使える。

純粋な戦闘ではなのはには勝てないが、あらかじめ戦い方がわかっている相手ならやり方によっては勝てる。

魔力ランクが高いのは闇の書のせいである。もともとはBくらいしかなかったのだが、超回復でもしたのか、もとの魔力値より多くなってしまった。詳しい原因はわかっていない。

レアスキルというわけではないが後方支援魔法に抜群に相性がいい。幻術も得意。オリジナル魔法をいくつか持っている。基本的にはジンにしか使えない。その代わり攻撃魔法に相性が悪く集束魔法を撃てない。誘導弾もそこまで、多くは操作できない。

デバイス（ゼストから貰ったものを自分で改良）

ファントム・トリック 非人格型アームドデバイス

機能多数。詳細は……

ユーリィヤナギバ

ジンの母

昔は武装局員として働いていたらしい。ランク、階級は不明。

ジンの父

昔事故で死んだらしい。地球出身で実はジンは地球に行った事がある。本人は地球と認識してないが・・

第3話 あんたらを許す気はねえ（前書き）

かなり独自設定がありますが、ご容赦ください

第3話 あんたらを許す気はねえ

病院で決意したあの日から、ゼストさん達に訓練をつけてもらっている。ゼストさん達も仕事があるので毎日というわけではないが、基礎を教わってそれをひたすら反復その繰り返しを続けた。基礎をないがしろにすると、その先必ず伸びなくなるとゼストさんが言うのできつちりとやっている。

メガ・ヌさんには、簡単な支援魔法を教わった。ただ、相性がいいのか、メガ・ヌさんも驚くほどの修得技術を見せ、基本的な魔法はあらかた覚えた。今はこの精度を高めている最中である。

そんな感じで1年ほど過ごした。母さんは遅く車いす生活でも以前とあまり変わらない。階段でも魔法が発達したミッドなら、簡単に登れるような設計がされているので、障害者やご老体にはありがたい。

母さんもオレの目標は応援してくれているので、問題は特に起こらない。一度ゼストさんのかわりにクイントさんが模擬戦の代わりをしてくれた時が有った。

ゼストさんは加減をやってくれていたのだが、クイントさんは加減が下手らしくかなりブツ飛ばしてしまった。非殺傷設定なので大事にはならなかったが、体はボロボロだった。その状態で家に帰ったらなにか言われるかなと思ったのだが、だらしないわねえと笑顔で言われてしまった。

クイントさんの旦那さんのゲンヤさん（この時初めて知りあった）も子供相手に申し訳ないと謝り来た際も、もっとやってという始末。オレに何か、恨みでもあるのだろうか？

- - - - -
- - - - -
- - - - -

最近ようやく医学について学べるようになった。医学書の類は、無限書庫にあるものをひたすらに呼んだので、知識に関しては、そこらへんの医者よりもある。メガ・又さんにうちの子の家庭教師をしてくれないかしらと本気で頼まれた事が有る。

メガ・又さんの娘ルーテシア（愛称ルー）はまだ、一歳になったばかりなので、もっと大きくなったら良いですよとだけ言っておいた。その言葉で気を良くしたメガ・又さんは、知り合いの医務官に連絡を取ってくれた。

その医務官さん（ジャック先生）と話した後、いくつか試験をさせられた。これは、勉強してきた内容なので、全部できたと思う。その結果をジャック先生が見て、驚いた感じで言った

「このテストは去年行われた医務官試験の筆記試験の方だ。君はそれを満点。去年合格したどの合格者たちよりも上だ。」

その事実にびっくりする。その後、驚いているおれにジャックさんは続ける。

「ただ、メガ・ヌの話では回復魔法にかなりの適性があるようだ、まだまだ、経験不足。それなら、私のもとで助手として働いてみないか？なに、心配はするな。此処ミッドは実力主義だ君のような子供でも実力さえ示せばまわりから、何も言われない。」

「……やります。やらせてください！」

「よろしい。私は魔法は使えないがそれ以外の事を全て君に伝えよう」

それからは、ひたすら経験を積んだ。患者の診察（これが一番大事だからしっかりやること）から、簡単なケガの治療はまかせてくれた。そうこうして一年ほどで医務官補佐の資格をとり手術の手伝いもできるようになった。

自分でも魔法の改良を重ねリンカーコアに関することなら、ジャック先生よりも上である。

仕事にも慣れてきた冬。今まで担当した中で一番の患者が運ばれてきた。若くして戦技教導官となった高町なのはである。

体は重症で、リンカーコアにひどいダメージを負ったようだ。当然、ジャック先生から手術の要請がされた。だが、オレは悩んでいる。なぜなら、母さんを下半身不随に追いやった連中の一人がその少女のそばにいたからである。赤い少女は泣きながら、なのはを助けてくれと叫んでいる。

その少女を見た瞬間、オレの中の何かがサッと引いて行くのがわかった。闇の書の顛末はゼストさんから聞いて知っている。ヴォルケンリッターがなぜ魔力を集めていたのかも。だが、理解はできても、納得はできない。そんな葛藤の中で、患者の治療をできるのだろうか？そんな、悩んでいるオレを見てジャック先生が真剣な顔をして言った。

「君が、何を悩んでいるのか知らないが、助けられる患者がいれば助けるのが医者というものだ。患者にどんな背景があつたとしても、命を救うのが医者の仕事だ。だから君は医務官を目指したのではなかったのか？」

その言葉に昔ゼストに決意した言葉を思い出す。

「（そうだ。オレは、傷ついた人をなくすために医者になると決めたんだ。だから、誰であろうと救って見せる！）」

オレの表情を見たジャック先生はその顔なら大丈夫だといって手術室に向かった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

高町なのはの様態はひどいものだった。

全身に直撃した、殺傷設定の攻撃魔法。

そのうちバリアジャケットを貫通したのは大きいので胸付近と腹

腹部に直撃したのがデカイ。胸部に直撃したのは魔法弾が2発。これが、リンカーコアにダメージを与えている

腹部については、肝臓に当たって肝機能の一時低下に肋骨3本骨折。魔法弾が貫通したため脊髄も損傷、一時的にだが下半身不随状態。

ズタボロである。これで、生きていられるとは……

手術の手順をジャック先生が確認する。オレは回復魔法をかけながら止血をし機能不全を起こしてる器官を一時的にだが機能させる。その間にジャック先生達が体の手術に入る。基本的にミッドは魔法でも治療してしまうのだが、ジャック先生は非魔導師、魔法は使えない。だが、ジャック先生には「神のメスさばき」と呼ばれるほどの腕前で、魔導師以上の成果を上げている。

ジャック先生を他の人たちがサポートしながら、手術は順調に進んでいく。メスの早さが尋常ではない。脊髄に入り込んだ骨をきれいに取り除き、脊髄を圧迫していた骨も治し、体の治療はとりあえずは成功した。残るはリンカーコアの治療なのだが、患者の体力が持たないので回復を待つてからという事になった。

当然その治療をするのはオレなので頑張らなければならない。見た感じだと、成功率も半分に満たないだろう。彼女は魔導師として再起できないかもしれない。だが、母さんの事もあるし、必ず成功させ母さんを治す決意を固めるのだった。

- - - - -

後日、高町さんの検診をする事になった。

コンコン

「検診の時間なので、検診に来ました。」

「ど、どうぞ」何だか暗い感じの声。

「失礼します。今回あなたの担当医の一人になった。ジン〃ヤナギバです。」

「こ、子供？」オレの容姿に疑問をもったらしい

「ええ。それでも、此处で働かせてもらっています。」高町さんが不安のある顔をする。そこにジャック先生が入って来た。

「ハハハ、確かに彼は、君よりも一つ歳下だが、私よりも、リンカーコアに関する事なら詳しい。君の体の方はこれから、リハビリで頑張っていくしかないが、リンカーコアの方は彼に任せるほかない。」

そう言つて部屋を出る先生何しに来たんだ？

「そ、そうですか。よろしく願いしますヤナギバ先生。」

「先生は結構ですよ。歳は私の方が下みたいですし。それと、ジンで結構です。」

「うん。よろしくねジン君。わたし、なのは。高町なのはだよ。」

「知っています。カルテ見ましたから。」

「そうだよ。にやはは。」笑っているようだがどこか表情が暗い。

「術後の経過ですが、先ほどジャック先生が言ったように体の方はリハビリをすれば何とかなるでしょう。後遺症もジャック先生のおかげでないようです。ですが、リンカーコアの方はそういわけにはいきません。難しい手術になる上成功率もそれほど高くない。安静にしてれば問題ありませんが、魔導師の復帰は無理でしょう。」

「……………」さらに、暗くなるのは

「魔法を使えなくなるかもしれない事がそんなに辛いですか？」

「え？」なのはが、驚く

「貴方のリンカーコアを見ればわかります。あれは、魔法弾の傷だけでなく、かなり酷使されていました。普段から相当魔法を使っていたでしょう。それゆえに、貴方の魔法への思いもわかります。お辛いですか？」

「……………うん。辛いというより怖いかな。」

「怖い？」

「私は魔法を知っているんな人と知り合って友達になれた。でも、もし魔法がなかったら……。それになにより、もう、二度と空を飛べなくなったらと思うと……。怖い。だから、私はもう一度空を飛びたい！！」

なのはの思いを聞いて考えるジン……。そして

「わかりました。なら貴方がもう一度空に羽ばたけるように協力しましょう。本当は治る確率が半分もなかったので、このまま、安静に過ごしてもらいたかったんですが……。あなたの思いを無碍にすることはできません。」

「そ、それじゃー！！」顔が明るくなるなのは

「落ち着いてください。まだ、成功すると限ったわけではありません。この手術は外からリンカーコアを治療するのではなく、直接リンカーコアを治療しなければなりません。ここまでは、わかりますか？」

「う、うん」

「そうすると、手術中にリンカーコアを体内から出さなければなりません。ただ、私がそれをしてしまうと、リンカーコアを治療できません。この治療法は最近私が確立したので、他の人にはできません。だから、手術中にリンカーコアを摘出してくれる人を探さなければなりません。しかし、体内にあるリンカーコアを出せる技量をもった人はこの病院では私一人です。他の病院を当たってみますが

おそらくいいでしょう。それほどまでに難しい事なのです。」

「だから、それができる人が見つかるまで、待つてくれませんか？私の確立したこの方法なら、成功率は、かなり高くなりますが、外からの治療では成功率は30%にも満たないでしょう。それは、医者としては容認できません。」

ジンの真剣な表情に対して呆けるなのは。ジンがわからなかったかと聞こうとした時

「あのね、ジン君。私、リンカーコアを摘出できる人知ってる。そう言う魔法が得意なんだって」

「え？」

「シャマルさんって言って私の友達の人。」

「・・・・・・」

「あの〜ジン君？」

「ハア〜一番の難所だを持っていたんですけどね。こつも簡単に見つかるとは・・・・。それなら、その人に連絡とれますか？協力してくれるか頼んでみます。」

「う、うん。はやてちゃんに聞いてみるから、回線開いても良い？」

「（はやて？どこかで聞いたような・・・）構わないですよ。此処は個室ですし、他の器機に影響はないでしょうから。私はいったん戻

ります。ジャック先生にこの事を伝えてきます。」

部屋を出て行きジャック先生に先ほどの事を伝える。その話を聞いた先生も心配そうだったが、できるかというを質問にできますと答えたら、必ず成功させると言ってくれた。

その後部屋に戻ってみると連絡を終えたのか、なのはが待っていた。

「連絡はとれましたか？」

「うん。シャマルさんとはやてちゃん達急いで来てくれるって。」

「達？他の方も来るんですか？基本的に面会は控えてもらいたいんですが・・・」

「にやはは、ごめんね。私が怪我した事を知ってみんな来てくれるみたい。みんな仕事があるのに」

「それは、仕方ないですね。折角来たくれたお友達を返すのは悪いですから。特別ですよ。」

「にやはは、ありがとうジン君」

しばらくしてから、なのはの友達たちが来た。

コンコン

「はい。どうぞ」

ガラー 勢いよくドアが開けられる

「なのは！」 「なのはちゃん！」

金髪の少女と茶髪の少女が入ってくる

「フェイトちゃんに、はやてちゃん。ごめんね、こんな格好で。来てくれてありがとう。」

「そんなこと、どうでもいいよ。それで、なのは、ケガは大丈夫なの？」

「そやで、友達を心配するなんてあたりまえやんか。ケガは大丈夫なん？ ヴィータから聞いた時は心臓止まるかと思ったわ。」

「にやはは。ケガの治療は成功したの。でも。リハビリが必要なんだって。」

「何かあつたら私に言つてすぐに飛んでくるから」

「うれしいけど、フェイトちゃんは執務官の試験で大変だから、頼めないよ」

「あの～お話中の所申し訳ないんですが、協力してくれる方はどちらなんでしょうか。」 ジンが話に入る

「ああ、先生？ですか。なのはちゃんから聞いてたけどホンマうち

らと変わらんくらいやな。あ、それで、うちらではないんです。あ
つちにいる・・・シャル、先生に自己紹介してや」

ジンの後ろの方を指して言う。ジンが振り向いた時、一瞬時が止ま
った。

「はいはい、はやてちゃん。私がなのはちゃんの手術につきあうこ
とになったシャルで・・・」シャルもこちらの顔を見て気付
いたらしい。

「・・・」ジンからのなんとも言えないような、ま
るで殺気に近い何かが、放たれる。

「ど、どうしたん！？二人って知り合いなん？でも、それにしては・
・・・」

「ええ、知り合いと言えば知り合いですね。事件の加害者と被害者
の関係ですね」

「シャ、シャル、ま、まさか・・・」

「そうよはやてちゃん。私達は彼から魔力を蒐集した事が有るわ。
そして、ごめんなさい。貴方達親子にはきちんと謝らなければいけ
なかったのに・・・」

「ああ、形だけの謝罪ならいらんですよ。ム力つくだけなんで。
あれからもう3年。謝る気なんてなかったんでしょ。そもそも、オ

レらのこと今まで忘れてたんでしょ。楽しそうだなによりです。」

「ち、違う。シャル達はちゃんと罪の償いをしてる！保護観察中なっってからだって、ちゃんと管理局の任務こなしてる。」はやてが否定する

「貴方が、八神はやてさんでしたか。道理で聞いたことある名だと思った。それで、闇の書の主が守護騎士を庇いますか？よかったですネ？良い主に恵まれて。それで、楽しくなって被害者はどうでも良くなつたと。」

「違うわ。そんな事を思ってもいない！ただ、みんな忙しくて・・・」
「シャルが釈明する。」

「・・・。貴方達バカにしているんですか？何が忙しいだ！！そもそも、管理局で働いたからって、なんで、それが、罪滅ぼしになる！！お前ら、俺たちに謝る事が先じゃないのか！？ふざけてんじやねえ！！！」

普段の口調からずいぶんと変わって激怒する。怒りを抑えられなかったようだ。

「ご、ごめんなさい。」シャルが泣きながら言う

「だから、さつきも言っただろうが。最初から謝る気なんてないから謝るな！！イラつく！！！」

はやてが割って入る。

「たしかに、シャル達がした事は悪かったと思う。主として謝るでも、みんな私のために仕方なく……」

「事の顛末は聞いてますから言わなくても大丈夫ですよ。貴方を救うためにやったことだとも。それでも、そいつらのせいで、母さんが下半身不随になった事には変わりない！！それでも、許せと言うのか！！仕方なかったと……できるわけないだろ！！」

「そ、そんな！？シ、シャル蒐集は魔力を奪うだけじゃないん？」

落ち込んだままシャルが告げる

「過剰に奪うと人の器官に深刻なダメージを与える事が有るんです。」

「

「そ、そんな……」事の大きさにはやてが絶句する。

「だから、オレはお前たちを許さない。だけど、今、オレは医者だ。どんなにあんたらが気に食わなくても、患者治すのが仕事だ。だから、手を貸せ。謝罪は行動で示せ！もしこれが成功したら母さんの治療にも手伝ってもらうからな。」

「は、はい。」10歳の少年に圧倒されるシャル。

その後、嫌々ながらもシャルと手術の手順を確認した。シャル

が旅の鏡でリンカーコアを摘出、それをジンが治療するという事になる。ジンは治療に専念するためにサポートすべてをシャルルにまかせた。手術はこれから行われる。

- - - - -

手術室

「それでは、高町さん準備はよろしいですか？」

「は、はい。お願いします。」

「そちらも準備はいいですか？失敗は許されませんよ。」

「大丈夫です。」シャルルが答える

「それでは始めます。麻酔魔法で痛みはないと思いますがじっとしててください。一応バインドで固定しますが・・・」

「は、はい」

「サポートお願いします。バインドをしてから麻酔魔法をかけて、リンカーコアを摘出してください。」

「わかりました。行きます」そういつと、準備が整う。なのはのリンカーコアが出てきた。

それに合わせてジンも魔法を展開。回復魔法というより移植魔法だ。

展開した魔法内で細胞をを活性化させ作り変える物。人間に使用すれば寿命を縮めてしまうものだが、リンカーコアは別だ。常人にはない器官なので、他の器官とは構成が違う。魔力を取り入れられるようになっていくからである。なら、もとからちゃんとしてる状態の魔力素を取り込ませ治してしまおうというもの。

ただ、これには精密な魔力操作と再生させた魔力細胞を取り込ませるため、高度な技術が必要とする。そして時間との勝負でもある。再生した魔力細胞はその状態ではすぐに戻ってしまうため迅速に取り込ませなければならぬ。

でも、焦ってしまうと失敗してしまう。慎重にかつ素早くと言った相反する二つの事をなさなければならぬ。だが、ジンはやってのける。ジャック先生からそういう技術は学んだ。

ジンは必死になりながらも治療していく。シャルも常に回復魔法をかけながら作業をしているので疲労困憊。そんな状態がしばらく続き手術は無事成功した。

成功したとたんジンは倒れ、シャルも床に尻をついた。ジンは成功した事で母親の治療が漸くできる事に歓喜し意識を失うのだった。

- - - - -

意識覚醒

「.....!」

「気づいたか？」

「先生・・・オレやりました。」

「ああ、見事だ。これで、お前の母親も治るだろう。」ジャック先生の言葉で改めて実感したのか、目から涙をこぼしていた。

「高町さんはどうしてますか？」

「今は病室だ。お前の治療でリンカーコアは治ったが体はまだ、言う事を聞かんからな。お休み中だ。」

「一応、執刀医として、術後の様子を確認してきます。」

「ああ」

.....

コンコン

「はい」

「ジンです。診察に来ました。」

「どうぞ。」

そう言われて中に入る。中にいたのは先ほどのメンバー。とりあえずは、仕事をする

「術後はどうですか？リンカーコアは大丈夫なはずですが」

「もう、バッチリです。さっき魔法も使えたから。ジン君ありがとう！」満面の笑みでお礼を言うのは。少し涙も混じってる。

「仕事ですから。後はリハビリを頑張ってください。そこからは貴方の頑張り次第です。もう一度空へもどりたいたいなら。」

「う、うん！！」これにも元気よくうなづくのは。その後はフェイトと話しこんでいる。

「それで、約束の件ですが。母の治療に協力してもらいます。」シヤマルに話を振る

「わかっています。喜んで手伝いましょう。あなたのお母さんにも謝らなければなりませんし」

「いえ、謝罪はもう結構です。治療さえきちんと手伝ってくれれば問題ありません。」

「・・・・・・・・・・」

「手術の準備ができたならこちらから、連絡します。では」そう言っ
てその場を去るジン。なのはが何か言いたそうだったが出っ

った。

ジンが出て行った部屋は妙に暗い雰囲気だった。

第4話 ジン

なのはの治療を終えてから、数日後、母さんの治療が始まった。連絡を入れた際に、他の守護騎士たちが謝りに来るとか言い出したので、丁重にお断りした。ふざけるなど。

これ以上こちらを怒らすなら考えがあると言ったら、今回は諦めてくれた。それで、今は母さんの治療中である。

一度体験しているので、前回のような焦りはなく、落ち着いて作業する事が出来た。手術も無事成功し母さんのリンカーコアも治った。それにより、機能不全を起こしていた器官が正常に機能し始め下半身不随も治ったようだ。ただ、何年も使ってなかったので感覚を取り戻すまでに時間がかかるようだ。

母さんならすぐに取り戻しそうだが……

シャマルには治療後有無を言わず追い払った。もう二度と会わない事を祈ろう。病院でやったのでこちらの連絡先はわからないだろう。

そして、オレは仕事場を変えることにした。仕事場に押し掛けられとも困るので。先日なのはは治療法が医師会で認められ、オレが出した論文も評価されたことから、試験免除で特例として医務官の資格を得る事が出来た。ジャック先生には感謝だ。あの人のおかげでここまで来れたようなものだ。

病院をやめると言った時も残念そうな顔をしていたが、最後は笑って見送ってくれた。それと、担当医でもあったのだのにも病院を去る事を伝える。

「ええ、高町さんの治療も完了しましたし、リハビリは専門の方がいらっしゃるので、ここでの私の医者の仕事は終わりましたので。仕事場を変えようと思います。」

なのはが悲しそうな顔をする

「やっぱり、わたしのせいだね。私が、シャルマルさん達を紹介したから……」

「勘違いしないでください。今回の事にあなたは一切関係ありません。これは、わたくし事なので、干渉は不要です。貴方は自分の事だけを考えてリハビリに励んでください。また、空に戻るのです。う？」

「う、うん」どこか、暗い

「別に今生の別れというわけでもないのです、そこまで気にしないでください。あなたは、無理をする傾向があるので、いずれまた会うでしょう。医者としてはそうあって欲しくはありませんが……」

「にやはは。そうだね、これが最後ってわけじゃないもんね。それ

じやージン君。また、何かあつたらお願いね。」

「何もない事を願ってますよ。人間健康が一番ですから。それではまたどこかで。」

「うん。またね。」そう言つて別れを告げ病院を後にした。

- - - - -

病院の次にやつて来た仕事場はゼストさん達がいる首都防衛隊の医務官として働く事になった。はずなのだが、なぜか、ゼスト隊に込みこまれている。フルバックでメガ・又さんのサポートと遊撃でやるらしい。そのせいで、ゼストさん達にしごかれている。最近、近接戦闘は無理だと判断し銃を使った遠距離攻撃を主体としている。

メガ・又さんの協力もあつて新しい魔法も覚え、ゼスト隊でも問題なく付いて行けるようになった。転移に関してはメガ・又さんより優れているらしい。

そんな日々を送っていた頃に一つの任務があつた。なんでも、ゼストさんが追っていた違法研究所の居場所が分かつたらしい。そこでは、戦闘機人の研究がおこなわれているようだ。クイントさんが怒っていた。なんでも、戦闘機人だった子供二人を保護したようだ。だから、そんな研究をしている事が許せないらしい。

今回のオレは役目は負傷者の治療と援護が主。

今、ゼスト隊は違法研究所に向かっている。

「ジン。今回がお前の初陣になるわけだが、気負わなくて良い。お前は怪我人が出たら、安全なところへ避難させ治療を行えば良い。」

「はい。」

「大丈夫よ。私もいるし。それに、転移なら貴方の方がうまいわ。自信を持ちなさい。」不安そうな顔をしたオレを見て、メガ・ヌさんが声をかけてくれる。少し気が楽になった。ま、本当に危なくなるまでオレの出番はないし、危なくなることなんてほとんどないだろう。

その甘い考えがすぐに崩れる事になった。

- - - - -

「B班応答しろ。C班、D班は？」ゼストが問う

「ダメです。連絡付きません。」クイントが答える。

「残っているのは、ジンが避難させたやつらとオレ達だけか。アルピーノはどうだ？」

「急所は外れていますが、早く治療しないとまずいかもれません。ジン君もこの空間内じゃうまく転移できないようですし。」

「いや、この魔力結合を阻害する空間の中で、あいつはよくやっている。」

「そうですね……!!」クイントが何かに反応しゼストを押す。

「クツ」機械から放たれた光線がクイントの腹部を貫く。重症だ。

「ナカジマ！クツ、ハアアア！」槍を一閃し先ほど攻撃してきた機械を粉碎する。

ドオオン!!

「ナカジマ、無事か!？」

「は、はい。なんとか……でも、このままでは……」そこに救援に来た、ジンがやってくる。

「ク、クイントさん!? メガ・ヌさんまで!!」予想外の事態に慌てるジン

「落ち着けジン！幸い二人ともまだ息はある。お前が二人を連れて脱出すればまだ間に合う。だから、二人を連れて先に行け！」

「そ、そんな、ゼストさんも一緒に・・・」

「この空間では、いくらお前でも二人までが限界だろう。それに、あいつをどうにかしないといけない。」そう言つて、視線の先には小さな銀髪の女の子がいた。ただ、その雰囲気は、少女にあるものではない。

「その二人を回収しにきた。その二人は、ドクターの研究に使えるらしい。だから、置いてつて欲しい。そうすれば、お前達は見逃そう」

「そう言つわけにもいかない。こいつらは大事なオレの部下だ。実験道具にさせる気などさらさらない！！行けジン。二人を連れて」

「ゼストさん！此処はひきましよう。この空間では分が悪い。おそらく、あの子は戦闘機人、魔力がうまく使えないで、勝てる相手では・・・だから」逃げまじようと続けようとした時

「お前は、何のために魔導師になった！！傷ついたものを助けるため、守るためではなかったのか！？今が、その時だ。二人を守り救つて見せろ！！」

「で、でも、オレは、みんなを守りたい！！だから、ここで、ゼストさんを見捨てるなんて・・・」

「うぬぼれるな！！オレは、お前に守ってもらうほど弱くはない！
！お前が師事した男はこの程度でやられる男だったか！？心配する
な、オレは負けん！！だから、お前もお前の役目を果たせ！！」

「・・・わかりました。必ず戻ってきてください。約束破ったら
皆に奢りですから。クイントさんは食べますよー」

「それは、遠慮したいからな・・・だから、勝つ！行けジン！」ゼ
ストが笑みを浮かべ喝を入れてくれた。そんな背中を見て脱出する
のだった。ゼストの姿を見るのはこれが最後だった。

- - - - -

その後研究所を脱出して、すぐに医療班のもとに。オレも治療に加
わった。クイントさんもメガ・又さんもなんとか、一命は取り留め
た。ただ、傷ついた器官のせいで、現場復帰は難しそうだ。おそら
く、内勤になるだろう。

あれから、ゼストさんがいくら待っても帰ってこない。

「ゼストさん・・・」

「大丈夫よ」急に声をかけられ後ろを振りむくとメガ・又さんとク
イントさんがいた

「傷に触りますから寝てた方が良いですよ」

「そうなんだけどね。隊長が帰ってきたら奢ってもらわなきゃいけないし」クイントさんが答える

「聞いていたんですか？」

「ちょっとだけ意識があつたからね」

「あの時、オレがゼストさんを引きとめておけば……」

「ジン君。あまり思い詰めないで。あの時はあれが、最善だった。あなたは、良くやったわ。」メガ・ヌさんが慰めてくれる。

その時

「報告があります。よろしいでしょうか？」ゼスト隊で生き残っていた人が報告に来た

「どうぞ。」メガ・ヌが答える。

「ゼスト隊の約6割が死亡し部隊は解散だそうです。」

「そう。」悲しそうな顔をするメガ・ヌとクイント

「そ、それと、先ほど報告がありまして……ゼスト隊長が殉職したようです」

「え！？・・・う、嘘。嘘でしょ。あのゼストさんが。オレとの約束だってしたのに！！」ジンがとり乱す。

「事実です。」

「うつつ・・・。」自分の頭が真っ白になるのを感じた。

「ま、また、救えなかった・・・。あの時、こうならないために努力してきたのに。何も、何も変わっていないじゃないか！！！」拳を地面に突き刺し叫ぶ

「ジン君・・・貴方は変わったわ。貴方がいなかったら私達もゼスト隊の人たちも全員死んでいたかもしれない。あなたは、これだけの命を救ったのよ。誇りなさい。ゼスト隊長からの命令を守り抜いた事に」

クイントが告げる

「で、でも、オレは、本当に大事な人を見殺しにしてしまった。あそこでオレが頑張っていれば・・・。」

「あの空間では仕方のなかった事よ。私だってあなたはどうまく、転移できなかった。そんな中で、貴方は最善を尽くしたわ。むしろ責任があるのは私達の方。すぐにやられてしまったわ。」

「それでも、オレは、守りたかったんです……守りたかったんですよ……」涙を流しながら吐き出す。

「オレは、父さんを知らない。オレが生まれる頃には事故で亡くなったって聞いた。だから、ゼストさんに鍛えてもらって強くしてもらって、そんなゼストさんが、初めて、父さんのようだと思った。なのに、おれは、また、大事な人を救えなかった……殴っていた手が血で滲んでいる。」

「やめなさい。ジン君そんなことをしても隊長は喜ばないわ……!」
メガ・ヌが止める。

「……………」うつむいたまま返事がない。クイントとメガ・ヌが心配するが

「少し、一人にしてもらえますか?」

クイントは止めようとしたがメガ・ヌが制す。ここは、一人にした方がいいと

そのやり取りを見ずジンは誰もいない岩場の方へ歩いて行った。

「ゼストさん・・・」目の焦点があつてないジンがつぶやく。

「う、うううう」体を丸くし膝を抱えるようにして泣く。これ以上ないくらいに

そんな様子を影から隠れて追いかけてきたクイントとメガ・ヌが見ている。

「あの子には辛い思いをさせてしまったわね。私達の命の恩人なのに、私たちでは救つてあげる事が出来ない。」クイントが言う

「そうね。あんな風に隠れて泣くしかできないなんて。まだ子供なのに・・・声を出して泣かしてあげることもしかないなんて、私達は無力ね」メガ・ヌがジンを見ながら言う。

「隊長を慕っていたぶん、感情を見せるのを隠そうとしてしまうんだわ。そんなとこまで、隊長に似なくても良いのに。」

「私達がしてあげられる事は本当に何も無い。あの子が立ち直るのを待つてあげることしかできない。」

「それでも、傍にいてあげることくらいはできるわ。あの子がくじけそうになったら支えてあげましょう。」

「そうね」ジンを見ながらクイントとメガ・ヌが決意する。あの小さな少年が立ち直れるように頑張ろうと。

空は泣き疲れて膝を抱えたまま眠るのだった。

――
起きたらベットの上だった。見たことある部屋だ。

「あら、起きた？」聞き覚えのある声が

「か、かあさん？」

「そうよ。あんたが倒れたっていうからお見舞いにきたのよ。全く
だらしないわね」ちよっと困ったように言う

「お、オレは、ど、どうして、ここに？」かつて勤めていた病院の
部屋である。

「あんたが、倒れたから、クイント達が運び込んだのよ。外傷がな
いから寝てれば大丈夫だろうって。」

「そ、そう。」「今はそんな事はどうでもいい。オレは……」

「聞いたわ。隊長の事。それで、いつまであんたはそうしているつ
もり？」

「え？」

「隊長は死んだ。その事実は変わらない。でも、隊長が生かした、生きて欲しいと思ったあんたがずっとそのままじゃ、隊長も報われない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「別に悲しむなと言っているわけじゃないわ。ただ、前を向きなさい。そして胸を張りなさい。あんたは隊長が下した最後の命令を守った。それにあなたがそんなじゃ、助けられたクイント達の立場がないわ。」

「・・・・・・・・」

「あなたは、医務官として局員として任務を成し遂げた。そして、死ぬべきではない命を救うことができた。その事は誇っても良いの。確かに、隊長を救うことはできなかった。でも、隊長が命をかけて守ろうとした部下は救うことはできた。それは、立派な事よ。」

「・・・」

「それに、戦場にたった局員は多かれ少なかれ覚悟は決めている。あなたが悩み続けるのは隊長に対する冒とくよ」

「こつ言つ時、母親って息子にやさしくするもんじゃないの？」少

し顔が晴れたようだ。

「あら？そうして欲しいの？それなら、ほら母さんの胸で泣きなさい」手を広げてふざけたように言う

「遠慮します。とりあえず、出て行ってもらえますか？」

「そう？久しぶりの親子のスキンシップなのに・・・」

そう言つて部屋を出て行く母さん

「母さん、ありがとう」恥ずかしそうに言うジン

「どういたしましたて」につこりと笑つて出て行った。

「あの子はもう大丈夫よ。ただ、まだ、道を間違えるかもしれないから、その時はお願いね」

部屋を出て病院服のメガ・ヌとクイントに話しかける

「はい。でも、先輩にはかありませんね。私達は何もできなかったのに・・・」

クイントが申し訳なさそうに言う。

「それでも、あの子の親ですからね。貴方達も子供を悲しませるような事しちゃダメよ。もう、立派なお母さんなんだから。」

「そうですね。どの道ゼスト隊は解散。私達も内勤に異動になりますから大丈夫でしょう。これからはルーテシアとの時間も増えます。」

「そうね。クイントもお母さんなんだからね」

「スバルとギンガを悲しませるような事はもうないでしょう。母親としての仕事が増えるのは大変ですが。」嬉しそうに言う

「それが、親よ。その内二人の子供に会いに行くつもりだからよろしくね。」

「はい、ぜひ。かわいいですよ。」メガ・ヌが言う

「うちの子達も負けないわ」

「残念実はうちの子が一番。どう？今の内に仲良くしとく？」

「そうね、ジン君は確かに優良物件ですよ。今度スバルやギンガに会わせようかな」クイントの目は若干本気だ

「あら、ルーテシアに会うのが先よ。それに、ジン君はルーの先生になってくれるはずだし」

「あの子は頭は良いからね。」母親ズのほのぼのとした会話が終わって別れる事になった。退院後、ジンが大変になるのは……

第5話 退院

母さんが来てから次の日。本当は退院できるのだが、母さんが休みなさいと言ってまだ入院している。メガ・又さんやクイントさんも療養中だ。

部屋にいてもあまりやる事がないので中庭にでも散歩でもしようと思ひ、行ってみる事にした。中庭にはベンチが置いてあり何人かが座って話をしていた。誰も座ってない席に座りポうつと空を見上げる。ゼストの事は吹っ切れたとは言い難いが、前を向いて行こうと思う。少し思うところはあるが・・・

「となりいい？」急に話しかけられ、驚いたが、空を見たまま気にせず言った。

「別にオレの席ってわけじゃないんで、どうぞご勝手に。」

「もう、ジン君冷たいんだから。」

「??」気になって声をかけてきた人を見る。高町なのはだった。

「あ、やっとこっち向いてくれたね。前に別れてからいつ会えるかと思ったけどわりと早かったね。」

「そ、そうですね。リハビリは順調そうですね」なのはが車いすではなく松葉杖でいるのを見てそう思った。

「うん。辛いけど、もう一度空に戻りたいから。ジン君も協力してくれまし」

「医者としての仕事をしたまです。」

「にははは、あいかわらず、そっけないね。でも前よりもっと、そっけ無い感じがする。病院服だし何かあったの？」

「ただの疲労ですよ。こう見えても子供なんですよ。貴方より年下の。仕事のし過ぎで療養中です。」

「もう、無茶しちゃだめだよ。」

「貴方に言われるとは……。」

「にははは。でも、ホント大丈夫？なんか辛そうだよ」

「実は結構つらいですよ。だから、こうして休んでいるわけですが・

」

「休息はしっかりとらなきゃね」そんな感じで話していると遠くから声がかかった。

「なーのーは！！もう！どこ行つてたの！いきなりいなくなつて心配したんだから」金髪の子が走つて来た。

「にやはは、ごめんねフェイトちゃん。ちょっと気になる子を見かけたからつい。」笑つて言うのは

「それなら、それで、言つてくれれば・・・その隣の子誰？あつたことある気がするんだけど」

「ああ、この子はジン君つて言つて私の治療をしてくれたお医者様なの」

「・・・あーそうだ。なのはの先生。わ、私はフェイト・T・ハラオウンです。なのはの事、ありがとうございます。」深々と頭を下げるフェイト

「なんか、高町さんのお母さんみたいですネ。それと、礼は結構です。仕事をしたまでです。あと敬語も」

「ジン君は私達より一つ年下なんだよ。」

「そ、そうなんだ。よろしくね。」

「そう言えば、執務官を目指しているんですけどっけ？前にそんな事

を高町さんが言っていたような・・・」

「わあー、ジン君ダメ。それは、今は禁句だつて！」なのはがあわてて口をふさごうとするが遅かった。発言したジンは何の事かと思つたがフェイトを見て原因が分かった。暗い雰囲気で地面に不合格の字を書いている。気まずい

「私なんか、私なんて、私・・・」なんかのスイッチを押してしまつたようだ。

「フェイトちゃんは今年の執務官試験落ちてるの。私のリハビリとか手伝つてくれているから・・・」申し訳なさそうな感じで言うのは

「それであんな状態に。もどす方法は？」

「時間が経つのを待つしかないの。フェイトちゃん一度落ち込むとなかなか自分の世界から抜け出せなくて」

「ハァー厄介な人ですね。しかし、このままここにいられてもあれですし、少々心苦しいですが。」

「な、なにする気なの？」

「ああ！！高町さんが苦しんで今にも倒れそうだ！！」その言葉を聞いてなのは首をかしげようとしたが、閃光に邪魔された。

「な、なのは大丈夫。早く医者の人に見せなきゃ。私がソニックホームを使えばすぐだから待って今すぐにでも。バルディ「ドコ」「い、痛い」本気でデバイスを展開しようとしたためチョップして黙らせた。

「そんなことしたら、病院が大騒ぎになるんでやめてもらえます？」

「ジ、ジン君それはひどい」なのはが苦言と呈す。

「それに高町さんは良くみたら大丈夫なので心配しないでください」話題のすり替え殴った事を気付かせない

「ホント！？良かったあ！なのはに何かあったらと思うと心配で心配で」フェイトがアホで良かった

「なんかお母さんというより奥さんて感じですね。」

「ふえ、私とフェイトちゃんはそんなじゃないよ！！」顔を赤くして言うのは

「冗談ですよ。慌てると本当に見えますよ。」

「もう！ジン君が変な事いうから！」その後なのはをからかっていたがフェイトが発した言葉で気分が悪くなった

「そう言えば、明日ははやて達も来るって。みんな仕事を調節したって言ってた。」

「フェイトちゃんそれは・・・」

「あ！」フェイトもあの現場にいたのでシャルとのやり取りは見ている。

「オレの休暇もここまでか。高町さん。オレはきょう退院します。リハビリ頑張ってください。」

「ジン君。やっぱりシャルさん達と仲直りすることはできない？」

「どうでしょうね？あの人たちを目の前にして冷静でいられる自信はないです。母さんは治りましたが一歩間違えれば死ぬ可能性があったんだ。それを許せるほどオレは人間ができていない。あなただって、家族やそのフェイトさんが襲われて死ぬような事があつたら許せないでしょう？話し合いとかそういうレベルではないはずです。例えばあいつらのせいで空が飛べなくなったらどうしますか？」

「そうだね、ごめんね。たぶん私もそんな事になったら冷静でいられないと思う。私も魔力を吸われたけど体は問題なかったから。被害者って感じじゃないけど。本当に被害を受けた人からすれば許せないものだよね」

「で、でも、なのは。はやて達は罪を償っているし。皆いい人だよ」

「それはそうなんだけどね。私たちがそれを知っていても他の人はそれを知らない。」

「そう言う事。あいつらはまず迷惑をかけたやつら全員に謝罪してから罪を償うべきなんだ。それが、管理局で働く事で罪滅ぼしになるなんて意味がわからない。確かに俺たちみたいな理不尽な被害者は減るかもしれないが、被害を受けた人はそれで終わりとはいかない。あいつらは順番を間違えた。被害者たちがあいつらを許す日はまず来ないだろう。あいつらと知り合いにでもならない限り。」

「・・・・・・・・」フェイトが沈黙する

「そう言う事でオレは他の人に挨拶したら退院するから、また縁があつたら会いましょう。それと、オレの事は秘密にしておいてくださいめんどくさい事になるのは嫌なんで」

「う、うん。またねジン君」なのは困ったような顔をしていたが、了承してくれた。

とりあえず、メガ・ヌさん達に挨拶をしておこう。

――――――――――

コンコン

「どうぞ」メガ・ヌさんとクイントさんの病室に入る

「二人とも調子はどうですか？昨日はお世話になりました。」部屋の中にはゲンヤさんとその子供がいたが、会釈だけして二人にはなしかけた。

「もう大丈夫なの？」

「ええ。まだ、吹っ切れたわけではありませんが、あがいてみようと思います。」

「そう。」オレの表情を見てメガ・ヌさんが察してくれたのか、それ以上何もいわなかった。

「あ！そつだ。紹介するわね。私の娘達。スバル、ギンガ。挨拶なさい」

「ギンガです」 「す、すばる。」ギンガはしっかりとあいさつしてくれたがスバルはギンガの後ろに隠れながらのあいさつだった。

「スバルにギンガね。よろしく。オレはジン・ヤナギバ。クイントさんにはいつもお世話になっているよ」そんな感じであいさつしてゲンヤさんにも挨拶しようとしたが、ゲンヤさんが真剣な表情をして二人の前にたった

「・・・ジン。今回はお前に感謝してもきれない。お前がいなかったら、うちの妻は死んでいた。妻を、クイントを助けてくれてありがとう。」深々と頭を下げる

「あなた・・・」クイントはその様子を見ている。スバルとギンガは良く分からないと言った感じである

「頭をあげてくださいゲンヤさん。オレはオレのやるべき事をしたまでです。実際助けられなかった人もいました。たまたまです。」助けられなかった人の部分で辛そうな顔をしたのを、クイントとメガ・又は気づいた

「それでも、妻を救ってもらった事には変わりない。ほら、ギンガもスバルもお礼を言っとけ。母さんの命の恩人だ」

「恩人！？」「ギンガが反応するがスバルは？な感じである。」

「そうよ。ジン君は私達の命を助けてくれたの。私が貴方達にこうして、会えるのも彼のおかげよ。」

「ホントに？——お兄ちゃん！お母さんを助けてくれてありがとう。」スバルが元気な声でお礼を言う

「私からも母さんを助けてくれてありがとうございました。」二人からお礼を言われなんともやるせない気持ちだった。確かに助けられた人はいたが、ゼストさんを救う事はできなかった。自分の無力さを改めて感じるのだった。それを顔に出すようなことはしないけど

「ここは、素直にお礼を受け取っておいた方がいいのかな。」

「そうね。でないと、私たちの立場がないもの。」クイントが苦笑して言う。

「まあ、無事でなによりです。としか言いようがないんですが・・・
・お礼は受け取っておきますよ」

それで、少しギンガやスバルと話していると（スバルには懐かれた）、メガ・ヌが口を開く

「それで、ジン君は何しに此処に来たの？ 私達の様子を見るためだけではないんでしょう？」

「おおと、忘れてました。オレ今日退院します。ちょっとめんどくさい事になりました」

「めんどくさい事？」

「明日、会いたくないやつらが来るんですよ。以前ここで治療した子がリハビリ中でお見舞いに来るそうです。オレはその人たちに会いたくないので。」

「そ、そう」メガ・ヌは察してくれたようだ。オレの中で会いたくない人なんて闇の書のやつくらいしかない。

「でも、戻る場所なんてないわよ。」

「え！？ど、どういことですか？」クイントに驚愕の事実を告げられて驚く。

「昨日先輩が来て、少し話をしたんだけど、ジン君ルーテシアちゃんの先生やるんでしょう？それでどうせならスバルやギンガもつい

でに教えてもらおうと思つて先輩をお願いしたんだけど、それなら家が近くの方が便利よねとか言つて私たちの家の近くに引越すことになったの。私の家とメガ・ヌの家は近いから一石二鳥ね。」

「オレの意思が反映されてない事については？」

「先輩のせい」

「・・・ハァー。じゃあ今日はホテルにでも泊まるか。」帰る家はもうないらしいので、ホテルに泊まろうとするが

「なら、うちに泊まれば良いよ！！」スバルが元気に答える

「そうだな、ジンには家内の事で世話になっているし、お礼もしたい。泊ってけ。」ゲンヤも続く。

「・・・」考え中

「それじゃ、私達も今日退院しようかしら。ジン君のおかげで体の傷は激しい運動をしなければ大丈夫らしいから、それに何かあつてもジン君がいるし。」とクイント

「そうね。そうしましょう。私もルーテシアを合わせたいし。クイントの家に行つてつもいいかしら？」

「構わないわ。今日はにぎやかになりそうね」と陽気に話すクイント。ジンが行く事は決定事項らしい。此処で断れるほどジンは勇者ではない

「わかりました。今日は御厄介になります。オレも、久しぶりにルに会いたいですし。」了承といた。

「それじゃ、退院手続きをして家に向かいましょう。」そう言って準備を整え病院を後にするのだった

第6話 ナカジマ家（前書き）

ちよつと無理やりな感じがありますがご了承ください

第6話 ナカジマ家

病院の退院手続きを済ませ、ナカジマ家へ移動。一応母さんに今晚泊る事を伝えたが、まだ手を出しちゃダメよと言われた。

普通に考えてありえないんだろ。なに考えているのだろうか？

そんなしょうもない事を考えていると、どうやら着いたらしい。スバルが元気に紹介してくれる。最初のおどおどした感じはどこに行ったのだろうか？

ゲンヤさんとクイントさんは準備があると言って奥へ入って行った。その間スバルとギンガの相手をしていて欲しいだそうだ。

「で、なにしようか？オレあまり遊びとか詳しくないんだけど・・・やりたいことある？」

スバルは特にないらしい。そこでギンガが

「ちょっと組み手をしませんか？いつもは母さんとやるんですけど、たまには違う人とやってみたいんです。」目をキラキラさせながら聞いてくる。クイントさんにオレが鍛えている事を聞いたらしい。それにクイントさんがちょっと誇張したらしい。

「オレ、体術はそんなに強くないんだけど、それで良いならいいよ。スバルはどうする？」

「私は見てるよ。痛いのか嫌だもん。」

そう言っただけで座れる場所に移動して観戦モードに入る。

「ギンガはシューティングアーツをどれくらいやってるの？」

「まだ、始めて間もないです。1年ちょっとくらいです。」

「ふん。とりあえず、型を練習している感じが。オレはシューティングアーツできないから教えることはできないけど、そこはまあクイントさんにでも聞いてくれ。今日は対人戦という事で何か学んでくれ。言っとくけどオレはあまり強くないから期待するなよ。」

「謙遜しなくても大丈夫です。母さんもジン君は強いって言ってましたし。だから全力で行きます。」

気合いが入っているギンガに間違いを訂正しようとしたが

「それはクイントさんの過大評「行きます!!」価・・・話は聞こうよ・・・」ギンガが突っ込んできた。とりあえずま正面から来るギンガの攻撃を受け流す。避けると転んで危なそうだからだ。

「よつと」間の抜けた感じで左ストレートを弾いて腹に拳を入れる。当然寸止めだけど。さすがに始めたばかりのやつに負けるほど弱くはない

「は!・・・もう一度お願いします。てりやあああ!!」自分の攻撃を弾かれカウンターを入れられた事を悔しそうにしながら、再

び挑戦してくる

「さっきと、同じようにやっても変わらないぞ。相手だって動くし考える。突っ込んでくるだけなら動物と変わらないぞ。」

ギンガの猛攻を全て弾きその度に寸止めのカウンターを入れる。

「ハアハアハア」息が上がるギンガ

「余計な動作が多いからそうなる。無駄振りは読まれやすく、カウンターの餌食だ。日ごろから型を練習しているならまずそれを意識しろ。本来型とはきちんとやれば実戦で必ず生きてくる。そこを適当にやってしまうと先がないぞ。」

昔ゼストに言われた事を思い出す。

「ハアハア・・・はい・・・」

「それともう少し考えろ。最初の攻撃でオレとの力量差を感じたはずだ。その後同じように攻撃したところで意味はないぞ。どうやったら、攻撃が当たるのか、どうすれば相手に避けられないのか、それを今持てるすべてを使って考える。本能で動く天才型もいるが努力により得られた経験からの考察力は時に才能の差を埋める。要は努力しろってことだけだな」

「はい・・・」少し言われて落ち込むギンガ。昔の自分のようだ。まだ未熟ではあるけれどゼストさんから教えられた事はしっかりと

守っている。

「まあ、初めて1年にしては上出来だろ。力もある。後は基本をしつかりとやってクイントさんの教えを守ることだな。そうすればギンガはもつと強くなる。師匠がいるんだ頑張れよ。」

「は、はい！ありがとうございます。」元気になったギンガ。その後もう少し組み手をしをして反省会の繰り返し。だいぶ時間がたってスバルが話しかけてきた。

「ひ〜〜〜ま」飽きたようだ

「スバルもやればいいじゃない。」ギンガが苦笑いしながら言う

「嫌だよ。私は痛いのは苦手なの！」駄々をこねるスバル。そこで、ちよつとした遊びを提案する

「それなら痛くない遊びをしよう。それに勝負だ。スバルが勝つたらなんかおいしいものを食べさせてやる。」

「ホントに！！」目を輝かせるスバル。口からアイスつてもれてるんだけど・・・

「本当だ。これでも働いているから、お金の事は心配いらない。ギンガも参加するだろ」

「は、はい。それで、なにを……」ちよつと戸惑っていたがスバル同様ギンガも何か想像している。さすがは姉妹。

「ルールは簡単。要は鬼ごつこだ。今から範囲を決めるぞ」そう言つて魔法でちよつとした空間を作り出す。ちなみに転んでも大丈夫なように地面に細工を施し柔らかくしている。無駄に能力が高い

「この範囲内でオレが操作するこの魔法球を捕まえる事。そんなに高くは飛ばさないからジャンプすれば届くぞ。ギンガと同じくらいのスピードだから二人で協力すれば案外簡単に終わるかもな」

「ギン姉と一緒になら平気だね。頑張ろう！……アイスのために」
ダダもれの欲望

「もうスバルったら。でもいいですか？その条件な私たちの方が有利ですよ」

「もちろん制限時間はある。だいたい10分くらいだな。そこまでに捕まえられなかつたらオレの勝ち。ちなみにちゃんと捕まえないとダメだぞ。掠った程度じゃ認められないからな」

「もーなんでもいいよ！早くアイスのためにやろう！！」スバルが我慢できないらしい

「それじゃー用意・・・始め!!」そう言つて魔力球を飛ばす。一斉に飛びかかる二人。地面はクッション状になっているので構わずダイブ。ギンガの手が触れようとした瞬間ギンガに向かって移動。とっさの事にギンガは反応できずに逃してしまふ。

それならばと、今度はスバルが追いかけるがまたも急な方向転換によりあえなく失敗。二人して追いかけまわす鬼ごっこが始まった。

・・・・・・・・・・・・・・・・5分経過

「ハアハア、何で捕まえられないの。動きだつてそんなに速くないのに・・・」ギンガがつぶやく

「ギン姉、あっちの方に移動させて逃げられないようにしよう。」

「そうね。そのあと、二人でかかれば・・・」

ジリジリと歩み寄る二人。どんどん追いつめて行く。・・・・・・・・!!

「スバル今!!」二人が飛びこむ。だが、ジンは、それをスバルに飛び込ませる事で回避する。

「そう何度も喰らわないよ!!」何度もやられて学んだのか、スバルが素早く反応し捕獲しようとするが、魔力球が急にスピードダウンし

「え!？」スバルが捕らえようとした時に消える

「どこ！？」「ギンガとスバルが辺りを見回すが見つからない。」

「ジン兄ズルイ！魔法を消すなんて反則だ！」スバルが不服そうに言う

「オレは反則なんてしてないぞ。ちゃんとお前達のそばにいる。」

「う、嘘！？」「そう言われて探すが・・・いない

「やっぱり「スバル服！！」いない・・・え！？」「ギンガがスバルの服についている魔法球に気づき叫ぶ。自分の服についているとは思わなかったのか、慌てて捕まえようとするが

「残念！」またしても消える。今度はギンガの方に取りつく。ギンガは気づかず、辺りを見回すがスバルは気づき捕まえようとし・・・飛んだ

「キャー！！」急にスバルが突っ込んできたので避けきれず倒れてしまう。二人が転がっている間に

「タイムアップ。残念ながらお前達の負けだな」

「くく」悔しがるスバル。ギンガも悔しそう

「それで、何で捕まえられなかったかわかったか？」

「・・・」スバルとギンガは考えているようだが答えが出ない

「正解は錯覚だ」

「さっかく??」スバルもギンガも良く分からないと言った感じだ

「ああ、わからないか？要は勘違いだ。」

「勘違いなんてしてないもん!!」スバルが反論する。ギンガも頷いている

「じゃーどうして、スピードがギンガと同じくらいのギンガ追いつけないと思う？ちなみに、速度は変えてないからな」

「わかんない」スバルにはむずいらしいが

「地面ですね。地面が柔らかくなった分私達のスピードが落ちました。それにそんな地面で動いたため普段よりも体力が削られました」

「正解だ。ついでにオレは動き回るのではなく極力動かないようにしてから最小限の動きで避けるようにしていた。そのせいで、想像していたより速く感じただろ？」

「う、うん。」

「どんなに速くても、やっていればそのうち慣れる。だから慣れさせないような工夫が必要なのさ」

「で、でもそれだけなら追い込んだ時に捕まえられたはずです。少なくともスバルは最初の時は反応していました」納得がいかないと言っただかんじのギンガ

「それも、錯覚だ。いや、盲点と言っても良い。人間は物事を考える際、絶対に起こらない事や確率が低いものは無意識に排除してしまふ。だから、一度目の接近でスバルが反応した時、オレがスピードを落としたのは何も他に逃げるためじゃない。スバルも左右に動いたら気づいただろ？」

「う、うん」

「だから、オレは左右ではなく前後というか上下に動いたんだ。最初スバルが捕まえようとした時に後方へ移動しスバルの目が手に向かったときに一気に前に出る。そうするといきなり消えたように見える。後はずっと服に着いとけばいい。自分の体に有るとは思わないからな。」

「私の時もそうやって・・・」ギンガが納得したように

「ギンガの場合はちょっと違う。動き方は一緒だが目線の高さから外させずに移動させた。見ていた位置から変わっていないように見えるが実際は接近している。意外と気づかないもんだ。ちなみに、これはオレの父さんの世界の文献に有った物だ。地球っていったか？その武術の縮地と呼ばれるものだ。色々説はあるようだが、オ

レが見たのはそれだ。」

「地球ってお父さんの御先祖様がいたところ？」

「ん？ああ、ゲンヤさんの先祖も地球出身なのか。意外と世間は狭いな。」

話も終えたところにクイントから声がかかる。

「ご飯の準備できたわよ。手を洗って……あら、ギンガもスバルも泥だらけじゃない。先にお風呂に入って来なさい。」

「はい」

「ジン君も一緒に入ってきたらどう？」にやりとした笑みを浮かべるクイント

「そうだね！ジン兄も一緒に入ろう！！」元気よくスバルが答える。

「みんなで、洗いつこしようか。」ギンガも乗り気だ。二人とも子供なので羞恥心という物がないらしい。

「折角のお誘いですが、遠慮させてもらいますよ。オレもまだ子供ですが、それでも羞恥心くらいはあるので。」

「え〜〜一緒に入ろうよ」スバル達が言っているがスルー

「なんだ、もつと慌てるかと思ったのに……」クイントがつまらなさそうな顔をする。

「これでも医者なんで。そんなこと言ったらクイントさんやメガ・又さんの治療なんてできませんよ。」

「あら、それは私たちの体には興味があると言っ事かしら？」笑いながら聞いてくる

「子供に何を期待しているんですか？そんなこと言うと今度の治療で失敗しちゃうかもしれませんよ。ケガが長引くのはつらいですね」黒い笑みで答えると

「もう〱冗談よ。」笑ってごまかすが、内心焦っているクイントだった。

.....

手を洗い食卓に向かうとメガ・又さんとルーテシアがいた。ルーに会つのは久しぶりで忘れられているかと思つて近づいたけどどうやら覚えていたようだ。につこりと笑つて手を振ってくれる

「ルーは何歳になった？」

「3歳。お兄ちゃん久しぶり」元氣よく飛びついてくる。オレがまだあつた頃はあまり喋れなかったし、あるけもしなかった頃だからそれから考えると大きくなった。というより良くオレの事覚えているな」

「久しぶりだな。忘れられてなくてよかったよ。よく覚えていたなルー。オレがあつた時はまだメガ・又さんに抱えられていた頃なのにな」

「あんまり人と会う事はなかったし、お兄ちゃんは私の遊び相手をしてくれたから、なんとなく覚えてるの。」

そう、メガ・又さんがうちに来た時急に仕事が入ってオレが代わりにルーの面倒を見た事がある。赤ちゃんの割に手のかからなかった事を覚えている。その時、ルーに懐かれたらしい

「そおか。うれしい限りだ。それに、今日はオレ以外にもいるから友達が増えるな。その内来るだろうから後で自己紹介しときな」

「う、うん。大丈夫かな？」心配そうにするルー

「大丈夫さ。スバルは人見知りするようだがさすがに、自分より年下な子にはないだろう。ギンガはもともと面倒を見たがるようだし、新しい妹ができたみたいで歓迎してくれるんじゃないか？」

オレの言葉に少しは和らいだものの、二人が来るまで緊張していたルーだった。

その後風呂からあがって来た二人にルーが緊張しながら挨拶したが、意外にもスバルがお姉ちゃんぶりを発揮しすぐに仲良くなった。当然ギンガも仲良くなり今は三人して仲良くご飯を食べている。オレは一応大人組みに交じり談笑しつつも食事を頂いているところだ。

食事も終わり片付けをしてる頃には遊び疲れたのかルーとスバルが寝ている。ギンガも寝むそうだ。クイントさんに3人を寝かしてきと言われたので、ギンガに案内してもらい部屋に向かった。ルーをおんぶしてスバルを抱えて部屋を目指す。

部屋についてスバルとルーを同じ布団に寝かせギンガも自分の布団に入る。

「お休みギンガ」

「おやすみなさい・・ジンさん・zzz」相当眠かったらしくすぐに寝てしまった。ギンガの布団を直した後クイントさん達のもとに戻る。何か話があるらしい。

- - - - -

「ジンお前はこれからどうする？」ゲンヤさんに言われて考えてみる。

オレは一応ゼスト隊の一員なので部隊解散後は所属が空く。クイントさんとメガ・ヌさんはケガのせいもあって内勤に異動となりゲンヤさんの部隊に行くようだ。

「オレはまだ、首都防衛隊で働こうと思います。もう少し訓練もしたいですし・・・」

「辛い？」メガ・ヌが気にかけてくれるが

「辛いって言ったらずいになりますが大丈夫です。それにあそこには銃を得意とする人がいたのでその人に学ぼうと思います。」

「そうか。お前さえよければオレの隊にきてもらおうと思ったんだがお前がそう言うなら無理に誘うわけにはいかねえか。」ゲンヤさんがポツリと言う

「すみません。」

「気にするな。お前はお前のままであってくれればいいさ。」そう笑って言うてくれる

これで話も終わりかなと思ったところに

「それで、ジン君は三人の中で誰が好きだった？スバル？ギンガ？それともルーちゃん？」まじめな雰囲気壊すクイント。

「ハァ、クイントさんもう少しまじめに行きましょうよ。それに今日あったばかりで好みも何もないでしょう。ルーなんて久しぶりに見て大きくなってたし。それに、みんな妹みたいでかわいいとは思いますが・・・家族目線な感じですかね」

「つまらないの。ジン君にならうちの子を任せても良いのに」ちょっと子供っぽい顔をして言ってくるクイントにあきれながらもらしいなと思ってしまう事が少しうれしい。オレが助けられたことを実感できた時であった。

その後はメガ・又さんも参戦してきたりゲンヤさんがまだ嫁には出さんとか言って暴れだしたりして大変だったが、こんな日常もうれしく感じられるようになったのは良かったと思う。ゼストさんがない事がオレの中にしこりとして残っているがそれは時間が解決してくれるだろう。暴れだしたゲンヤさんをクイントさんが抑えつつメガ・又さんが笑っている姿を見て思うのだった。

第7話 二人目の……

ナカジマ家に泊ってから数日経ってオレは職場に復帰した。一応オレは医務官として此処にきているので他の人に比べて仕事が少ない。だから、訓練に時間を多く当てる事が出来る。まずは、あの人を探さないと……

とりあえず訓練場を目指す。何人かが訓練をしているようだが、あてさているだろうか？

………いた！目的の人物を見つけその人のもとに向かう

「あのーすいません。訓練中申し訳ないんですが……」

「ん？どうしたんだ？…おお、お前さん確か最近配属された天才医務官じゃん。そんな奴がどうしてここにいるんだ？」

「ええつとですね。オレに銃を教えてもらえませんか？」最初はたどたどしい感じで言っていたのだが真剣な表情で尋ねた

「その顔を見るとわけがありそうだな。何で銃を教わりたい？」

「もうこれ以上大切な人を失わないために！オレの目の前で救えないなんて事がないように！だから強くなりたいんです。オレに近接の才能はありません。ただ銃なら……でも我流なんで扱いを知

っている人に教わろうと思って。此処で銃を使っているのは貴方くらいですし、前に見た時にすごいと思いました。だから、お願いできませんか？」

「うーん。とりあえず腕を見てみたい。オレと軽く模擬戦しよう。」

「は、はい。お願いします。ランスターさん」

「オレの名前まで知ってるのか？それにティーダでいい。それじゃー始めるぞ。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「それじゃー始めるぞ。ルールは撃墜されたら負けの簡単なやつだ。とりあえず、お前がどれでけやれるか見てみたいから、全力でやれよ。……スタートだ」

ティーダが一気に駆け出す。それに対応してこちらは足元を狙った狙撃。それを難なくかわすが、それは罠。回避して空中に逃げたところに連射。誘導弾ではなく弾速を重視したため結構速い

が、ティーダはそれを全て撃ち落とす。態勢が悪いにもかかわらず正確無比の射撃

「すげえ」感嘆の声が漏れる。

「呆けてる暇はないぜ。それ！」いきなりの三連射。オレとは違い全て誘導弾。

「（避けるか？・・・でも相手の意図がわからない。此処は落ち落とす！！）」迫りくる弾丸に弾丸を命中させる。だが、命中する瞬間3つの球が分裂し6つの球になる。当然こちらの攻撃はそれ6つの球が襲いかかる。

「！？クッ」即座に連射し落とせるものは落として後はすべて避ける。・・・だが一発掠ってしまった。

「これがオレのスプリットショット。意外と油断しているやつには当たり易い。その点に関してはなかなかの反応だ。」余裕のある感じ話す

「弾を分裂させるなんて器用ですね。・・・でも、オレもそう言うの得意なんですよ。ファントム！！」

「yes」オレの声に反応して魔法球を作り出す。その数10個。

「へえ」その数を制御するのか。なかなかすごいな。さっきの感じだと誘導弾は得意じゃないと思ったんだけど・・・」

「ええ、その通りです。誘導弾はあんまり得意じゃないんですよ。でも、あまり関係ないですし・・・」

「ん？」

「行きます。レポートショット!!」10個の弾丸をティードに向かつて飛ばす

「そんなバカ正直に打っても当たるかよ」迎撃のために弾丸を飛ばすが……

「そうですね。なのでこうします。チェンジ!!」ティードに向かって行った弾丸の前に魔法陣が現れ10個の弾丸がすべて消える。

「な!？」ティードもいきなり消えた弾丸に驚くが次の瞬間

「これでチェックメイトです。」ティードのまわりに魔法陣が現れ弾丸が飛び出す。慌てて反応するが遅い。数発を防いだもののそれ以外は直撃。煙があれとバリアジャケットがボロボロなティードが現れた

「痛てて。おいおい俺の負けじゃねーか。ハアゝお前オレに教わる必要ないだろ。」

「そんなことないですよ。今回は不意を突かせてもらっただけです。実際の所射撃技術では全くかないませんし。」

「いや、でもな。教えるやつが教わるやつより弱いのはどうよ。」

「いや、たまたまですつて。こっちはそちらの情報を知ってましたから。対策もねれました。スロースターターってことは知ってますし。オレを子供と思ってなめてくれていたのもわかってましたから。」

「……負けた身では何も言えない」

「それでもあなたがオレよりも銃を扱うことにたけているのは確かだ。だから、貴方に教わりたと思った。どうでしょう？お願いできますか？」

「……ハア、負けちまったからな。毎日は無理だが暇なときは教えてやるよ。後お前の癖もな」

「癖？」

「お前照準を合わせる時、片目つぶるだろ。一対一なら何とかなるかも知れんが複数いる時に死角を増やすのは自殺行為だぞ。」

「でも。それやらないと合わせられないんですけど……」

「だから、そう言うのも含めて教えてやる。基礎はできていそうだが対人を想定しすぎている。いろんな場面があるんだ自分の能力を制限するのはもったいないぞ。」

「やはり貴方を選んで良かった。これからお願いします!」

「まあぼちぼちな。」そう言って今日の反省会をした後訓練を終えるのだった。

- - - - -

ティードに師事してから数カ月ジンの射撃技術はティードをも凌ぐものになっていた。もともと基本はできていたので、後は積み上げるだけ。収束魔法を撃てないという欠点はあるものの元来の器用性を生かしそれを補えるだけの技量は身に付けた。

実戦不足という指摘もティードとともに様々な任務をこなした事で十分なものになって来た。ティードが言うには

「お前と組めば大抵の事はなんとでもなるな。ケガしても治療できる医務官が前線にいるなんてオレからすればかなり安心できる。」らしい。

ただ、早く力をつけようと無茶も何度か繰り返したのでよくティードに怒られた。まあ、命をないがしろにするようなものではないのでそこまで怒られはしないが結構心配をかけているらしい。申し訳ない。

そんな感じで日々を過ごしている。あと、デバイスマスターの資格を取った。もともと頭は良かったので構造を理解するのはそこまで苦労しなかった。今使っているデバイスはゼストさんに貰ったものなので大切に扱っている。ただ、そうなると自分で整備をした方がいいのでは？という結論に達しデバイスマスターの資格をとる事にした。

取った後はティードのメンテもついでにやってあげている。一応師匠なので……

今日も訓練をしようと思ったところに呼び出しがあった。どうやら任務らしい

任務内容は犯罪組織の検挙と逮捕らしい。ティード主導で捜査が進められようやく足取りがつかめたらしい。ミッドのはずれにある地区で違法物の密輸が行われてるらしい。人員は確保できたので今日乗り込む予定だ。ただ、まだ不確定な事があるのでティードは反対したようだが上司が強引に捜査に踏み切った

「今回は犯罪組織の逮捕が目的だが何分位置が特定していない。人

員もいることだしいくつかに分けて捜査を行う事にする」上司が告げる

「ここで、人員を分けるのは悪手ではないでしょうか？相手に強力な魔導師がいた場合対応しきれない場合があります。ここはやはり、もう少し調べてからの方がよろしいのではないですか？」ティードが冷静に意見を述べる

「何を言っている！犯罪者がいるとわかっているのにそれを見過ぐすなんて管理局員のする事か！！我々は管理局員だぞ。犯罪者は捕まえねばならんだ。」

「ですから、万全を期すためにももつと調べた方が……」

「くどい。臆したか！！そんなんだから執務官になれんだ！！もうよい。此処からは全権を私がとる」いきなりわけのわからない事をいう上司

「ちょっと待ってください。この調査はティードさんが調べていたはず。いきなりそれを横取りするのはいかななものかと……」ふざけた事をぬかす上司に正論を行ってみるが

「ふん、そんな奴に任せていたら捕まるもんも捕まらわ！！お前らは私の指示に従えば良い。以上解散だ、各員準備しろ」

なぜこんなにも焦っているのかというところの上司後ろ暗い事をして
此処まで上り詰めたようだが最近その事が調べられているようだ。
今回の密輸組織とも裏でつながっている可能性があるということだ。
そのティーダに対して何かと
文句をつけるといふいかにもな反応をするあたり脈ありだろう。

- - - - -

区画潜入

「お前達はA地点を他はB、C地点を行け。ランスター一尉。」

「はい。」

「お前にはD地点を任せようと思う。優秀なお前の事だ一人で大丈夫だろう」

「はあ？」思わず出てしまった。

「上官、よろしいでしょうか？いくらなんでもそれは作戦とは言えないのでは・・・単独で潜入なんてありえません。」

「何を言う。ランスターは若くして一尉にまでなった、優秀な魔導師だ。問題あるまい。」

「いや、これだけの人数がいて一人だけなんてあまりにも……」

「ええい黙れ！！上官命令だ。私がそう判断したんだ。これが最善なんだよ。新米が偉そうに意見するんじゃない！！」

「ジン、俺なら大丈夫だ。だからお前の仕事に集中しろ。」

「いやでも、先輩……」

「上官の命令は絶対だ。オレ達は軍人なんだ。」

「……了解です」

「よし。ではこれより作戦を開始する。各員持ち場につけ。」

「……はい」「」

（嫌な予感がする……このオッサン何をたくらんでいる？）

全員が持ち場に付き作戦を遂行する。一応この区画には一般人もい

るため下手に戦えないのがネックだ。速攻で制圧するしかない。

オレ達の担当のC地点。倉庫に人影はなし。辺りを警戒してから潜入。中を調べる……！！

出てきたのは質量兵器。それも大量に。これは完全に辺りか？そう思いながら押収していく。……

質量兵器を回収している時に見方からの声が届く

「敵襲！！」銃火器の音と伴に仲間からの声が聞こえた。

「人数は？」冷静に状況を判断する。

「質量兵器を持ったやつが6人。魔導師らしきやつが一人。おそらくAランク魔導師です。」

「了解。魔導師はこちらで何とかする。他のやつらを任せられるか？」

「はい。大丈夫です。気をつけて」

「そちらも」そう言ってバリアを張りながら魔導師の方に突っ込む。此処でドンパチをやると味方にも被害が出かねないので倉庫から追出す。

「そら！！」連射で相手を押しだしていく。相手もそのまま引き下がって行く。剣型のデバイスを持っているので此処じゃ存分に戦えないと判断したのだろう。素直に外に出る。

「こちらは時空管理局。密輸容疑ならびに質量兵器保有の現行犯で逮捕する。武器を捨てておとなしく投降しろ」

「くそ。あのやろ、こつちには強いやつはいねえって言ってたのに……いるじゃねえか。」

「何？あいつとは誰だ？」

「教えるかよ！！」そう言って向かってくる。だが、日ごろからテイダさんと訓練してるしゼストさんに比べればこの程度の相手

「足元がお留守だ。」両足を撃って相手を倒しバインドで拘束。というかAランクもないだろ弱すぎる。Cランクが関の山だろう。この報告をしたやつ……！！？　パン！！

「フツ」バリアを張って銃弾を防ぐ。

「陸曹これはどういうことだ？他のやつらはどうした？」

「ククク、中で寝てますよ。銃弾には過剰に反応するのに催眠ガス

には警戒が全く足りないなんて。」

「裏切りか・・・」

「そんな大層なもんじゃありませんよ。ただ私は部隊長のおこぼれにあずかるだけ。」

「やっぱりあいつが黒幕か。それで、これからどうする？ 気絶させられてから捕まるのと素直に捕まるのとどっちがいい？」

「ハハハ、御冗談を。そこにいる奴を倒して気が強くなっているんですか？ そいつはCランク魔導師です。それに比べて私はB+。あなたは空戦C。さらに質量兵器を持ったやつらがこちらにはいる。貴方には部隊長の事を言ってしまったからね。此処でサヨナラです」

「・・・・・・・・・・」

「恐ろしくて声も出ないですか？ まだ子供ですからね。どうです？ 私のゆう事を聞くなら助けてあげても良いですよ。若くして医務官の資格を取るほどの頭脳と技術、此処で死なすにはもったいない。」

「寝言は寝て言え。そんなだから、その年になっても陸曹どまりな

んですよ。」

「なんだと！？ガキが調子好きやがって・・・やれ！！」一斉に銃弾が飛んでくるが

「リフレクション」バリアを張って跳ね返す。跳ね返った銃弾に当たり悶絶するABC。陸曹も腕に当たり叫んでいる

「うわああああ。痛てえ！！早く、治療を・・・」

「その程度なら死にやしませんよ。まあ手が使えなくなる可能性はありますが・・・」その言葉を聞いて顔を青くする陸曹

「た、頼む。助けてくれ。本当は部隊長に脅されていただけなんだ！！」

「さっきの威勢はどこに行ったんですかね？治療は後で受けてください。今は用事があるので。パン」とりあえず撃って気絶させる。バインドで縛り犯人一味とともに指令本部へ転送。一応念話で報告しておく陸曹のデバイスは没収。データを引きぬき部隊長が犯した罪の証拠を抜きとる。

「これで大丈夫か。あとはティードさんのところか」

全速で飛ばしてティードのもとに向かう。が……

倒れ伏すティードを見つける。血だまりができている……

「テ、ティードさん！！」 駆け寄りすぐに治療を開始する。だが、出血が多い

「よう、ジン。どうした？ 珍しく慌てて？」 目の焦点が微妙に有ってない

「黙って！！ 今治します」 全力で治すが足りない血が補えない。クソ！！

「もういい。オレはもう此処までだ。わかる」

「あきらめんなよ！！ オレまだあんたに教わりたい事いっぱいあるのに！！」

「グフツ・・・ハア・・・それなら問題ない。お前はオレよりも強くなつたからな・・・」

「そんなこと・・・」

「数か月で抜かれるとは思わなかったけどな。基礎ができてたし。それに教えた人が良かったしな」

「それならもつと・・・」

「ああ、目がかすんできた。ジンオレが助けた人は大丈夫だったか

？」そうティードの近くには一般市民が倒れていた。外傷もないし
気絶しているようだ

「大丈夫です。気を失っているだけです。」

「そうか。ランスターの弾丸は守るためのものだからな。これで妹
にも顔向けできる」

「ティアナちゃんですか？」

「ああ、かわいいぞ。将来は絶対に美人になる」

「シスコンですね。何回も聞きましたよ。」

「ああ、たったひとりの家族だからな。でも一人にしちまうな・・・

」

「だったら・・・頑張ってくださいよ!!」

「そうしたいんだがもう限界だ。お前の顔がぐちゃぐちゃで見えん。
泣いてるのか？」

「泣いてませんよ」泣きながらそう答えるジン

「そっか。ジン最後に一つだけお願いできるか？」

「はい。」震えながらもちゃんと聞く

「ティアナを、妹をよろしく頼む。あいつ一人になっちまうからな。お前になら任せられる。」

「・・・はい。任せてください。」

「ありがとう。これで安心して・・・い・ける。」グタつと力尽きるティード。

「ティードさん！！チクショウ！！うわああああああ！！！」
当たり前すべてに聞こえるのではないかというくらいの声でジンは泣いた。ジンにとって二度目の近しい人の死だった。

第8話 人生ままならない

ティードの遺体を丁重に運んでから数日。ティードの葬式が行われることとなった。クイントさんやメガ・ヌさんも元首都防衛隊なので面識があつたらしく葬儀に参加している。

妹のティアナは兄の死が信じられないのかボーっとしたままだった。

葬儀が始まり参列者が入った後つつがなく取り行われたがここで

「まったく首都防衛隊の顔に泥を塗りおつて。犯人を追いつめておきながら取り逃がすなどあつてはならん事だ。無能め！」オレ達の上司がふざけてことを口走った。それを聞いたティアナは泣いている。兄の死が無意味だと言われたからだ

「三佐！このような場でそれもご遺族がいる場でそのような発言は・・・」クイントが注意する

「何だ見た事あると思つたら、犯罪者にやぶれた無能部隊の隊員じゃないか？何しに来た？同類を憐れんだか？」

「・・・」メガ・ヌとクイントが唇をかみしめる

「フン、殉職した隊長とやらも無能だったのだろう。全く最近の防衛隊はなつとらんな」言つてはいけない事を行った

パン、パン、パン

壁際に座っていたクソ野郎に銃弾を3発ぶち込む。全て顔面スレスレだ

「おい無能言葉を慎め。あの人たちはお前ごときがけなして言い人たちではない。」

「き、貴様！！上官に対してこのような事をしてただで済むと思っているのか！！」

「お前こそただで済むと思っているのか？確実に軍法会議にかけられるぞ。」

「なんだと！？おい、この無礼者を捕まえろ！！」捕まえようとしてきたやつらを軽くあしらう

「今回ティードさん主導で始まったはずのこの潜入捜査。それをお前が横やりを入れた。なぜだ？」

「フン、あんな無能に任せてたんじゃ捕まるものも捕まらんからだ！！」

「違うな。自分の悪事がばれるのを恐れたんだ。今回の密輸組織と繋がってたんだろ？」

「何をでたらめな！！証拠はあるのか！！」

「あるさ。陸曹がきつちり全部吐いてくれた。幾ばくかの金を握らせて黙秘させようとしたらしいがちよつと自分がした事でどういう刑になるか話したら、全部話してくれたぜ」

「し、知らんぞ。あいつが私を陥れようと嘘の証言をしたに違いな
い。犯罪者の言う事など信用ならんわ！！」

「残念だが裏付けも取れている。お前達のやり取りを残したデータ
と不正に流れた密輸品のデータはきつちり抑えてある。残念ながら
お前はもう管理局員でさえない！！ただの犯罪者なんだよ」

「でたらめな！！やつの言う事に耳を傾けるな！あいつは私を陥れ
ようとしているだけだ。早く捕えろ！！」

誰も動こうとはしない

「此処に逮捕状も出ている。お前に命令権などない。お前が捕まる
事は確定だ」

「そ、そんな・・・」

「ただ、オレが言いたいのはそんな事じゃない。なぜティードさんを一人で潜入させるような事をした!？」

「・・・・・・・・」

「答える!」パン!弾丸をうつむいてる足元の所へ打ち込む。

「次は当てる。さつさと答える」

「・・・・あいつが邪魔だったからだ・・・」

「何？」

「あいつは独自に私の事を調べようとしていた。証拠も握られてしまった。だから・・・」

「無茶な命令をして消してしまおうと・・・・」拳に力が入る

「い、命まで取る気はなかった。あいつらにも無力化した後にデバイスを奪ってデータをとるだけで良いと言ったのに、乱戦になって、それで・・・」

「それで、殺したと・・・」

「でも、あいつもあいつだ。一般人に威嚇で撃った弾を体で止める

から・・・」

我慢の限界だ！！ バコオオン。拳が顔面に突き刺さる

「当たり前だろ！！一般人を守るのが局員だろうが！！それを・・・」

「仕方なかったんだ。あいつにばれたら今まで築き上げてきたものが・・・」血を垂らしながらも答える元上司

「全部汚いやり方で得たもんだろが！！そんな物のためにティードさんを・・・許さねえ！！」

「ま、待ってくれ。私が悪かっただから暴力は・・・グフツ、ガハア」たこ殴りにする。顔の形が変わるくらい。気絶しても殴ろうとする
と誰かの手に阻まれた

「ジン君もうやめなさい。それ以上やると死んでしまっわ！！」クイントが止めに入る

「構わないでしょう！！こいつに生きる資格なんてない」

「ええ、でも、私達は管理局員なの。犯罪者を殺そうとする事は罪になるのよ。そんなやつのために貴方の一生を台無しにする気？」

「でもこいつは、ゼストさんの事まで馬鹿にして・・・」

「なら、なおさらよ。隊長はそんなこと望んでなんていない。」

「・・・」しびしび手を離しクソ野郎から離れる

「ジン君。今回貴方のした事は問題よ。それなりの罰が下るわ。」
メガ・ヌがたしなめるように言う

「覚悟の上です。どうしても、こいつだけは許せなかった・・・」

「とりあえず、身柄を預かるわ。ついてきてちょうだい。」

「ちょっといいですか？」

「何かしら？」

「ティーダさんの妹に話しておきたい事があって・・・」

「わかったわ。外で待っているから。終わったらきてちょうだい。」

ティアナのもとに向かう。途中ティーダさんの親せきや同僚からよ

くやったと声をかけられた。みんなあいつにムカついていたらしい。次に何か言ったらブツ飛ばすつもりだったらしい。

そしてさっきのやり取りをみていて啞然とするティアナの前に腰をおろして話しかける。

「どうも、はじめまして。オレはジンって言うんだ。先輩にはお世話になったんだ。名前教えてくれるかな？」

「・・・ティアナ」

「そうか。・・・ティアナ、今回の事本当にすまなかった。」土下座して謝る

「どうして、謝るの？」戸惑いながら聞いてくる

「先輩を助けられなかった。オレがもう少し早く行けば助けられたかもしれないに・・・」

「・・・兄さんは無能だったの？」絞り出すように言ってくる。さっきのクソ野郎の発言が気になるらしい

「いや、すごい人だった。尊敬している。最後まで一般市民を守り抜いたんだ。誇っていい」

「ホントに？」泣きながらも聞いてくる

「ああ。ランスターの弾丸は守るための弾丸だって。妹にも顔向けできるって言ってた。オレはそんな先輩を誇りに思う。」

「兄さんは無能なんかじゃないよね？兄さんの死が無意味な死なんかじゃないよね？」

「ああ、立派だった。あの人の死が無意味なんてあるわけがない。そんなことを言うやつがいたらオレがブツ飛ばしてやる。」笑いな
がら言う

「また怒られちゃうよ。」泣きながらも微笑みながら言う

「ああ、聞いてたのか。でも気にするな。オレは正しいと思った事をしただけだ。先輩を侮辱したやつを許す気なんてない。」

「怒られても？」

「ああ、いくらだって怒られるさ。怒られる事よりも侮辱されたまま何もしない方が辛い。」

「ありがとう。」涙が止まらないティアナ

「それだけ立派な人だったんだ。だから、決して忘れるな、ティードランスターは立派に職務を果たした。ランスターの弾丸は守るためのものだ。おまえの兄さんは本当の英雄だってことを」

「うん、うん」手で涙を拭こうとしても止まらない。

「今はいっぱい泣いとけ。お前の兄さんに頼まれているからな。妹をよろしくって。だから、今はいっぱい泣け。天国にいる兄さんに届くくらい。そしたら、ひょっこり出てくるかもしれないしな。あのひとスコンだから」

「そんなわけじゃない。でも、そうだったらいいのに・・・兄さん・・・兄さん・・・うう・・・うわああああああああん！！」オレの胸の中で泣くこの小さな少女をしっかりと守ろうと思った。

- - - - -

ティアナの事は親せきの人にまかしてメガ・ヌさんと本部に向かう。オレの処罰に関する事らしい。一応ティアナには連絡先は渡しておいた。困った事があつたら連絡して来いとだけ言っておいた。

地上本部到着

会議室のようなところに入る

「ヤナギバ医務官」

「はい。」

「今回の事は管理局の汚点でもあるので、灸口令を敷くことにした。他言は無用だ。」

「どういうことでしょうか？」

「なかった事にすると言っているんだ。」

「それでは、事件解決の手がかりにもなったティーダー尉の褒章はどうなるのでしょうか？」

「それもなかった事になる。ティーダー尉には申し訳ないが事故死ということになる。そのかわり君には昇進の機会を与えよう。医務官は曹長相当扱いだが三等尉に昇進とする。異論はあるまい？」

「・・・あります。ありますよ。おかしいじゃないですか！？事件解決できたのもティーダーさんのおかげなのにそれをなかったことになんて・・・」

「君ももうわかってても良い頃だ。世の中にはこういう部分もあると言う事だ。これは決定した事だ。異義は認めない」

「そんな・・・」

「割り切りなさい。これが大人の世界というものだ。管理局に不正があつてはならんだ。これで要件は終わりだ。下がちなさい」

「・・・・・・・・」黙つたまま動こうとはしない

「君が受け取らなくても他の誰かが受け取る事になるんだ。ティーダ君と仲が良かったそうじゃないか、なら君が受け取った方が彼も喜ぶだろう」

「・・・・・・・・失礼します」そう言われては引き下がるしかない。殉職で二階級特進とは行かないようだ。なぜなら、なかった事にされてしまったから。事故死に特進などないだろう。

クソ！！壁を殴りつけて本部を後にするのだった。人生ままならない

- - - - -

ティアナに連絡を取る。事の次第を伝えるためだ。

ティーダさんの事がなかった事になると言う事、そして本来ティーダさんが受け取るはずだった褒章をオレが受け取る事になってしまった事。他言無用と言われたが、ティアナには話しておかなければ

ならない。

罵られるかと思ったがティアナはオレに対して何か言う事はなかった。それどころか

「貴方が受け取ってくれるなら兄さんも喜ぶと思う。あなたが忘れない限り兄さんの名誉はずっと残るもん。だから気にしないでください。」

と言われてしまった。10歳の女の子にそんな事を言わしてしまう、そんな世の中がむしようにやるせなかった。オレは、何も言えずただ頭を下げて連絡を切ることしかできなかった。

「情けないな。本当に情けねえ。医務官になっても大切な人さえ救えず、守るために身につけた力も何も役に立ってない。オレ何してんだろうな」ベンチに腰掛けながら愚痴をこぼす。

「これが人生ってやつか？フン、ままならいね。どれだけ頑張ろうとも願った通りにはいかず。まあ当たり前と言えば当たり前か。世の中そんなにうまくはできていないよな。・・・ハア」

・・・俯いたまま顔を上げる事が出来ない。今までの人生を振り返ってみて結局失敗しかしてないんじゃないだろうか？そんなことしか考えられない今の自分に余計嫌気がさすのだった。

- - - - -

ティードの葬式が終えてからオレの職場はゲンヤさんの所に移動となった。本当はまだ残っていても思ったのだが、たび重なるエース喪失のせいで本局から魔導師が派遣される事になった。

だが、そいつが問題でどうやら闇の書の守護騎士の一人らしい。オレが闇の書の被害者である事を知っていた上司の人が気を利かせて移動させてくれる事となった。

正直ありがたい。今の状況なら八つ当たりをしてしまうかもしれない。母さんは済んだ事と割り切っていたが今の精神状態で制御できる自信がない。おそらくそう言ったところも考えて異動になったのだろう。毎回問題を起こされたら上司としてはたまったものではないから。

ゲンヤさんの部隊に配属になった。一応武装局員として。今は医務官の仕事をやれる精神状態ではない。今回のことで三等空尉の地位を持ったので医務官としてではなくても問題ない。

ゲンヤさんもこちらの事情をわかってくれたようで、了承してくれた。少し残念そうではあったが。

武装局員としての仕事は結構忙しく何かしらの問題が起こるとすぐに出動になる。一番ひどかったのは小学生のケンカに駆り出された事だ。誤報だったらしく暴れているやつらがいると言ってみればまだ子供の取っ組み合い。すぐに仲裁し注意して終わった。

そんな感じで日々を送っている。仕事の方は可もなく不可もなくと言った感じでやるだけだ。邪魔と言われるほど怠けているわけでもなく、かと言って熱心にやっているわけでもない。前にクイントさんにシャキつとしないと言われるくらいだったが、メガ・又さんがサボっているわけじゃないから問題ないのよといっておさめてくれた。

クイントさんからすれば昔のオレを知っている分今のオレの状态が許せないのだろう。メガ・又さんも言いたい事があるようだがどうも濁してしまっている。

二人の言いたい事もなんとなくわかるのだが今は……

一年程仕事をして仕事にも慣れてきた頃、またしても予期せぬ事が起こった。世間の荒波はいつでも襲ってくると言う事だ。……八神はやてが来てしまった……

指揮官研修で104部隊に來ているはずなのだが、なぜか108部隊にいる。どうやらコロコロ部隊を移動しているようだ。今回それがここだったってだけ。ハアゝ

とりあえず彼女とは合わない方向でやり過ごそう。速攻で事務作業に逃げ引きこもり極力顔を合わせないようにする。久しぶりにオレ

がやる気を出したと勘違いしたクイントさんがいても仕方のない事だ。

一週間ほどして彼女はまた別の部隊に異動となった。やっと安心して仕事ができると安堵していると

「もうまた隠れながら仕事してたの？」

「あ、クイントさん？」

「まあ会いづらいのはわからなくもないけど……」

「あの人に何かあるわけではないんですけどね。ただあの人の……」

「

「わかってるわ。でもいつまで気にしても仕方がないでしょう。先輩なんてすぐに忘れてたわよ。」

「まあ、母さんですから。神経の造りが人と違うんですよ。オレこれでも繊細なんです。」

「ハァ」。折角やる気を出したと思ったのに……私のぬか喜びを返さない」

「ガンガン出してるじゃないですか。ただ相手に伝わらないだけで

す。それにスバル達に家庭教師をしてるでしょう。それでチャラです。」

「それはありがたいんだけどね。なんというか、ハア〜」

「ため息つくと老けるって言いますよ」

「なんですって!？」怒気が強まる

「幸せが逃げるって言ったんですよ。あははは」

「フゝ、まあ良いわ。それと今日の事覚えてる？」

「？」

「あんたそう言うところ又けてるわよね。今日ギンガとスバルとルーちゃんがつちの所に見学に来る話よ」

「ああ、そんなこと言ってましたね。ただスバルの目的は近くのアイス屋さんでしょうけど・・・」

「あの子、アイス好きだからね。きつと山盛りね」

「ゲンヤさんの財布が冷たくなりますね」

「まあ娘にねだられるとついつい甘やかしちゃうからね。」

「親バカですもんね。」

「娘離れできないと大変なのにな。ギンガ達が嫁に行く時が大変そう」

「確かに、旦那さんになる人は相当な覚悟が必要でしょうね」

「あら、貴方なら問題ないんだけど・・・あの人も貴方なら良いつて言ってるし。ギンガ達も結構好きみたいだし」

「まあ家族愛ってやつですね。ギンガ達もそんなところでしよう。オレにはなんとも言えませんよ」

「だらしないわね。お宅の娘さんをくださいぐらい言えないの？」

「どうでしょうね？いつかそういう時が来るかもしれませんが来ないかもしれません。それに忘れていくんですけどオレまだ14ですよ。ギンガと違って1つしか変わらないお子様ですって」

「そう言えばそうね。昔から働いていたから忘れていたわ」

「まだまだお子様ですよ。だからそういう話はもっと大きくなって

からという事で。もつともそのころには他の人を好きになる可能性もありますか……」

「ん〜なんなら今の内に私の事お義母さんと呼んでみる？」

「別に言っても良いですけど、照れるってほどではないですよ。子供のころから面倒見れもらっているわけですし、メガ・又さんやクイントさんはもう一人の母親って感じですね」

「そこでメガ・又の方を先に言った意味はあるのかしら？」

「いや〜どちらかというとメガ・又さんの方が母性に溢れて（ス〜）いると思っただんですがやっぱり二児の母であるクイントさんの方が母性がありますね。ハハハ」

クイントが拳を構えるのを見て即座に意見を変える。魔導師ではなくなっただがその拳はいまだ健在で冗談ではすまされないパンチが飛んでくるのにほめた方が身のためである事を身をもって知っているからである。

「そうよね。なんか聞き間違いをしちゃったから、あははごめんなさいね。」そう言って笑っているがかなり怖い。

と、そんなことを話していると突然警報が鳴った。嫌な予感がしな

がらもクイントさんと一緒に部隊長室を目指すのだった。

第8話 人生ままならない（後書き）

はやてと絡ませようかとも思ったんですが次回に回す事にしました。
次回の更新をお楽しみに

第9話 空港火災とその後

「それでゲンヤさん、何があつたんですか？」

部隊長室に着いて現在の状況を聞く

「空港火災だ。空港内部のタンクが爆発し火災が起っている。現在近くの地上部隊が消火と救助に当たっている。今から緊急出動だ。魔導師隊は先行し現地の指示に従って救助の手伝いをしてくれ。オレ達も現場に入り次第すぐに指揮系統を調整する。ジン！」

「はい！」

「お前は転移魔法で先に行け。お前単独ならすぐに行けるだろう。人命救助を優先してくれ」

「了解」

「それじゃー各員出動するぞ。一人たりとも死人を出すな！」

「了解」
「了解」
「それぞれが準備をしに戻って行く。だがクイントとメガ・又は残ったままだ。」

「あなた、ギンガ達は……」

「おそらく、中に取り残されているだろう。時間的にはピッタリだからな。」

「それじゃー急がないと!!」慌てるクイント

「落ち着け。上官のオレ達が慌てたら他のやつらに伝染しちまう。大丈夫だ。あっちにも魔導師隊はいるし、なによりジンが先行する。」

「そうよ、クイント。ジン君ならやってくれるわ」

「そうね。ごめんなさい、取り乱して」

「仕方がないわ。今はやるべき事をやりましょう。」

「ええ!」

- - - - -

一方その頃のジンは先行して空港に到着していた。現在の現場管制官に指示を仰ぎに行く

「陸士108部隊から救援に来ました。現在の指揮官はどなたでしょうか?」

管制場のようなところで尋ねる

「あ、私です。臨時で此処の指揮を任されてます。本局特別捜査官八神はやて一等陸尉です。108部隊はもう到着したんです・・・か？」お互いが顔を合わせると微妙な空気に。ただジンは切り替える

「・・・いえ、自分だけです。転移魔法が得意なので部隊長の命により先行しました。状況説明と指示をお願いします。」

「・・・は、はい。現在タンクに引火した火が燃え広がり魔導師陣で防御している状況です。それで今回臨時で協力してもらっている本局の魔導師の人に救助の手助けをしてもらっているところです。そこらには人命救助の手助けをしてもらいたいのですが・・・」

「了解です。空港内の詳しい見取り図はありますか？それでも短距離転移は得意なもので・・・」

「それならこの子連れつてあげてください。私のユニゾンデバイスなんです。リインしつかりとサポートしてあげてな。」

「了解です。はやてちゃん。よろしくお願いしますね。え」と・・・

「

「ジン＝ヤナギバです。」

「よろしくです。こちらはリインフォース？です。」

「よろしくお願いします。では行きましょう。」

「はい」リインを連れて転移する。ちなみにリイン嫌悪感を抱かないのは闇の書とは無関係だからである。無関係なものにわざわざ当たるような事はしない。リインの無邪気さに戸惑ったというものもあるが・・・

「ここか？要救助者がどこにいるかわかりますか？」空港内に入る。辺りは煙と火でよく見えない

「任せてください。サーチを開始します・・・見つけました。座標ポイントは・・・これです。」リインから正確な座標が送られてくる。

「了解。それじゃー行きますよ。」

「はいです」こうしてラインと組み救助者を見つけては救助隊のもとに転移で送り届けて行った。自分でサーチもできるのだがそうすると転移するのに時間がかかりラインに任せる運びとなった。

結構息が合いどんどん救助者を送り返していく。問題は数が多い事だ。後何人だ？それにまだスバル達を見つけられてない。どこにいる！？

「次の救助者を見つけました。集団で固まっているようです。エントランスホールの近くです。」

「了解」急いで転移する

.....

「助けに来ました。時空管理局です。これから安全なところまで皆さんをお送りします。」オレが転移した先に金髪の女性が先に着いていた。確かあの人は.....

「フェイトさん！！」ラインが寄って行く

「り、ライン？どうしてここに？はやたと指揮してるんじゃないの？」

「ジンさんのお手伝いです」

「ジンさん？・・・あ！」「こちらに気づいたフェイト。

「二人とも今は救助が先です。オレがこの人たちを転移させますんで・・・この防壁はずしてもらえますか？ハラウン執務官」

「えっとそれ私がやったものじゃないんですけど・・・」じゃあ誰がと聞こうとした時

「お兄ちゃん！！」聞きなれた声が聞こえた？

「ル、ルー？よ、良かった。此処にいたのか。もう大丈夫だ安心しろ。ギンガとスバルも一緒か？」

「うん。スバルちゃんのはぐれちゃってギンガさんが此処に魔法障壁を張って助けに向かった。私はまだうまく魔法を使えないから此処でじっとしてて。早く助けてあげて」

心配そうするルーの頭をなで

「任せとけ。お前達を届けたらすぐに向かう。救護班のところで安心して待ってろ。その内メガ・ヌさんも来る。」

「う、うん」不安そうにしているが今は構ってられない。すぐにルー達を転移させギンガが探しに行った方に向かおうとする。

「行きますよ。執務官はどうしますか？」

「私も行きます。他にも救助者がいるかもしれないので」

「わかりました。それじゃー行きますよ」フェイトとリインを連れてギンガの所に向かう。

・
・
・
・
・

ギンガ視点

「スバルどこ！？返事して！お姉ちゃんが今助けに・・・きゃあああ」スバルを探しているギンガの足元が崩れる。

ギンガはなすすべもなく落ちるが・・・

「ソニックムーブ」何かの機械音のような声が聞こえてすぐ。自分が浮いている事に気づく

「良かった。間にあって」

「え？」ようやく自分が抱えられている事に気づく。ポーっと見ると自分の良く知る人の声が聞こえた

「ギンガ無事か！？」かなり慌ていたようだが

「ジ、ジンさん！？」

「おお、オレだ。その様子なら無事のような。悪かったな。もう少し早く来るつもりだったんだが。それとハラウン執務官ありがとうございます。転移後の一瞬では間に合わなくて」

「いいえ。無事でよかったです。御家族ですか？」

「まあそんなところです。妹みたいなもんです。・・・ギンガ、スバルはどこにいるかわかるか？」

「わかりません。この近くで、はぐれたはずなんですが・・・」

「ジンさん！生命反応あり。近くに魔導師さんがいるようですが・・・」

「わかりました。すぐに向かいます。すいませんがギンガをお願い

できますか？」フェイトに尋ねる

「わかりました。この子を届けたらすぐに援護に向かいます」フェイトはそう言ってギンガを連れて戻って行った。こちらも急いで生命反応があつた場所へ転移する。

・・・

「デイベイーン・・・」転移したところに物騒な声が聞こえる。なんかめっちゃ収束してるのが見えた。慌ててリインが止めに入る。

「うわああ、な、なのはさん！！ス、ストップです！！そんなのくらったらリイン達は骨も残りませんよ！！」リインが射線上に入つた事に気づいたのはが慌てて魔法を解除する。

「り、リイン！？どうしてこんなところに？」さっきも似たような質問をされていた。

「ジンさんのお手伝いです」同じ返答だ

「え！？ジン君？」なのはが視線をこちらに移す。ジンはなのはに会釈しながらも救護者を見る。やっぱりスバルだった。

「ジン兄！！」スバルが泣きながら飛び込んでくる。

「悪かったなスバル。遅くなった。でももう安心だ。」頭を撫でながらスバルを安心させる。

「でも、ルーちゃんとギン姉が・・・」二人の事が心配で少し慌てる。

「二人とも無事だ。さっき救助隊に引き渡してきた。ゲンヤさんも指揮に入っているしクイントさんももう来てる。だから今から送ってやるから高町教導官と一緒にいな。」

「う、うん。でもジン兄は？」

「オレはまだ残されてる人がいるかもしれないから探してみる。安心しろ、逃げるのは得意だ。・・・ということでもよろしいですか？高町教導官。二人を此処から転移させますんでスバルをよろしくお願いします。それとあまり言いたくはないんですが、局員が建物を破壊しようとするのはやめてください。それに、此処で収束魔法なんて使ったら崩落の危険があつて二次災害が起こる可能性もあるので。」

「うう、久しぶりに会ったのにジン君冷たい！！」膨れたように言う

「今はそんなアホな事をしている場合じゃないんでとりあえず送りますね。文句は聞きません」そう言っただけなのはとスバルを転移させる。なのは何か言っていたがそんな事は無視。救助者を探しに行く。

「それじゃー行きますか？まだ反応はありますか？」リインに聞く

「ええ」と……ありました。Aブロックに生命反応あります。」

「了解！」「リインとの救助活動が続くのだった。

- - - - -

ひとまず空港内の救助者は全員助け出した。オレとリインが助け出したのだ全体の半分も占めるのだから頑張った方だろう。火災の鎮火は専門外なので地上本部の応援部隊に任せる。

今はリインとともに離れたところで休憩している。いくらバリアジヤケットや障壁と纏ったと言っても長時間火の中にいたせいで体が

熱い。熱くなった体を冷ましている。リインはオレのふとももの上で倒れている。どうやらかなり疲れているようだ。

ふう〜海風が今の体には気持ちいい。今なら海に飛び込んでもいいと思えるくらいだ。そんな物思いに耽っているとリインから話を振られる。

「ジンさん・・・」オレの足の上で倒れていたリインがこちらを向いて聞いてくる

「ん？なんですか？」

「ジンさんは私たちの事を恨んでますか？」おそらくオレが闇の書の被害者であることを彼女たちから聞いたのだろう。

「なんで？」

「だって・・・」

「恨んでないとは言わない。幸い母さんやオレも無事ではあったけど、もし母さんに何かあったらどうなったかわからないし・・・ただその事が理由で貴方や貴方の主人を恨む理由にはなりません。特に貴方は関係がないわけですし。」

「そんなことはありません！！私だって・・・」

「いいえ。たとえ、貴方の先代の意思を引き継いでいようと貴方はオレ達の事とは無関係です。それにオレは襲われたからどうこうしたいのではありません。守護騎士連中を許せないのはもっと別の所に有ります。」

「それは・・・」

「教えるわけにはいきません。それに今教えたところで意味などないですし・・・今彼女たちに謝られてもつつとしいだけなので・・・正直もう済んだ事です。あちらが関わってこなければどうでもいいことなんですよ。」

「・・・」

「だから、貴方を恨むなんてことはないですよ。むしろ、今日の事には感謝したい。おかげで大事な妹分達が助けられたのですから。」

「そ、そんな・・・リインはサポートしただけです。ジンさんの転移魔法がなければリインなんてダメダメですう」慌てて否定したようだ、少しうれしそうだ。ほめられたことが素直にうれしのだ

ろう。

「そのサポートがあつたからオレは転移に専念できたんですよ。オレが両方やっていたらかなりきつかったと思います。まあテレやな誰かさんがそう言うのでしたら二人の成果という事にしましょう。どちらが欠けてもできなかった事ですし。」

「はいです。それがいいです。私たちは良いコンビなのですよ。」

「そうですね。」

二人でそんな会話をして楽しんでいるのだった。

- - - - -

リインとの休憩も終わり管制室のようなところへ行く。なぜかリインが頭の上に乗っているがあえて気にしない。仕事に着いたら切り替えるだろう。．．．．．実際頭から肩に移動しただけなんだが．．．

ゲンヤさんに事後処理はこちらでやるから帰っていいと言われたので言葉に甘える事にする。今日は疲れたので早く休みたい。

「（ギンガ達もケガもなかったし（スバルは転んで足をすりむいたようだが・・・）クイントさんやメガ・又さんが付き添っているから大丈夫だろう。さっき様子を見に行った時にお礼を言われたしオレがいると変な気を使わせてしまいかもしれないからな。怖い思いもしたから母親といるのが一番安心だろう。」

そう思つて帰ろうとすると後ろから声をかけられた。どうやら彼女たちも仕事が片付いたらしい。ただ、はやてとなのはがいる以上めんどくさい事になるのでさっさと退散する事にした。

「お疲れ様です。自分は仕事（帰って寝ると言う）がありますのでこれで・・・」頭を下げた。帰ろうとする。しかし、

「ナカジマ三佐は仕事はないって言つてたで。」はやてがゲンヤさんと話していたとは・・・

「部隊長の勘違いでしょう。自分は隊舎に戻りますので失礼します。お三方と会える機会なんてもうないと思います。がもし出会う事があったらその時は気にしないでもらえるとうれしいです。」

「もージン君。久しぶりに会ったんだよ、冷た過ぎ！」なのはが膨れたように言う

「あ、そうですね。お久しぶりです。高町二等空尉。体調はよろしいようで、なによりです。先程も言いましたが仕事があるんで失礼します。お体には気をつけてください。では」

振り返って帰ろうとするがそんな事は許されず

「もうお仕事は終わりなの。だから、なのはで良いよ。みんなそう呼ぶし。ジン君だってお仕事終わりでしょう？久しぶりにお話しよう。」

「ハア、あいかわらず「なの」って語尾に付けてるんですね。そろそろそんな年でもないでしょうに・・・それと年上の女性を名前で呼ぶなんてできませんので高町さんと」

「でも、スバルと話してた時、スバルのお母さんの事クイントさんって呼んでなかったっけ？」

「なかなか目ざといですね。でも、クイントさんともう一人メガ・又さんっていうですけど、二人は小さいころから知ってますし、家族ぐるみでお付き合いをさせてもらっているんで問題ないです。」

「それなら、私の先生だった訳だし名前で呼んでも問題ないよ」引き下がないのは。

「もう昔の話です。今は上司と部下の関係です。プライベートでも年上と年下の関係ですよ。それに管理局の白い悪魔と目される方に親しくできる一般局員なんて畏れ多くていませんよ」

「ぶっ！昔のジン君の方がかわいかった。それに悪魔じゃないもん！！」

「あ、これは失言でした。言い代えます。管理局の白い魔王でした。申し訳ありません。」

「うっ！フェイトちゃん。ジン君がいじめる」フェイトに泣きつくのは

「よしよし。」とりあえず頭を撫でるフェイト

「それじゃーお二人の邪魔をするのは気が引けるんで退散しますね・
・」

「ちょおっ！と待ち！！なのはちゃんは騙せてもうちは騙されへんで。さあ観念してうちらとお話しようやないか？こんな美人が3人もいるや断る理由はあらへんやろ。」

「え！？疲れたので断りますけど、何か問題でも？」

「そんな、なに言ってるのこの人？みたいな顔するんじゃない！！こ
つちが恥ずかしいやんか」顔を赤くして叫ぶはやて

「ジンさん、はやてちゃんのお話を聞いて欲しいです。」

「まあ、リインさんの言うことなら仕方ないですね。それで、何か
用ですか？本当の所早く帰って寝たいところなんですが。」

「「リインに負けた！！」「はやてとなのはが反応する

「ジンさんとリインは仲良しさんです」

「そうですね」

「ちょーつと納得いかん事もあるんやけど、今はええ。とりあえず
家に来へん？そこで話そうや。それにうちなら休めと思うよ」

「嫌ですよ。そんなことしたら、あなたのご家族とご対面しちゃう
じゃないですか。」

「家の子達は今は別任務であらんから気にせんといてや。」

「それじゃ、そちらもオレの事は気にせず三人で仲良く遊んでください。というより帰っていいですか？」

「ジン君。とりあえず、ごめんね。」なのはのその言葉を最後に意識は薄れて行った。最後に見たのは後ろから魔法を使ったらしきなのはの申し訳なさそうな顔だった。

第10話 話し合い（前書き）

かなり偏った見方があると思いますがご了承ください

第10話 話し合い

空港火災での救助を終えてからなのはに意識を飛ばされてようやく目が覚める。

「此处どこ？」辺りを見回すとどこかの一室家具などは最低限のものしか置いてなく来賓者用の部屋のようだ。

「・・・思い出した。あのあと気絶させられたんだっけ。これ軍に出したら問題にできるかな？」

「それはやめて欲しいんだけど・・・起きた？」管理局の白い悪魔がそこにはいた。

「！！・・・ええ、なんとも気分の悪い目ざめですけど。オレに恨みでもありましたか？一応貴方の治療者なんですけど、恨まれるようなことしましたっけ？」

「うつうつ、ごめんなさい。あの時はああでもしないとジン君話をしてくれそうになかったから・・・」申し訳なさそうに言うのは

「いや、むしろ余計に話をする気にならなくなっただけですよ。誘拐されてのん気に話す人ってなかなかいないと思うですよ。常識的

に」

「うう」さらに落ち込むのは

「それで誘拐の目的はなんですか？金ですか？まあそれなりには持っているとは思いますがエースと呼ばれるあなたほどではないと思うですけど。それにこの場合管理局に通報した方が良いですかね？誘拐するのもされるのと同じ管理局員なんですけど・・・」

「だ、だから誘拐じゃないんだってば！！」手をバタバタさせながら否定してくるのは・・・子供っぽい

「知ってますけど。冗談ですよ、相変わらず反応がわかりやすいですな」

「うう、ジン君も相変わらずなの」からかわれた事に気づいて落ち着いたなのは

「その語尾もどうにかした方がいいと思いますよ。」

「が、頑張ってるの！クセだからしょうがないでしょ！！」恥ずかしそうに言うのは。自覚はあるらしい

「で、本題に戻りますけど話してなんですか？ 特にお話するような事はないと思うんですけど」

「それは・・・はやてちゃんの方から。さっき念話で伝えたからもう来ると思う。」

「ハア」ため息しか出ない。いまさら何を話せと言っただろうか。めんどくさいなと思っっているとはやてとフェイトが入って来た。はやては人数分のコーヒーをもって来てるようだ。

「ごめんな」無理やり連れてきて。あ、コーヒーでええか？ 嫌なら別のを用意するけど」

「いえ、お構いなく。ありがたく頂きます。どうも当たりどころが悪かったのか撃った人が悪魔だからなのか頭がすっきりしなくて」なのはを見ながら言う

「うつつ、またそうやって・・・それに私悪魔じゃないもん!!」

「また言い直しをさせるんですか、仕方ないですね魔」魔王でもないもん!! 普通の女の子!!」・・・もうなんですか、自覚があるなら最初からそう言うてください。」

「フェイトちゃん」再びフェイトに泣きつくなのは。それを慰めるフェイト。見慣れた光景だ。

「で、八神さんは何の話ですか？予想はできますけど」

「予想通りの話や。うちの家族がした事についてやな。」

「それはもう済んだ事です。今更何も変わりません」

「それでも謝らせて欲しい。この通りや」土下座の格好になったはやて

「顔をあげてください。貴方に謝られても困ります。実際の所貴方の知らないところで起きた事ですから。」

「でも、私はあの子達のマスターやから。責任はとらないかん！」

「……ならあいつらを拘置所にでもぶち込んでください。できますか？できないでしょう。貴方達は管理局に罪を償って今は局員ですから罪なんてないですしね。それに管理局の方も貴方達を手放したりはしないでしょう。Sランク魔導師がいるんですから、人手不足の管理局がそんな事をするわけありませんし」

「・・・・・・・・」沈黙するはやて

「だから、今貴方のしたことはただの自己満です。そもそも許してもらってどうする気ですか？オレ以外にも被害者もしくは遺族の方はたくさんいます。今みたいに全員に頭を下げて行くんですか？あなたが。関係ないものもあるでしょう。というより貴方は主というだけで闇の書関連の事件に全く関係ありませんし」

「で、でも」

「あなたが言っている事は包丁を作った人が、それを殺人に使われたから罪を償うと言ってるようなものです。そんな事があつたら世界中の人が犯罪者になりますからね。だから貴方には関係ない。」

その言葉にまたも言葉がなくなったはやて。沈黙が続く空間に声が入ってくる。

「なら、私なら関係があるのだな」ピンク色の髪をした女性が部屋に入ってきた

「シグナム！！」はやてが驚いたように振り返る。どうやら彼女を呼んだわけではないようだ。

「すみません主はやて。仕事が予定よりも早く終わり帰ってきたら話声が聞こえてしまって・・・」やはり偶然のようだ

「・・・」突然の事に驚きながらもやはり気分が悪くなる。すると、はやてと話していたシグナムがこちらに向き直り話しかけてくる

「私はヴォルケンリッターの将シグナムという。貴方の事は覚えている。あの時は本当にすまない事をした。」今度はシグナムが土下座の態勢をとった。フェイトは驚いているようである。実際シグナムがこういうことをするのを見た事がなかったんだろっ。

「・・・で、オレはもう帰っても良いですか？」

「ジン！！シグナムが此処までやってるんだよ」フェイトが割って入ってくる

「やめろテッサロッサ。これは私たちの問題だ」

「でも・・・」

「それで、帰っていいですか？」気にせず帰ろうとする

「ま、待ってくれ。私たちにできる事なら何でもする。私たちのことは嫌ってくれて構わない、しかし主はやての事は……」

「何言ってるんですか？そもそも八神さんをどうしようもないなんて思ってもいませんよ。しようと思ったらくくにやっています。それと何でもするなんて軽々しく発言しないでください。イラつきます。そもそも貴方に何ができますか？戦うことしかできない貴方が。」

「私にできる事なら何でも……」

「ならとつと拘置所にも行って務所暮らしでもしてください。できるんですか？」

「……」

「そう、貴方にできることなんて何もない。それに今更謝られたところでどうにかなるんですか？他の方達はどうするんですか？まさか、形だけでも済まそうなんて思っているんじゃない」

「それはない！！謝る事が出来るなら謝りたい。しかし、誰に謝ればいいのかわからないんだ。私達は転生するたびに記憶がリセット

されてしまつて、昔の事はよくわからないんだ。だから、今の私達にできる事は、少しでもそういつた被害者を減らすことしか……」

「それはご立派な事です。そう、だから意味がないと言つたんです。貴方達は昔とは違うのでしょうか。被害者の方からすれば納得ができない人は多いかもしれませんが……それと貴方はひとつ勘違いをしています」

「それは一体……」

「オレは貴方達が蒐集した事に関しては特に思うところはありません。主が大切だったんでしょう。オレも同じ状況ならおそらくそうします。家族が死にそうなら助けようとするのは当然です。」

「じゃーなんでそこまでシグナム達を……」疑問に思つたフェイトが言ってくる

「リインさんにも言つたんですけど、あまり言いたくはありません。いまさら言つてもしょうがない事だし、空気を悪くするだけなので……まあ今でも十分悪いんですけどね」

「教えてもらえんやろうか……この通りや」はやてが頭を下げる。

「ハァ、頭を下げられては仕方ないですね。別に大したことではありませんよ。それよりその人に質問していいですか？」

「ええよ」

「では、貴方に聞きます。貴方は蒐集を命令されたんですか？」

「それはない。昔はそうだっただろうが今回は私たちの意思だ。」

「そうですね。おれもそう聞いています。むしろ八神さんはやりないうように言っていたと」

「事実だ。それを破って、騎士の誓いを破って私達は蒐集を開始した」

「では次の質問です。なぜ貴方達は主の命に背いたんですか？」

「主はやてを助けたかったからだ。」嘘などないと言わんばかりの顔である

「なぜ？」

「理由などない！助けたいと思う事に理由が必要か？」

「いえ。つまりあなた達には感情があり、自分で判断できるんですね」

「ああ。」

「では、なぜ昔はそうしなかったんですか？判断できるのでしょう、自分のしてる事が。今回主の命令に逆らえたのですから逆らおうと思えば逆らえたはずです。なぜしなかったんですか？」

「そ、それは昔の主に強制されて・・・」はやてが庇う。

「でも逆らえたはずです。それをしなかったという事は貴方達にとって人を襲うと言う事は大したことではないと言う事です」

「そ、そんなことはない！！」シグナムが否定するが

「ではなぜ襲ったんですか？ああ、記憶がないからわからないんでしたっけ。それでは今のあなたに言っても意味はありませんが、所

詮は魔力補給程度でしか考えてなかった事でしょう」

「……………」反論したいが事実があるので否定できないシグナム

「今回は主が温厚で子供だったという事もあって人をあやめてはいないようですが、それもあくまで主に迷惑がなるべくかからないようにするため、つまり人の命など別段気にしてはいない。」

「そんなことはない！！家の子達は皆優しい子たちや！」

「では、なぜ襲う必要があるんですか？」

「え？そ、それは、うちのために……」

「別に蒐集するのに襲う必要はないんですよね？」シグナムに聞いてみる

「……………ああ。」

「では、なぜ襲ったのでしょうか？魔力を提供してもらっただけなら穏便に済ませられたかもしれないのに……高町さん」

「な、何？」いきなり話を振られてビックリするのは

「貴方は幼い死にそんな少女のために魔力を提供することを断りますか？もちろん自分の命にかかわらない範囲で」

「ううん。そんなことしないよ」

「そういうことです。少なくとも高町さんを襲わなくても魔力は得られたはずだ。しかし、貴方達は襲いかかった。なぜでしょう？」

「・・・・・・・・」

「答えは所詮魔力補給だからです。死ななければどうなろうと構わない。その程度の認識でしかないんですよ、貴方達にとって人なんて。」

「ち、違う」

「いいえ、違います。現にオレ達の時だって魔力をとった後は放置だったじゃないですか。あの後救助の人が早く来てくれたから助かりましたけど。母さんはかなり危険な状態だった。命にかかわるほどの」

「・・・・・・・・」

「それに襲われた局員のデバイス記録もみせてもらいました。たしか、赤い髪の子。ええっと・・・」

「ヴィータちゃんのこと？」なのはが答える

「ああそれです。その子は自分で瀕死に追いやった局員から魔力を蒐集したにもかかわらず、大した足しにはならない餌とまで発言したらしいですね。」につこり笑っているが目が笑っていない。

「・・・・・・・・」もうなにもいえないシグナム

「それと貴方達は良く騎士の誇りがどうか言ってますね、そんなくだらないもの捨てたらどうです？主を救うために人に頭を下げれない程度の誇りなんてただの飾りじゃないですか。」

俯くことしかできないシグナム

「自分した事に対して土下座までして許しを請うのにどうしてお願いするのに頭を下げれない。お前ら人の命をなんだと思ってる！！」シグナムの胸倉をつかんで起き上がらせる。

「す、すまない……」顔を合わせようとはせずかすれた声で謝るシグナム

「そんな今聞いたつてしょうがないんだよ！！お前ら主が大切だから、生きて欲しいからだから約束を破つてまで助けようとしたんじゃないのか！？失いたくないから。何でそれがわかってるのに人の命を軽んじる！！もし今回の事で死者が出たらお前らは一生恨まれる。勿論主も。大事な人を失う悲しみはお前らが頭を下げたくらいでどうなるもんでもないんだよ！！それをわかってやってるんだつたら今ここで引導を渡してやる！！」デバイスを銃型に変更して構える

「ジン君！落ち着いて」なのはが止めに入りフェイトがオレからデバイスを取り上げる。はやてはシグナムの方に向かう

「……すみません。熱くなりました。もう大丈夫です。」そう言つてなのはとフェイトを引き離す

「オレが言いたいのは何を思つて謝っているのかです。ただ許されたいと思うだけなら謝らないでください。自分の罪悪感を減らしたいだけなら謝らないでください。その所を踏まえて発言してください。できる事なら何でもする。被害者の遺族の方からすれば死んでくれというくらいのことだつてある。それくらい大切な人を失つ

た悲しみは深い。だから、貴方達にできる事は何もないんですよ」

「ならいったい私達はとうしたら……」

「知りませんよ。一生悩んでください。それが貴方達の業です。一生消える事のないものです。これは、尊敬する人が教えてくれた事です、罪は償う物ではありません背負って行くものです。管理局に入って貴方達がしてきたことは素晴らしい事でしょう、でも過去にしてきた事が消えるわけではないんです。今度ふざけた事をぬかしたら迷いなく撃ち抜きます。ゆめゆめ忘れないでください。」

「わかりました。」シグナムがやや丁寧な言葉遣いに戻って承知した。

「では、オレは帰ります。というより此処どこですか？」さっきの雰囲気から一転していつもどおりに戻る。

「ジン君待つて。私もお話があるの」なのはが言ってくる。それを心底嫌そうな顔をして聞く

「なんですか？なるべくなら早く帰りたいんですが……」

「そ、その顔は傷つくの。」

「なら私が退室しよう。此处にいても空気を悪くするだけだからな。
」そう言ってシグナムが部屋を出て行く。それを見て少し気が晴れる

「それで？何の用ですか？」

「あのね、ちゃんと言ってなかったからずっと前から言おうと思っ
てたんだけど、ジン君がどこにいるかわからないから言いそびれて
たんだ。ジン君治療をしてくれて本当にありがとう。おかげで今で
も空を飛ぶ事が出来ます」

満面の笑みでこたえるなのは。だけど今のジンには眩しすぎた。大
切な人を救えなかったジンにとってみれば自分の無力さを再認識し
た。救えたものと救えなかったもの。そして救えなかったのは大切
な人たち。だからなのは言葉はジンには辛いものだった。それを
顔に出すようなまねはしないが・・・

「前にも言いましたが仕事をしたまでです。それにオレだけの力で
はないですし、あなたもリハビリを頑張ったからでしょう。一応礼
だけは受け取っておきますが・・・」

「が？」なのはが首をかしげる

「今は少し後悔しています。まさか恩を仇で返されるとは思っていなかったのだ。あの時のあなたの言葉を信じて治そうとしたのにいやはや……………」

「ご、ごめんなさい。」即座に頭を下げるのは

「冗談ですけどね。まあ健康そうなのでなによりです。白い悪魔もしくは魔王とまでもくされるまで成長していたのは驚きではありませんが…………治療してよかったんでしょうか」そう首をかしげながらフェイトに話を振ってみる

「ええ！？いい、良いと思うよ。なのはが元気なのは良い事だから」慌てたフェイトだが友達を思い肯定する

「そのせいで局員にトラウマが生まれても？オレもさっきトラウマができるどころでしたし。リンさんには感謝です。あの人が止めてくれなかったら今頃海に散っていました。」

「た、たしかになのはの砲撃はトラウマものだけど、それがなのは

の良さでもあるんだし・・・」フォローしているようでないフ
ェイト

「なんと！！砲撃魔とおっしゃいますか。怖いですね。捕まえよ
うとしても砲撃で返り討ちですか。最強の魔王誕生ですね！」

「そ、そんなことないよ！」慌てて否定するフェイト。それ見て更
に煽るジン。なんかもとの話からだいぶそれてしまった。

「二人ともその辺にしておかんなのはちゃんが・・・」はやて
が苦笑しながら

「そう言えばさつきから静かな気が・・・」先程まで自分の近
くにいたな的是がない。辺りを見回すと部屋の片隅で膝を抱えて
のの字を描いているな的是がいた。すごく暗い、いやものすごく暗
い。

「・・・あははは、冗談に決まっているじゃないですか。患者が
健康になる事を望まない医者がいましようか。医者にとって患者が
元気な事は何よりのプレゼントですよ。いや、ホント元気になって
良かったですねハラウオンさん。」

「そ、そうだよ。なのはが元気なのは私達もうれしいし・・・だから元気出してなのは！！」フェイトがなのはに寄って行く

「でもさっき、トラウマとか砲撃魔とか・・・うつ」がん泣きのなのは。虐めすぎた。

「やはりここは仲の良い御二人に任せて自分は退散という方向で・・・」

「ちょっと待ちい！！あの状態にしたままはまずいやろ。おたくが責任とらんかい！！」

逃げようとしたがはやてに捕まりあえなく失敗。慰める方向で行くしかなくなった

「ええつと高町さん。二つ名がつくなんてかつこいいじゃないですか。パンピーのオレには縁のないものですし、凄腕の魔導師の証明でもあるんですよ。それに高町さんを見たら犯罪者の方も自首するだろうし、安全に解決できるなんてすごい事です」

どうだと言わんばかりのフォローだが

「アカン、それは傷口に塩を擦り込む所業や!!」

「つまりジン君は私が犯罪者も恐れるほどの悪魔だと言いたいのか?」
目がかなりやばい事になっている

「あはははははははは」もう笑ってごまかすしかなかった。

- - - - -

しばらくしてフェイトの頑張りで何とか持ち直したなのは。だが、
まだジンの事をにらんでいる。怖くはないんだけそ……

「……………反省してる?」

「……………はい」

「もうその間はなんなの！！女の子に言っちゃいけない事はいっぱいあるんだよ！！」手をぶんぶん振って言うてくるがそれがあまりにも子供っぽくて全然真剣に聞けないジン。だがその事は理解している（主にクイントの歳とかで）

「わかりました。以後気をつけるようにします。」完全な棒読み

「もう怒ったんだから。レイジングハート！！」なぜかデバイスを起動させようとしてるので、命の危険を感じすぐさま謝罪をする。かなり真剣に

「もう、ホントにわかってくれたの？これからは気をつけてね。女の子はすつごく繊細なんだから。今度言ったらデバイスバスターだからね」なんか物騒な事を言いだした。完全に悪魔が誕生した（ジン限定で）

「了解しました。」もう冗談なんて言えない。言えば死につながるから

「まあ、これでもう大丈夫やろ。それに結構時間もたってもうたし、皆でお昼にでもしようか？ジンもまだ何も食べてへんやろ？」

「いえ、できれば帰していただければ……」

「ジン君？」なのはの抑揚のない声がそれを否定させる

「と思いましたが、おなかが減って倒れそうなのでごちそうになります。」

「ハハ、そんなの準備するからリビングで待つてな。リンも起きてる頃やろうし、シグナムはさっき仕事に行ったからな（どうやら念話してたらしい）。なのはちゃんとフェイトちゃんは少し手伝つてな」

「わかりました。待たせていただきます」

早く帰りたいジンであつたがまだ時間がかかるようだ。

第11話 話し合いその？（前書き）

独自の設定があるのでご了承ください

第11話 話し合いその？

「ごちそうさまでした。」

「はい、お粗末さま」

はやて達が食事の支度を終えた頃にリインが起きてきて少し話を
して食事を頂いた。普段はそんなに食べないのだが今日は結構動い
ておなかも減っていたのでかなりの量を食べた。料理がおいしかった
ということもあるが・・・

「ジン君ちよつとええか？」食事を終えた後リインとお話をして休
んでいたところにはやてから声がかかった。若干めんどくさそうな
顔をする

「その顔は傷つくわゝさっきのなのはちゃんの気持ちわかる気がす
る」

「でしょゝジン君の嫌そうな顔はホントにいやそうだから・・・」
なのはが便乗してくる

「本当に嫌なんですよ。すみませんね嘘がつけない素直なところが
チャームポイントなんです。自分に正直なんです」

「アカン！それでも乙女にその顔はアカン。なんか自信なくすわ」

「それこそ大丈夫ですよ。ハラウオンさんだつたらそんなことしませんもん。それでも空気を読んで嘘をつくのは得意な方でしてね」

「さっきと言ってる事が違うのー！！」なのはがやけに食いつく

「何を言ってるんですか。自分に正直なのは本当ですよ。ただ、時と場所と人を選んでるだけです。」

「一番最後のは余計なの！！人は選ばなくても良いの」やはり自分が嫌がられてる事が気になるようだ。

「それで、何の用ですか？これと言って話す事はもうないと思うんですけど……」

「無視された！？」普通にスルーされて落ち込むのは。フェイトが慰めるという方程式は完成されている。

「いやゝあんな顔された後やとすんごく話すらいんやけど……」

「あ、それなら結構です。無理してまで話さなくて良いですよ。特に面倒なことは・・・」

「ハハハ、面白い事言うやんか自分。そんな言われたら話さないわけにはいかんやないか。フラれたらちゃんと答えるのが関西人つてもんや！」ちょっと怒気が入りながらも笑って話してくるはやて

「意味がわからないんですけど・・・関西人？」

「ん、それはまあええ。話しつちゅうんはジン君は今の地上の本局部隊をどう思ってる？」

「質問で返すようで悪いんですけど、質問の意図がつかめないんですけど・・・」

「今の地上本部は行動が遅いと思わんか？」

「・・・・・・・・」

「うちは今日の事もそうやけど、行動が遅いと思ってる。承認まが得られるまでに時間がかかり過ぎてる。そんなんじやいつか大変な事になると思っんや。だから・・・・・・・・」

「だから何ですか？」

「私は自分の部隊をもちたいと思う。それでな、もしうちが部隊が持てるようになったら・・・協力してくれへんか？」はやてが真剣な表情で聞いてくるも間髪いれずに答える

「お断りします。」

「・・・訳を聞かせてもらえるか？やっぱり、うちの子達か？」

「それもありますが。貴方のような人の下にはつきたくはありません。」

「ジン！！」フェイトが強く言うがはやてが制す

「うちがもと犯罪者やからか？」

「いいえ、そんなことはありません。そもそも、貴方自身は犯罪を何一つ犯してないのでそんな事は考えていません。」

「じゃあなんでなん？」

「現実が見えてないからです。」

「現実？」なのはが首をかしげる。

「はい。八神さんは先程地上の部隊は行動が遅いと言っていました。が、ではなぜ、行動が遅くなるのでしょうか？」手を返してはやてに尋ねる

「それは、承認なんかをとるために時間がかかりすぎやからちゃん？」

「確かに正解です。ではなぜ時間がかかると思いますか」今度はフエイトに手を返して聞いてみる

「うっっん各部署の引き継ぎがうまくいかないとか、上層部の意見

の食い違いとかじゃないかな」

「そういう時もありますが、違います。答えは人手不足なんです。」

「そんなどこだって一緒やん。管理局はどこだって人手不足やん。」

「言い方が悪かったですね。ええっと、現場での指揮官の不足ということです。」

「どういう意味？」

「そのままです。基本的に地上部隊はトップがしっかりしています
がそれを伝え命令できる指揮官が圧倒的に不足しているのです。では、
なぜでしょうか？若くして執務官になった貴方なら理由がわかりますか？」

「・・・優秀な人が少ないってこと？」

「正解です。ではなぜ少ないと思いますか？教導官殿」

「えーっと・・・」 答えがわからないのは

「単純に育成不足ちゃうの？」そこにはやてからフォローが入る

「そんなことはありません。もともとミッドには陸士学校や士官学校などありますし育成面においては問題ありません。それは貴方もご存じのはずです、研修生殿」

「そやった。うちがお世話になったところはしっかりしとったわ。
・・・じゃあなんでなん？」

「育てた優秀な奴を本局が持つて行くからですよ。金に物を言わせて」

「え！？」フエイトが信じられないと言った顔をする。

「事実です。正直地上部隊の職場環境はあまり良くありません。それに給料も佐官クラスにならないと多くはありません。その点本局や海では地上部隊よりも環境が良く尉官クラスでも結構な額が貰えます。それならそちらになびく人は多いのは仕方ない事です。」

「でも、それは管理してる世界のために……」フエイトがフォローしようとするが

「確かにそうですが、本局はやり方が露骨です。少しでも優秀もしくは魔力が高い人を優先的に昇進させ海にいさせようとしています。実際貴方方も子供のころから良くしてもらったのでしょうか？」

「う、うん。リンディさんたちは良くしてくれたよ。」なのはが答える。

「地上ではなかなかできません。それはなぜか？……資金不足なんです。本局と地上本部との予算額にどれだけの違いがあると思いますか？本局は次元管理の名のもとにかなりの予算を確保しているんですよ。」

「で、でも……」フエイトが何か言いたそうだが

「そのお金はどこから来てると思います？ミッドの市民からの税金や有志による寄付です。確かに次元世界での依頼料や管理世界からの寄付などもあると思いますが、殆どが税金や有力者からの寄付から来ているんですよ。それなのに予算は本局が大半をもって行く。ミッドに平和を維持しているのは地上部隊なのに……おかしくありませんか？」

「………」何も言わない三人

「法と正義を貫くのは構いませんが慈善団体ではないんですよ。働いた分はきっちりもらうのが普通です。それを海の連中は正義の名のもとにボランティア活動。そして、そのしわ寄せはミッドの市民に来る。そしてミッドで問題が起これば非難の対象は地上本部なんです。そしてそれに便乗して本局は地上部隊に難癖をつけて色々干渉してくる。ありえませんか？そちらのしりぬぐいをこちらにさせという文句をつけるなんて、頭がおかしいとは思えない。」

「……」俯いてしまうはやて。

「それに承認が遅いと言っていました。当たり前です。指揮系統がしっかりしているんですから。その分時間がかかる。これは今後の課題ですが……でも海の連中は艦船の艦長に全権が渡されその判断で動く。たとえ間違っても自分の次元とは関係ないのでなんらかの処罰もしくは降格程度で済みます。今までにそう言う事はありませんでしたか？例えば犯罪者の逮捕を優先して世界に被害が出るのを無視したとか」

「……あ！確かにある。フェイトちゃんの時だ」なのはが思いだし
て言う

「私？」フェイトが疑問に思っているようだが

「ジュエルシード事件の時フェイトちゃん竜巻を発生させたじゃない？」

「う、うん」

「その時私が危ないから助けに行こうとしたんだけどクロノ君が疲れきって弱ったところを捕まえれば良いって傍観しようとしてた。リンディさんもこれが管理局のやり方だって・・・」

「ああジュエルシード事件ですね。知ってます。執務官殿が関わってたんでしたっけ？」

「そ、そう。あの時はたくさんの人に迷惑をかけた」フェイトが若干落ち込む

「あの時は命令を無視して助けに行っちゃたけど、今考えてみると海鳴がかなり危ない事になっていたよね」

「そうだね。あの時は夢中だったけど。実際なのはがいなかったら封印できなかった。そうなれば被害も出てたと思う。」

「それに事件解決に導いた高町さんには表彰状だけで済ませたんです。たっけ？ありえないですよ。」

「にやはは、それは別にいいんだけどね。そういえば闇の書の時も地球で覚醒しようとしてたし。」

「せやな。あの時は気が動転してしまつて覚醒してしまつたけど、無人惑星だったらそこまで被害が出なかったはずや。実際アルカンシエル撃とうとしてたし。」

「實際海の連中が介入して状況を悪化させたケースは少なくない。ロストロギアは管理局が管理しなくてはの思想のもと良くも知らないのに勝手に封印、そしてほぼ強制的に持つていく。抵抗する場合は犯罪だとか言つて権力を使う。どっちが犯罪者かわかりませんよ。その星の人たちの方が知っているかもしれないのに。管理局の技術力が一番だと言う驕りで相手の話も聞かない。暴走したら知らんぷりしてとんずらしたケースだってあります。そのあと意気揚々と強制介入して管理外世界を管理世界にしてますし。」

「ジンは何でそんなに詳しいの？」疑問に思つたフェイトが尋ねる。

「オレは小さい頃医学の勉強で無限書庫の本をたくさん読んだんで

すよ。管理世界の医学関係の本も。その時各世界の歴史を綴ったものや日記のような本もありましていろいろ読んでいたら書いてありました。一つとかだけだったら気にもしなかったんですが探してみると出るわ出るわの大繁盛。海の連中は否定するでしょうが各世界で同じような事が書かれてるんだから疑いようはありません。案外無限書庫を使えば管理局崩壊なんてのも可能かもしれません。．．．少し話がそれました。それで貴方達本局の方々はそんなぬるま湯のようなところで大切に育てられてきたからあれなんでしょうけど、この状況で地上本部を非難する資格が貴方に有りますか？本局特別捜査官殿？」

「．．．．あらへんわ。うちは何も見えてへんかったということやね。」

「意外ですね。認めないかと思ってましたが」

「そこまで言われて認めないなんてことはせーへん。うちかて箱入りのお姫様ではないんや。」

「執務官殿はなかなか納得してくれませんでしたか．．．．」

「うつ」フェイトが肩を狭くする

「フェイトちゃんは家族が本局の人やから。」

「ああ、エリート一家でしただけ？まあ本局の人たち全員が悪いと言うつもりはありませんが・・・どうも本局のエリート育ちの人は否定的な目を向けてしまいますね。すみません。」

「うつ、うつん。地上で仕事をしていれば仕方ないよ。私も今まで全然不思議に思わなかったから。確かにロストログアに関しては強奪まがいの事をしているし」

「いや、まがいではなく強奪です。」

「うつうつ」

「あんまりフェイトちゃんをいじめんな。・・・ジン君たちはもう少し地上と本局との違いを知ろうと思う。そして自分の部隊を作る・・・」

「諦めてはいないですね」

「当然や。でもさっきまでとは違う。確かに今までは甘えてたと思う、だからこれから知っていかなアカン。その上で部隊を作るんや。」

「まあ頑張ってくださいとしか言いようがないですが……ちなみに誘われても行きませんよ。」

「なんでなん!？」

「正確には行けないが正しいですね。おれはそこにいるエースの方々と違ってパンピーなのでそんな部隊には行きたいとは思いませんし上司の命令なしで異動なんてできません。」

「そやった!!尉官クラスの方は引き抜きができへん」今気付いたといわんばかりのはやて

「そう言う事です。残念ながらこれでも三尉なもんで、ゲンヤさんの命令がなければ無理ですね。」

「お宅も十分エリートやん。」

「おこぼれですよ。オレの手柄ではないです。まあ貴方に言われるほどではありませんが、一尉殿」少し辛そうにしたのをなのは気になったが触れないでおいた。

「でもな〜リインと結構相性いい見たいやし転移魔法はすごかったしな〜・・・やっぱ欲しいわ〜」

「そのぶん戦闘力ははそれほど高くないんですけどね〜」

「え！？でもギンガはすごいって言ってたよ。ギンガを連れて帰る時に少し話したんだけど陸士候補生になっても全然歯が立たないって言うてた。」フェイトが気になったのかギンガとの会話の内容を話す。

「いや〜ギンガの身内びいきに決まってるじゃないですか〜。自分なんて大したことありませんから。」とりあえず否定しとく。なんとなくめんどくさい事になりかねない。

「でも、スバルもジン兄はすごいって言ってたよ。」なのはもフェイトに続く

「それは鬼ごっこですかですよ。逃げるのは得意なんです」

「うーん、じゃあ試してみたらいいとちゃうん？幸い今日は皆休みなんやし。」

「ああ、残念です。実はこれから仕事がありまして……」

「ジン君？」なのはの笑顔が怖い。が此处で引いたら命の危険が・

「嘘です。休みです」レイジングハートを手に持ったのを見て引くしかないと思った。どうせ散るならあらがってから散るほうが良い。

「それじゃー私と模擬戦しようねジン君？」

「さすがにエースと呼ばれる方とはやりたくないんですけど……」

「大丈夫。私これでも教導官だから、悪いところがあつたら教えてあげるよ。」なのは勝てると思っっているんだろう。確かにジンはこのメンバーの中では一番魔力が低いが……

「それはつまり余裕で勝てるって？」

「そんなつもりはないけど……」

「負ける気はないと言う事ですネ。わかりました、やりましょう。こちらを舐められたままでは師匠達に顔向けができないので。悪いですけどその自信をへし折って上げますよ。伊達に訓練は積んでないところをお見せしましょう。」

「わ、私だって負けないよ！ジン君に治療してもらってから頑張つて来たもん。魔法の操作だって得意なんだから」なのはも負ける気はないらしい。

はやては若干失敗したかと思いいながらもこれはこれで面白そうなので良しとした。さすがに家に模擬戦をやるスペースがないので管理局のトレーニングルームに向かうのだった。

第12話 模擬戦

管理局の訓練施設に到着。昨日の空港火災があったため、今日はトレーニングをしている人が少ないようだ。

ジンは結構気が立っている。睡眠不足と予期せぬ対面。さらには模擬戦と言う始末。自分でもおかしなテンションで受けてしまった事を後悔している。

ただ負ける気はさらさらない。ゼストとティータの教えはこんなところで敗れるようなものではないからだ。地上と本局との戦いの違いを見せる機会でもある。

それに相手は高町なのはである。魔力量は自分よりも多いが現状では問題ない。それにエースオブエースと呼ばれるだけあって戦闘に関する資料は何かと多い。相手の情報はバッチリである。典型的な砲撃魔導師で防御が恐ろしく硬い。普通に考えれば勝つのはかなりきついが勝てないわけではない。幸いこちらの情報は転移と銃型デバイスというだけであまり知られていない。

彼女を治療した際に魔力の流れに関しては把握済みなので相手の攻撃もある程度は先読みできる。フィールド設定もこちらに決定権があるので、負ける要素はない。

「それじゃーフィールドは森の設定で行きましようか。市街地戦になると砲撃魔の貴方では能力が半減してしまうでしょうから。あ、それでもいくらバーチャルフィールドでやるからってむやみに森林を破壊するのはなしですよ。環境破壊は自然保護部隊に怒られてしまいますからね、それで良いですか砲撃魔さん？」

かるゝく挑発する事も忘れない。相手の冷静さをなくすことは戦闘において大事なことから

「もうージン君！！私は砲撃魔じゃないの！！もう怒ったんだから、ジン君この試合に勝ったらもう悪魔とか魔王とかじゃなくて名前で呼んでもらうんだから！」

「それじゃーそちらが負けた時はこちらの言う事を一つ聞くと言う事で良いですか？」

「いいよ。絶対負けないから！！」なのはがそう叫びながら空に上がって行く。空戦魔導師らしく空で戦うらしい。

そこにはやてとフェイトが審判に入る。

「ほんなら、撃墜されるか、戦闘不能になった方の負けや。準備はええか？」

「大丈夫です」「うん」

「レディ〜〜ゴ〜〜〜!!」はやてとフェイトの声が重なる。

――――

はやて、フェイト視点

「それじゃーお手並み拝見と行こうか」はやてが戦闘域からはなれて観察モードに入る

「そうだね。ジンの戦闘スタイルはわからないけど転移魔法を得意としてるならやっぱりバックスかな？」

「いや〜そうとも限らないんとちゃうん？銃型のデバイスやっただし、うちの子達だって単独転移はできるけどシャマルを除けばバリバリ前線型やん。」

「でもジンは医務官でしょ？それならシャマルさんと同じ後方型じゃないの？回復する人が最前線ってのは考えにくし」

「うーん、まあ見てればわかるやろ。」そう言ってもモニターに視線を移す。

- - - - -

ジン視点

「（さてどうしますかね？とりあえず試合前に煽っておいたから幾分冷静ではないだろうし・・・でもエースだからな～手堅く様子見と行きましようか。どの道こちらは長期戦方なわけだし）」

そんな事を考えながらなのはの様子を探る。こちらは開始と同時に転移魔法で姿をけたので相手はこちらを探している最中だろう。エリアサーチを使って・・・無駄なんだけどね。

こちらのデバイス、ファントムには相手のデバイスをもごまかすほどの隠蔽工作ができる。直接相手に偽情報を送りこちらの場所を見つけられないようにしてある。あちらのデバイスが自分で発見したかのように錯覚させて・・・

なのはの方もいろいろ場所を移しているが偽情報に騙されてこちらの位置をつかめないでいる。あ、弾幕をはった。

――――
なのは視点

「もうジン君はどこに行ったの！！さっきからちっとも見つからない。レイジングハートわかる？」

「（すみません、マスター。どうやら相手のデバイスの方がうまくかわしているようです。先程から魔力反応を見つけていますがどれもはずれのです。）」

「もうこうなったら自分から出てくるようにさせてやるんだから！アクセルシューター」なのはのまわりに魔力弾が生成される。

「行って！！」誘導弾が森の中に放たれる。

――――

ジン視点

「あらゝあんなに無駄弾撃って、これだからまだに魔力がある人は・・・おおっと」こちらに向かって来た魔力弾を避ける。どうやら魔力反応のするところすべてに撃っているようだ。

「相手も結構じれてるし、そろそろ仕掛けますかね。．．．．フ
アントム、シルエツト」

「yes」無機質な返答が返ってくる。非人格型だからしょうがないけど．．

「空で戦う恐ろしさを教えてあげますよ。」

．．．．．

なのは視点

「マスター反応があります。下です」

「！？クツ」したから襲ってきた魔力弾をシールドで防ぐ

「来ます！！今度は上です．．左、右からも来ます！！」自分のデ
バイスの指示に従い魔力弾を防いでいく。四方八方から襲ってくる
魔力弾に防戦一方になる。陸戦魔導師なら壁を背にしたり余程特殊
な条件じゃない限り地面からの攻撃もない。カバーする範囲が少な
くて済む。実際平地で戦えば空戦魔導師の方が圧倒的り有利である
が状況は時と場合による。現状では空戦は悪手にしかない。

「さすがに360度見るのかなりきついね。まだ魔力弾の威力がそこまででもないから問題ないけど、これ以上威力を上げられるとかなりきつくなる。レイジングハートいったん下りるよ。相手の位置がわからない状況で空にいたらただの的にしかない」そう言っ
て森の中に入って行くのは。そこにはトラップがあるとも知らずに

- - - - -

ジン視点

「こちらの準備は上々。後はあちらが下りてくるのを待つだけ。状況判断は早そうだからもうすぐ降りてくると思うけど・・・来た
!」なのはが下りてくるのを確認しトラップを発動させる。

「第一陣行け!!」そう言っ
て魔力弾をなのはに向かって撃つ。もうチェックはかけている。

なのは視点

「マスターこちらに接近する魔力反応数5、来ます」

「まかしてこれくらいなら・・ウツ」なのはが杖を構えようとした時バインドが発生する。ジンが仕掛けておいたトラップその1。あらかじめ下りてくるところに設置しておいたものである。そのために魔力弾で降りてくる場所を限定したのである。

「マスター!!」

「大丈夫これくらいなら防ぐよ。」バインドされた状態でシールドを張ろうとするが

「あまいな」そのバインドは特製なんですよ。・・爆ぜろ!!」ジンの声が聞こえると自分の手足を縛っていたバインドが爆発する。

「キヤー!!」非殺傷設定であるため物理的なダメージはないが衝撃として魔力ダメージが残る。さらに魔力弾が直撃する。

「まずは一発」

「痛たた。でも大ダメージってほどじゃないね。バインドも解けたし。今度はこっちの番!!アクセル」なのはが展開した魔力弾が陣に向かって襲いかかるがジンは木などを利用してうまく防ぐ。

「全く環境破壊はいけませんよ。砲撃魔さん。自慢の砲撃もここじや役立たずですけどね」

「うゝそんなことないもん！それなら見せてあげる！ディバイン……」なのはが魔力チャージに入る

「そんなための長いやつが一对一で当たるとは思わないで……！？」ジンの体がバインドで捕縛される

「さっきのお返しなの。姿を現したのが命取りだったね。行くよ・バスター……」なのはからレーザービームが放たれる森を破壊しないように細く制御されているが威力は十分である。バインド状態のジンはその砲撃に飲み込まれた……瞬間に消えた

「！？幻術。本物はどこ！？」辺りを見渡すが……すぐに見つかった。なんと幻術の後方、ディバインバスターの射線上にいた。なのはは驚いて意識をそこに向けたが次の瞬間後ろからピンク色の砲撃が襲ってきた。

「（これ、デバインバスター？）」「薄れゆく意識の中で最後の思った事が自分の技が後ろから来た事に対する疑問だった。

はやて、フェイト視点

「えええええ！！！なのはちゃん負けてもったやん。それに最後のあれ……」

「うん、陣が何かしたようだったけど……わからない。それにバインドが爆発したのも気になるし。」

「とりあえず二人の所に行ってみようか。なのはちゃんも心配やし」

「そうだね」二人はバリアジャケットを展開し急いで二人のもとに向かった

- - - - -

ジン視点

「とりあえず異常はないな」なのはの様態を確認し問題がないので一安心する。

「ジン、なのは！！」空からフェイトとはやてが下りてくる。リインははやての肩に乗っている。先程まで寝てたが試合が始まった頃に起き出し観戦していたようだ。

「高町さんなら問題ありませんよ。魔力ダメージで気絶しているだけです。先程ヒーリングもかけておきましたからもうすぐ起きるでしょう」

「そう、良かった。」フェイトが胸に手を当て一息つく。

「なのはちゃんも無事のようにしょかったわ。それにしてもお宅すごいな、エースオブエース相手に無傷で勝つなんてな」はやてがニコニコ笑いながら言う

「ジンさんすごいです。なのはさんに勝ってしまうなんて。」リンも元気に飛び回りながら賞賛してくれる。苦笑しながらラインと話してるとなのはが目を覚ましたようだ

「う、うつ。此処は？私・・・」

「なのは、此処は訓練所の休憩所だよ。なのはが撃墜されてからジンが運んで治療してくれたんだ。」フェイトが状況を説明する。

「そおつか、私負けちゃったんだね。最後はどうやって倒されたかわからないけれど・・・」

「あ、それ私も気になったんだ。ジン何をやったの？」フェイトが

聞いてくる。

「特別な事はしてません。ただ、高町さんの撃った砲撃を送り返しただけです。さすがにノーガードで自分の砲撃が当たれば意識も失うでしょう。」

「え？でもどうやって？ジン君がシルエットの後ろにいたのは見えたよ。」なのはが思いだしながら答える

「そもそもなぜオレがわざわざ射線上にいたと思いますか？」

「……わからない。」

「まあわからないのが当然なんですけどね。シルエットを使っているのに射線上にいる意味はありませんし。理由はオレの魔法ですね。」

「砲撃を送り返したというやつか？」

「はい。まあ転移魔法と大して変わらないんですけどね。ちょっと工夫した転移魔法で砲撃を送り返しただけです。まあ言うのは簡単ですが条件がありまして……」

「条件って何？」フェイトが疑問に思った事を言う

「秘密です……嘘です。だから八神さん杖をこちらに向けないください。」

「自分ふざける時は選ばんと大変な事になるで〜」ニコニコ笑っているが収束しだした魔法を見ると冗談では済まないので此处は折れる

「一つは相手の魔法を受けれる位置にいる事。だから射線上にいる必要があった。二つ目は一つ目とかぶるんですけど設置した転移魔法陣の中に魔法を入れる事」

「どっいつ事？」

「いくらなんでも瞬時展開して砲撃を送り返すなんて芸当はできません。だからあらかじめ設置してそこに魔法を入れるしかないのです。これが意外に難しい」

「でも、そんなんじゃないどころがないんじゃない……」フェイトがそう言うが

「実際使って見せたじゃないですか。見事命中です」

「確かにそうだけど・・・」納得がいかないフェイト

「まあ単品では意味がないのは確かです。そのためのシルエットなわけですし。高町さん何かおかしいと思いませんでしたか？」

「・・・そう言えば、シルエットなのにしゃべってた。それにバインドで縛ったのに消えなかったし」

「そう言う事です。シルエットは衝撃に弱いのが通例ですし声が出せないのが難点なんですけど・・・そもそも声ってどう出していると思いますか？」

「声に出すんじゃないの？」

「高町さん・・・」憐れんだ視線を向ける

「な、なんなの！？その目は！！」

「ちゃんと学校に行かないとバカになりますよ。いくらエースだか

らといって魔法だけでできればいいというわけだはないんですから。書類仕事とかあるでしょう？二等空尉殿」いっそ侮辱に近い目でのほを見る

「大丈夫だもん。わからないところがあつたらレイジングハートが教えてくれるもん」手を振り怒っているかのようにアピールをするのは

「ほほう。つまりそれは学校のテストでもカンニングをしていると言つ事になんですかね？いけませんよカンニングは。貴方達の世界では良いのかもしれませんが、こちらではかなりの問題になりますね。どう思いますか執務官殿」

「なのは……」フェイトが信じられないというような顔をする

「ち、違うよフェイトちゃん。カンニングなんてしたことないよ！テストは自分の力で受けるもん！！」

「で結果は？」

「うっ、文系は苦手だけど、理系なら大丈夫だもん！」

「でも、今音の仕組みわかっていませんでしたよね？記憶違いでなければ物理の範囲だと思うですが・・ああ、そちらでは物理がないと言う事ですかね？どうなんですか、八神さん。」

「いやいや普通にあるよ。結構前にやったことやし。なのはちゃんケガを治している間に進んだところの範囲や。聖小は進む範囲早いから小学校の時で音はやってるんや。それになのはちゃん治った後も魔法にどっぷり浸かってたからな。成績が急降下してるって桃子さんが嘆いてたわ。うちの子の将来が心配だって・・」

「はやてちゃん！！それは言わなくて良いの！！」なのはが顔を真っ赤にして言う

「まあ高町さんの頭が残念だという事実は「残念じゃないの！！」ちよつと忘れているだけ！！」放っておいて、本題に戻ります「また無視された！？」ちよつと静かにしてもらえますか？話が進みません。できないなら計算ドリルでもやっててください。レイジングハートさんお願いします。」

「了解しました。マスターこれを・・・」なぜか乗ってくれたデバイス

「レ、レイジングハートまで・・・」がつくり両膝をついて落ち込むのは

「それで、音とは要するに振動して伝わる音波みたいなものです。だから、シルエットにオレの声を振動させてしゃべらせました。」

「そんなことできるの？」フェイトが聞く

「できてる事実があるのでできるとかしこ言いようがありませんが、現状オレしかできるのを見たことないです。前にメガ・ヌさん、あオレの後方魔法の師匠さんなんですけど、その人もできないって言うてました。オレがふざけてシルエットでお子さんルーテシアっていうんですけど、話してた時に行ってました。魔力で振動に干渉して話すなんてどんだけの魔力制御よって。意外に難しいらしいです。オレ的にはおふざけ魔法の一つではあるんですけどね。いたずらに使うとかなり便利ですし実際戦闘でも使えました。」

「それで、一体どういう意味があったの？」なのはが話に入ってくる

「なんですか、計算ドリルは終わってからにしてください」「終わったよ」意外と速いですね。それにまさか本当にやっているとは思いませんでした。マルチタスクまで使って・・・能力の無駄遣いです

ね。・・・でええっと、意味でしたっけ、それは高町さんを挑発する以外に意味はありません。」

「ジン君!!」

「ふざけているわけではありませんよ。実際貴方は挑発に乗って砲撃をしようとしてましたし、こちらとしても砲撃が来るとわかったので準備しておきました。」

「でも、いくらなのはちゃんでも挑発されたくらいで・・・」はやてが言うが

「確かに普段なら冷静に対処できたんでしょうが、試合前からかなり煽ってましたし開始早々にこちらが姿を消して隠れながら攻撃してましたしかなり焦れてましたからね。そこにバインドでの攻撃と魔力弾の攻撃を受けてさらに挑発、やった本人がようやく現れると言った状況ならああいった行動になるは当然です。こちらとしてはそれが狙いですが」

「そう言えば何でバインドが爆発したの？」なのはが聞いてくる

「オレの能力です。オレは魔力を爆弾に変えることができます。言

いづらい事ですが闇の書の蒐集にあつてから発現したもので以前のオレにはなかったものです。」

「・・・すまん」はやてがバツが悪そうに言う

「いえ、現状では便利な能力ですしラッキーといえはラッキーなので」

「でも、後天的に能力が付与することなんてあるの？」フェイトが疑問を投げかける

「わかりません。原因はよくわかってないのです。ただ闇の書の後にできるようになったとしか・・・それに、魔力も上がっています。こちらも原因は不明です。どちらにしてもこちらにとっては良い事なので気にしないでください」

「わかった。」ジンが説明しているとはやてがつらそうな顔をしたのでジンがフォローを入れる。

「後は砲撃をこちらに向けて撃たせて送り返すだけです。挑発の結果高町さんは攻撃範囲を狭くして森に被害が出ないようにしてくれましたし、オレもそうするように挑発しました。此処まで準備が整えば後は簡単です。あ、ちなみにシルエツトが消えなかった理由はオレの努力のたまものですので別にレアスキルというわけではあり

ません。ただ緻密な魔力制御が必要なだけです。」

「でもなのはがジンが準備してないところに降りたらどうする気だったの？」フェイトが至極当然の質問を投げかける

「それもありえませんか。高町さんが偶然降りて来たのではなくちやんと目的地に下ろしたんですから。」

「私はちゃんと判断して下りたよ」なのはが反論するが

「確かにあの判断は正しかったと思います。的になるだけでしたから。でも本当に降りる必要があったんですか？貴方は数々の現場を戦っているはずです。もちろん今回のような状況で戦うことも初めてではないはずです。その時は地面に降りましたか？」

「ううん。だって下からの攻撃だけ気にしておけば空戦の方が有利だし・・・あ！」

「気づきましたか？そうです。そもそも地上と空では圧倒的に空の方が有利なんです。下から来る攻撃に注意を払っていけばいいわけですし、何より空にはさえぎる物が何もない。回避や防御するのはそこまじ難しいわけではありません。程度によりますけど」

「でも、ジン君の時はいろんなところから攻撃が来たよ。レイジン
グハートも気づかないうちに」

「そう言う事です。普通空戦魔導師が陸戦魔導師と戦う場合上空や
左右を気にする必要はない。しかし、オレは後方魔法が得意なん
ですよ」

「魔力弾を転移させたってこと？」フェイトが答える。

ジンはさすがは執務官と賞賛しながら説明を始めるのだった

第13話

帰宅した後（前書き）

少し長くなってしまいましたがご了承ください

第13話

帰宅した後

「さすがは執務官殿。正解です。オレの転移魔法は少し特殊で召喚魔法と組み合わせています。以前までは転移先に魔法陣が出てバレバレだったんですが、幻術で誤認させられるようになってからはオレの十八番です。実際効果はあったでしょう？」なのはに聞いてみる

「うん。防ぎづらかった。でも、威力はそこまででもなかったよ。ずっとシールドを張ってれば問題なかったし」

「それは当然です。大して威力は込めてませんから。重要なのはいつ来るかわからないという点です。精神的に焦っている相手にあれはかなりの攻撃になるはずですよ。ここにいたら的になるという考えが出てしまうほど」

「うっ、その通りです・・・」

「あとは降りる場所をこちらで操作しながら網にかかるのを待つだけです。普段の冷静な貴方なら気づいたかもしれませんが冷静さを失った状態では簡単にかかってくれました。そして後は詰めるだけですね。」

「うっう。」

「貴方は戦技教導官なのでしょうが、こちらは戦闘屋です。力を策略をもって制す、それが地上部隊の戦い方です。趣味が砲撃、特技が殲滅の砲撃魔さんは派手な戦いで勝利を収めますが、こちらは勝てる手立てはなんだって打ちます。もちろん法律な範囲ですけど。地上部隊に負けは許されないのです。負ければ被害が出るのはこちらを信じてくれている市民です。頑張ったけど負けましたでは話になりません。」

「私はそんな趣味も特技もないの！！それに砲撃ならはやてちゃんの方がすごいもん！！広域殲滅型なんだよ！」

「まさか友達を売るなんて・・・最低ですね」

「なのはちゃん・・・うち悲しいわ」

「それに、広域型にさりげなく殲滅を付け加えてますし酷い人です。友達は大切にしないといけませんよ」

「は、はやてちゃん、べ、別にそんなつもりじゃー・・・」慌てて否定するのは

「ああ、それと先程の約束は保留という形でお願いします。先程の

話を聞く限りあまりやれる事がなさそうなのでお願いできる事があつたらその時にお願いする事にします。」

「わ、私バカじゃないもん！！それに急に話を変えないで！！」

「さっきのだって冗談じゃないですか。友達の仕事わからないんですか？八神さん笑ってましたよ、泣き真似しながら」

「それを言っちゃアカンよ。もう少しじっくりたかったわ」

「もうゝはやてちゃんまで！こうなったらジン君に再戦するの！そして今度こそ名前でもらうんだから」

「どこら辺がこうなったらなんですか？そんな試行してるから砲撃魔なんて呼ばれるんですよ。嫌な事があつたらすぐ砲撃、昨今の若者はキレやすいから困ります。」

「そんなことしないよ！ただ、練習の成果を試すだけ！」

「まさか、人を実験台にするなんて・・・なんて恐ろしい。模擬戦の度に命を賭けろと言っんですねなかなか鬼畜ですね。」

「ち、違うもん！」なのはは否定したいようだが言葉が見つからない。

「良いでしょう。ならこちらにも条件があります。」

「何？」ジンからの提案が出されてホツとするなのは

「こちらが出すテストに合格できたらやりましょう。さっきの残念さではルーにも勝てないでしょう。いやこれはルーに失礼かな比べるまでもない」

「ルーって？」フェイトが聞いてくる

「さっき話してたルーテシアです。メガ・又さんに頼まれてオレが勉強を教えるんです。ちなみに訓練校に行くまではギンガも教えてましたし、スバルにも教えています。ルーはメガ・又さん譲りでかなり賢いので高町さん程度なら完勝ですね。一般学ならおそらくどのジャンルでも勝つでしょう。」

「でも、ルーテシアって昨日の火災に巻き込まれた子でしょ？ジンが助けた時にいた。かなり小さい子だったような」フェイトが思いだしてかのように話す

「今年で六歳になります。魔法学ではなく一般的知識ならギンガよりも上です。最近はデバイスにも興味を持ちだしたので教えてますし、建築系は独学でやっています。そちらは専門外なので・・・」

「へえーエリオやキャラ口と同じ年ですごいね。」

「誰ですか？」

「私が保護してる子達。まだ二人は会ったことないんだけど二人とも言い子なんだ。その内二人とも会わせたいと思ってる。」嬉しそうに話すフェイト

「その年で子持ちですか。たしかオレよりも一つ上だから15歳ですよね？ってことは9歳で出産ですか。お相手が高町さんと八神さんですか。家庭が複雑だから会わせられないんですねわかります。どちらをお母さんと呼ぶのでしょうか？医学的にも神秘ですね。女性同士とは・・・なかなか非生産的ですね、いやこの場合生産してるから問題ないのか？」

「へ！？ち、違うよ！！なのはとはやてとはそんなじゃないもん。私が預かっている子ども！」

顔を真っ赤にしてフェイトが言う

「わかってますよそんなの。9歳で子供が産めるわけじゃないじゃないですか。慌てる方が逆にあやしいですよ。」

「ジン！変なこと言わないで。私はそのルーテシアって子に二人を会わせたいと思っただけ。」

「冗談ですから本気にしないでください。それとその事についてはオレの一存では決められないので今度聞いときます。」

「それじゃーこれ私の連絡先」フェイトがデバイスに連絡先を送ってくる

「ああ、それなら私も！」なのはが自分もと言って話に入ってくる

「えええ」嫌そうな感じで言う

「もー女の子が連絡先を教えてるんだよ！もっと嬉しそうにして！」

「いやゝ日課が砲撃の人に連絡先を教えて砲撃された嫌ですし。まだ若いので死にたくないから拒否していいですか？」

「そんな日課はないの！！」

「というよりあれやなゝこないな美人さん達の連絡先を苦もなくゲツトするなんてジン君もなかなかやるなゝ」はやてがニヤニヤしながら言う

「ああ、それは盲点でした。オークションにかけたらいくらぐらいで売れますかね？エースと若き執務官の連絡先。そう言う事なら八神さんのも頂けるとよりよいですけど・・・」

「こらこら、何しようと思ってるん自分。それはアカンやろ」

「冗談に決まってるじゃないですか。ただ今は情報社会ですからうつかりオークションに流れてしまいかもしれませんという事です。安心して連絡先を教えてください」

「完全に確信犯やないか！そないなやつに教えられるかい！」

「あそれなら結構です。貴方は何かとめんどくさそうなので・・・」

「ジンさん、リインはどうですか？」

「リインさんは大歓迎です。これがこちらの連絡先です。ただご家族の人には秘密にしてくださいね。こちらの知らない人から来た場合変な所につながるようにしてありますんで・・・」

「はいです。こちらがリインのです」そういつてこちらに送ってくる

「ちょっと待ち！ご家族がいる状況でその話はアカンやろ。私と連絡とる気ないやろ」

「それが何か問題でも？」

「いや、問題はないんやけど・・・」

「それなら大丈夫ですね」

「大丈夫やない！それにお宅レアスキルの申請教会に出してへんやろ？レアスキルは教会に登録しないと認められんのよ。私の知り合

いに教会の人がいるから仲介してあげるわ。だから連絡先教え！」

「ええ教会ですか？あんまり好きじゃないんですけどよねーあそこ。それにわざわざ申請なんてしなくてもかましません。特に何かがあるわけではありませんので」

「でもレアスキルもちは昇格が早いんよ」

「現状で十分です。下手に偉くなる方が面倒ですし。ゲンヤさんを見てるとそう思います。別段お金に困ってるわけでもないですし。」

「なんて欲のない。まあ良くだらけの人よりはましやけど・・・」

「あなたみたいなの？」

「自分なかなか毒舌やな」

「それほどでも」

「まあええわ。とりあえず連絡先を教えなさい」

「・・・しょうがないですね。これです。あまり連絡してこないでください。それとご家族から連絡があった場合は連絡先を変えますのでくれぐれも気をつけてください。いちいち連絡先を変えるのは面倒なので・・・」

「わかったわ。」

「そつちの話は終わった？それじゃージン。よろしくね。きっと良い友達になれると思うから。」フェイトが話を戻す

「わかりました。ルーも友達が欲しいでしょうから大丈夫だとは思いますが。了解がとれたらこちらから連絡しますんで」

「わかった。」

「ジン君私もいっぱい勉強してリベンジするんだからね！！」なのはが決意を宣言する

「まあ頑張ってください。ちなみに問題は魔法学ではないので一般的な勉強を頑張ってください。ミッドの歴史は大変でしょうから地球の方で良いですよ。オレも興味があるのでそちらの勉強に会わせます。後でそちらの使っているテキストのコピーを送ってください。そちらから問題を出しますので・・・レイジングハートさん申し訳あ

りませんがミッド語に翻訳してもらえますか？」

「了解しました。翻訳してお送りします」

「ジン君なんでレイジングハートにはそんなに丁寧なの!!」

「何を言ってるんですか。高町さんにだって丁寧語で話しているでしょ。ちよつと扱いが雑なだけです。小さい事を気にすると大きな大人になれませんよ。年上としての威厳をもって軽口くらい華麗に対処しなくては・・・」

「そんなこと簡単だもん。私は立派な大人だから何を言われても平気だもん」腕を振りながら言うが

「その動作はどう見ても大人ではありませんね。というかその程度で完成系ですか？随分と子供っぽい大人なんですネ。自分はそうならないように頑張ります。・・・!？まさか、自らダメな大人としての見本を見せようとしてくれるんですか？それならお礼を言わないといけませんね。ありがとうございます、わざわざダメなふりまでしていただいて・・・」

「うえくん、フェイトちゃん!!」もう何も言い返せずに泣きつくこの光景を一日だけで結構見た気がする。

「ジンあまりなのはをいじめないであげて」注意しているが若干うれしそうである

「顔がにやけてますよ。実際泣きつかれてうれしいんですね」

「違うよ！……ただちょっとかわいいなと思っただけ」

「……本当にお二人とも結婚してないですよ？なんか信じられなくなってきたんですけど……同性愛は別にかまいませんが公にやるのはちょっと……局員の男性の方々が報われませんね。」

その後なのはをからかい少しお話してからジンは自宅に帰った。といっても昨日帰宅してない事がギンガやスバルにバレ心配してると言う事なのでとりあえずナカジマ家に行くことにした。ちなみにアルピーノ家もいるようだ。

「お邪魔します。昨日は連絡せずにすみません。したかったのですが悪魔に襲われまして……」

「ジン兄」「ジンさん」「お兄ちゃん」

三人がこちらを見ると一斉に飛び出す。

「おお、元気そうだな。スバルが転んだ以外はケガはなさそうだし当然と言えば当然か。昨日は大変だったな、大丈夫か？」

「ジン兄こそどこ行つてたの！？心配したんだよ、私たちに顔を見せた後すぐにどこか行っちゃうし、そのあとも帰ってこないし」

「そうです。せめて連絡くらいしてください！！」スバルとギンガに怒られるとは思わなかった。

「いやゝごめん。仕事が終わったと思って帰ろうとしたら魔王に捕まってしまった、それでようやく帰って来たんだよ」

「「魔、魔王！！？」」スバルとギンガの声が重なる

「そうだ、管理局の白い魔王いや、今は悪魔か。・・・でその人に捕まった。知らないか？魔王からは逃げられない！！」

「そ、そんなすごい人が管理局に入るんだね・・・」スバルが若干引きながら言う

「ジ、ジンさんそれって・・・」ギンガが本当の事を言おうとするが

「ギンガみなまで言うな。オレにはわかってるぞ、お前も一応管理局員だ。噂くらいなら聞いた事があるだろう。怖かったんだなよしよし」言いきる前にギンガの頭を撫でて止める

「／／／」若干でれているギンガをよそにスバルに話しかける

「スバルはなんかいい事でもあったのか？」

「ん、なんで？」スバルが首をかしげる

「なんか顔つきが変わったぞ。いつもの元気いっぱいなおバ力さんから、少しキリっとした感じだ。」

「わ、私はバカじゃないもん。ちょっと勉強嫌いなだけ。・・・でもそんな私はもう終わり。ジン兄、私魔導師になる！！」やる気に満ちたスバルが宣言する

「・・・どうして？」一瞬驚きはしたもののスバルの真剣な表情を見て適当な事を言っているのではないと悟る

「昨日の火災で私思ってたんだ、強くなりたい！！って。昨日の火の中で誰もいない時すごく怖かった・・・でもそれ以上にすごく情けなかった。泣いているだけで何もできない自分が」

「お前ぐらいの歳だったらそれが普通だ。子供はできる事の方が少ない」

「うん、確かにそうだけど・・・私は見たんだ。自分が泣いて困っている時に助けてくれた人を。とつてもきれいで強い人だった。私はあこがれたんだその人に。だから、情けない自分でもその人のようになりたいって思ったんだ。」

「（強いと言うのは否定しなけど・・・憧れるとあんなになつてしまうのか？スバルが砲撃魔・・・嫌過ぎる！！）でも痛いのかは嫌なんだろう？良いのか？魔導師になればそう言う目にたくさんあうぞ」

「うんわかってる。でも私みたいに怖くて泣いているような・・・助けてって言ってるような人を助けられるようになりたいから！！」
スバルの決意は固い。それは昔の自分を見ているようだ。

「ハアゝ・・・やっぱクイントさんの娘だな。一度決めたら引かないところがそっくりだ。・・・ゲンヤさん達には話したんだよね？」

「うん。お父さんなんかは最初は反対したけどお母さんが色々言ってくれて最後にはやりたいようにしなさいって。」

「ならオレからは何もないな。頑張れよスバル」頭を撫でながら言う

「反対しないの？」

「なんで？」

「なんかジン兄なら反対すると思った。危ない事するなって」

「ギンガの時だって止めなかっただろ？そりゃーお前が適当に言っただったら反対もするが、違うだろ？」

「うん」

「なら何も言わないさ。お前の人生だ、他人が口出ししても仕方がない。」

「ジン兄ありがとう！！あとね、ジン兄も私の目標なんだよ」

「感謝されることじゃないが・・・オレが目標？」

「うん。ジン兄すごかった。あの火災の中たくさんの人たちを助けてたし。なのはさんとも知り合いみたいだし」

「おまえ後ろの部分が本音だろ」

「ち、違うよ。ジン兄を目標にしてるのはホント！！私もいつかジン兄やなのはさんみたいにたくさんの人を助けられるようになるんだ」

「・・・スバル目を覚ませ。あの人は人助けはしてないぞ・・・いやお前を助けて入るけど。あの人は二次災害を起こす可能性のある砲撃魔なんだ。目を覚ませ！もしくは眼科に言って見てもらって来い」

「ジン兄何でそんなこと言うの！！なのはさんは強くてカッコいい人なんだよ。」

「それは幻覚だ。強いのは否定しないがあれはただの砲撃魔だ（今の内にスバルに砲撃志向の考えをなくしておかないと大変な事になる）」

「違うもん！！なのはさんはすっごい人なの！！ジン兄もいつかわかるよ」笑顔で言うスバル。ダメだもう手遅れらしい・・・

「なら一つだけ言うておくれ。・・・・・・砲撃魔だけにはなるなよ」

「え！？」

「いいか？それだけ心に刻んどけ」

「??よくわからないけどわかった。」

「ちょっと不安だがわかってくれたなら良い。……スバルは訓練校に行くのか？」

「うん！だから今から頑張るの。訓練校に入るまであと半年くらいしかないから」

「そおか、頑張れよ。シューティングアーツならクイントさんやギンガが教えてくれるし勉強ならオレが教えてやる」

「うん！」そう言って元気に部屋に戻って行った

「本当に良かったんですか？」ギンガが話しかけてくる

「ん？ああ、あいつが自分で決めたんだ、それなら応援するしかないだろ？」

「そうですね・・・心配です」

「それはそうだろうけど、反対したって聞かないだろ。それに心配なら訓練を見てあげれば良いじゃんか、お姉ちゃん」

「そ、そうですね。訓練校に入るまで私と母さんで一生懸命教えます！」「頑張りますと言わんばかりの顔だが

「といってもお前の休日もあと少しだからクイントさん任せになるけどな」

「あ、そうですね！・・・それなら今からでも・・・スバル！練習しよう」そう言ってスバルのもとに向かう

「ほどほどにしとけよ・・・って聞こえてないか」ギンガはこちら声が聞こえないくらいのスピードで走り去って行った

「・・・おおそうだ。ルーを探さなきゃ」フェイトと約束を果たすためにルーを探しに行った。

（最初はスバルと一緒にいるのかと思っただけで先程までオレとスバルが話していたからそれはないし、オレがオレがこの家に来た時には飛びついて来たからいるはずなんだけど・・・いた！）考えながら話していると外の日向でメガ・ヌさんに抱かれて眠るルーがいたりあえずルーの所へ向かう

「メガ・ヌさん。ルーはお休み中ですか？」メガ・ヌの正面から歩いて行って話しかける

「そうね。どつかの誰かさんが朝帰りなんてするもんだから、うちの子が心配で起きてるなんて言うからね。」少しニヤニヤしながら言う

「その言い方だとオレが悪いみたいじゃないですか。むしろオレも被害者です。いきなり連れ去られたんですから」

「冗談よ。でもルーが心配してたのはホント。ジン君を見て飛びついた後は安心して寝むちゃったみたいだから」優しくそうにルーを見ながら言うメガ・ヌ

「ルーにも心配かけちゃったか。さっきスバル達にも怒鳴られまし

たよ」ルーの頭を撫でながら言うジン

「あの子達も心配してたからね。ダメよ女の子に心配かけちゃ」

「かけるつもりもなかったんですけど・・・すみません。」

「私じゃなくルーに言ってあげて。・・・ジン君ルーを少しお願いできるかしら？」不意にルーの世話を頼まれる

「良いですけど仕事ですか？」ルーを受け取りながら聞く

「違うわ。今日は貴方と同じでオフよ。その代わりナカジマ家が事後処理を頑張っているけど。・・・そろそろルーが起きそうだからホットミルクでも作ってこようかなと思ってね。ジン君はコーヒーで良い？」

「ありがとうございます。オレもあまり寝てないんで助かります。」

「フフ、じゃーちょっと言ってくるからルーをお願いねっ」そう

言いながらキッチンに向かって行った。

しばらくしてルーが起きた

「・・・？」起きた時にオレがだっこしてる事が不思議なのだろう、首をかしげている

「起きたか？ごめんなルー心配かけたみたいで。メガ・又さんから聞いたけど起きててくれたんだってな。」

「お兄ちゃん？」まだ寝ぼけているらしい

「ああそつだ。眠いならまだ寝てて良いぞ」

「うん、起きる。」目をこすりながらオレの胸元で態勢を変えてこちらを見る

「無理しなくてもいいのに。あとちょっとすればメガ・又さんがホットミルク持ってきてくれるから」

「うん」それからメガ・又がくるまでルーとボーっとしていた。

少し経つとお盆に飲み物と少しのお菓子をのせてメガ・ヌさんが戻って来た

「お待たせ．．．ルーも起きたのね。はい、ホットミルク。ジン君はコーヒー、少しお菓子も頂いてきたわ、後でクイントに言っておかないとね」ニコニコしながらお菓子とコーヒーを渡してくるメガ・ヌ。ルーテシアはおいしそうにチョコレートとミルクを食べている。

「ルーオレのも食べて良いぞ、甘いもんはあんまり好きじゃないんだ。」

「ありがとう。」そういつてオレからチョコレートをもらって食べるルー．．．なんか小動物のようだ

「．．．それでジン君は何か用があるの??」メガ・ヌがいきなり話を振ってくる

「．．．唐突ですね、まあ話があるのはあるんですけど．．．．．ル

「に」

「私？」ルーが首をかしげる

「そ、話というより相談なんだけど、ルーは友達欲しくないか？」

「スバルちゃんやGINGAさんがいるよ」

「まあそうなんだけど、スバルの話は聞いたか？」

「うん。訓練校に行くって」

「そうだから会えなくなるし、GINGAも休暇がそろそろ終わりだろ？だからルーがさびしくなるんじゃないかと思って・・・」

「うん」

「それで今日知り合いの人と話してたらルーと同年の子がいるから会わせてみないか？って話になったんだけど、どうするルー？会ってみるか？」

「……わかんない」

「まあそうだな、いきなり知らない子と会って友達になるのは大変だからな。しかも、あちらの二人は離れて生活してるしお互いに顔を合わせてないっていうし」

「どういう事？」メガ・ヌが聞いてくる

「何か二人とも保護児童らしいんですけど、少し特殊らしくて……。オレも良くは知らないんですけど、だから二人で別々に暮らしてるらしいんです。で、ルーのこと話してたらどうせなら会わせようと言う事になりました、ルーも同い年ですから友達になれるかなーと思うたわけですよ」

「そう。その保護責任者の方は？」

「ああ、フェイト・T・ハラOWN執務官です。最近人気の若手の執務官さん」

「ああ、彼女ね。話は良く聞くわ。そうになるとあちらも忙しくてなかなか会えないんじゃないかしら？」

「そこはうまく家族とうまく連携を取っているようです。うちと同じですね」

「ルーちゃん会ってみない？きつとお友達になれると思うわ」オレの話を聞いてメガ・ヌさんがルーに話しかける

「でも、知らない子だよ？」

「最初はみんなそうよ、でも話しているうちに自然と友達になっていくものよ。ルーだって友達はいっぱいた方が良いでしょう」

「うん、うん」

「それに会う時はジン君が付いて行ってくれるから大丈夫よ」

「オレですか？」

「そうよ。私はその執務官さんと面識ないわけだしいきなり行っても悪いでしょう？だからジン君がお兄さんとしてちゃんとルーを連れて行ってちょうだい」

「まあもともとそのつもりでしたけど……ルーオレと一緒に行くか？」

「……お兄ちゃんが一緒なら行く」

「あらあら」娘を微笑ましそつに見る母

「それじゃー少し連絡してみますね」そう言ってフェイトに貰った連絡先にアクセスする。少し経ってから画面上にフェイトが出てきた。後ろにははやてやなのはもいる。まだ一緒にいるようだ。

「今平気ですか？」確認をとる

「うん、大丈夫。それで？」

「えーっとさっき話してた事なんですけどルーに了解がとれたので連絡をと思いまして」

「ホ、ホント！？私もさっきエリオとキャラ口に連絡したら会ってみたいって言うてくれたんだよ。」

「そうですか。一応ルーを紹介しておきますね。それにルーのお母さんも」画面を少しでかくして二人を入れる

「こんにちわ。私はメガ・ヌアルピーノ。こちらが娘のルーテシア、よろしくね」ニコニコ笑いながらフェイトに話しかける。若干フェイトは焦っている

「は、はいこちらこそよろしく願いします。フエイト・Ｔ・ハラ
オウンです。」

「知ってるわ、有名だもの。優秀な執務官さん♪♪」

「／／恐縮です。こちらジンから聞いています。なんでもジンの
魔法のお師匠さんだと・・・すごいです」

「今はもう教えてないし、ジン君は優秀だったからね。私は特に何
もしないわ」

「あのー二人で話すのは良いですけど、本題に入りませんか？」

「あらごめんなさいね。少し話してみたくて」

「それはまた後日にでもゆっくりと話してください。それでハラオ
ウンさん、いつ頃なら大丈夫ですか？オレもそちらに合わせて休
みを取りますんで」

「ちょっとまってね今確認するから・・・再来週なら地球はゴールデンウィークで学校もないし私もちょうど仕事が入ってないからそこで良いかな？」

「まあ構わないんですけど・・・会うのは地球ですか？管理外世界に行くのは手間なんですけど・・・」

「あ、それなら大丈夫。転送用のポートもあるし。私がそっちに迎えに行つてその後キャロとエリオを連れて行くよ」

「それでいいなら良いんですけど・・・ルールもいいか？」

「良いよ」

「じゃーそれで」

「うん。正確な日時とか決まったらまた連絡するから」

「わかりました。それでは」

「うんまたね。メガ・又さんとルーテシアもまた今度」そう言つて二人に手を振りながら画面を切る。メガ・又さんも手を振りルーも恥ずかしがりながらも手を振った。

その頃ジンは休暇の申請をする準備をしていた。

第14話 遊園地へ

ゲンヤさんから休暇をもらってから一週間今日がフェイト達との約束の日である。ルーは昨日からそわそわしていてなぜかうちに泊まりに来た。本人的には・明日遅刻するのがまずいから・らしいがやはり不安のようだ

ルーはメガーヌさんが内勤になるまで同年代の友達がおらず、スバル達と出会ってからほとんどスバル達と遊んでいるかオレと勉強していかのどちらかなので同年代の子達と遊んだ経験がほとんどない。フェイトによると向こうもそんな感じらしいから、今日はなかなか大変だろう・・・だけどこれでルーに友達ができれば学校に行った時とか楽になると思うし何よりルーにとって良い事だろう。

「ルーは準備できたか？」

「うん、大丈夫。そろそろ時間だし行こう」

ルーと手をつなぎ家を出る。ミッドの本部前で待ち合わせてそこから転移ポートを使って地球に行くらしい。フェイトの話によるとあちら二人は事前に地球に移動して今はフェイトの家族と一緒にいるようだ。だからフェイトと合流したら直接向かう事になった。

しばらく交通機関を使って移動し今は本部に向かって歩いている。

「ルーは緊張はしてないか？」

「うん。」

「今日はちゃんとおめかししたからかわいいな」

「うん。」

「ルーは男の子だよな」

「うん。」

だめだ。かなり緊張している。家を出る前まではそんなでもなかったのに、本部に近付くにつれてこの有様。さっきから何を聞いても・うん・しか言わない。とりあえずルーを落ち着ける事にする

「ほらルー少し落ち着け。緊張するとは言わんが今からそんな状態だと会った時には倒れちゃうぞ」とりあえずルーの頭に手をのせてこちらを向かせて話す

「え、でも・・・」ルーもちゃんと反応してくれた

「大丈夫だ。今日は遊びに行くだけだろ？スバル達とも行ったことがあるじゃないか？その時と一緒にだ」

「スバルちゃんとギンガさんは友達だから・・・」

「なら今日会う子たちとも友達になれば良い。それにそんなんじや遊んでてもきつと楽しくないぞ。折角遊ぶんなら楽しい方が良くいだらう？」

「う、うん」

「だったらそんなに緊張するな。お前がそんなんだつたら向こうだって話しづらいだろ。それに折角かわいい服来た来たんだから笑顔でいらないとな」

ニコッと笑いながらルーに言うと、まだ少しぎこちないが少しはほぐれたようだ

そんな感じで本部に着くとフェイトがもう着いている。どうやら待

たせてしまったようだ

「すみませんね。遅れてしまって」

「うん。私が早く着いただけだからそれにほら」そう言って時計を見せる。まだ約束の時間まで15分もある

「まだ、時間までは結構あるけど早く着いちゃったから行くのか？」

「そうですね。それと今日はお世話になります。それとこっちがルーテシアです。ルーもあいさつしとこうな。」

「う、うん。ルーテシア・アルピーノです。今日はよろしくお願いします。」そう言って頭を下げる

「うん、よろしくねルーテシア。うちの子達、エリオとキャロっていうんだけど良い子達だから仲良くしてあげてね」

「はい」

少し話した後転移ポートに移動して地球に転移した。

- - - - -

「ほら、此処が地球だよ。」なんかお屋敷みたいなところに着いた。
しかもかなりでかい

「ハラオウンさん、此処は一体どこですか？ずいぶんとでかいお屋敷がありますが、此処が実家ですか？すごいですねーやっぱりハラオウン家くらいになるとこれくらいの家に住むのが普通なんですね。ルーすごいな」

「うん、大きい家」ルーも驚いている

「ち、違うよ。此処は現地の協力者の家で私の友達の家だよ！うち
は普通のマンション」

「なんと！？マンションをすべて買い取るのが普通と言いますか。
ルーやっぱエリートクラスになると庶民とは違う金銭感覚をしているらしい。ルーも頑張れよ、お前なら佐官以上にはなれると思うから「ジ、ジン違うからマンション全部が家じゃないから。一室が私たちの家！」またまたご謙遜を・・・」

「でも、どうせなら自分でつくりたいな。」

「そうか、ルーは建築系も勉強してるんだったな。将来はルーに家を建ててもらう事があるかもしれないな、その時はよろしく頼むよ。」

そんな風に目の前の光景に対して現実逃避をしていると屋敷の中からメイド服を着た人と少し紫色の髪をした女性が現れた。

「すずか！」フェイトはこちらをほったらかしにしてその女性の方へ行く。オレ達としては仲良くしゃべっているのを邪魔するのもあれなので近くにいたメイドさんに話しかけていた

「あのーすみません。」

「はい？・・・あ、フェイトちゃんが話していた方ですね。私はフアリン・K・エアリヒカイト、この月村家でメイドとして仕えさせていただいています。ヤナギバ様とルーテシアちゃんですね。はるばる地球へようこそ」

「（月村？）あ、いえありがとうございます。・・・あのーやはりこの皆さんは知っているんですか・・・魔法を」

「ええ。こうして転送ポートの置き場として場所を提供しています。ほとんどすずかちゃんが協力してますが」

「（すずか？さっきも言っていたけど、あの人の名前か？地球だとどっちが名前だっけ？）そうですか。あのー申し訳ないんですがあの二人止めてきてもらえませんか？このままだと時間が・・・」

「あ、そうですね、かしこまりました。」

ファリンが二人のもとまで止めに行くものだと思い一息つく

「（やっぱりメイドさんはしっかりしているな）」と思っていると

「すずかちゃん、そろそろ話を切り上げてくださーい！！」とその場で叫んだ

「ブッ！！な、なぜ叫ぶんですか？普通呼びに行くでしょ！貴方にした感心を返してください！」

「え？だってそっちの方が早いじゃないですか？」

「い、いえ、まあそうなんですけど・・・おかしくないですか？メイドさんとして。あ、あれですか、ドジっ子さんなんですか、実際ドジっ子は現実では許されないんですよ！」

「わ、私はドジっ子ではありません！少しミスが人より多いだけです」ファリンが顔を赤くしながら否定する

「ドジっ子はみんなそう言っんです。まずは自覚するところから始めてください。まだ間に合う・・・はずですよ」

「なんですか、その間は！！こうなったら私が優秀なメイドさんである事を証明して見せましょう。」

「ほほう、で、どうやって証明するんです？」

「・・・・・・・・・・」黙るファリン。どうやら証明できるものがないらしい

「ハハ、もう仲良くなったんだね。ファリンはそう言うところがすごいよね」さすがにニコニコしながら言うてくる

「すずかちゃん、ファリンはドジっ子さんなんですか、何も取り柄のないドジっ子メイドさんですか（泣）」

「そ、そんなことないよ。ファリンにはいつも助けてもらっているし」

「でもそもそも助けられないメイドさんってメイドさんの意味ないですよ？むしろそれが普通なのでは？本人が優秀と言える根拠は一体……」

「え〜っつと……かわいいところかな？」困った挙句すずかの出した答えはメイドの優秀さとは関係ない事だった。それを聞いてファリンが地面にの字を描いて落ち込んでいる。慌てて慰めに入るすずか、なんか、フェイトとなのはに似ているなと思ったジンであつた。

「もう、そうやってすぐいじめるのは良くないよジン！」

「いえ、別にいじめてるつもりはないんですが、しかも最後にダメ押ししたのはオレではないんですけど・・・エアリヒカイトさんすみません。」とりあえず謝っておく

「うう、だ、大丈夫です。お見苦しいところをお見せしました。それと私はファリンで構いません。」

「年上？の女性を名前では呼ばないようにしてるので、すみません。」

「何でそこが疑問系なんですか！！ファリンは立派な大人の女性です！こう見えてもすずかちゃんよりも年上です！」

「！！・・・すみません」

「謝らないでください！今の間が余計に傷つきます！」そんな感じで驚愕の事実には驚きながらも会話を続けると

「ええっと、すみません。」すずかが話しかけてきた

「私月村すずかって言うんですけど、ジン君だっけ？・・・以前私とどこかで会ったことありません？そのくすぐく小さい頃」

「・・・？わかりません。そもそも地球に来るのは今回が初めてですし、確かに貴方のような女性を見た事があるような気がしますすが、小さい頃というとおかしな話になるので他人の空似でしょう。」

「そ、そうだね。ごめんね勘違いしちゃって」

「いえ、構いません。・・・ハラオウンさん、そろそろ行きますか？」

「そうだね、行こうか。それじゃーすずかまた後でね、アリサにも今日はよろしくって言うておいて」

「うん。じゃあ現地で」そう言って月村邸を後にする。はて？また後では・・・

- - - - -

フェイト家到着

「ここが私の家。さあ入って二人も待っているから。」

「お邪魔しまゝす」「お邪魔します」

ルーと家にながらせてもらつと奥から緑色の髪をした女性が出てきた。

「あ、帰つて来たわね。・・・はじめましてリンディ・ハラオウンです。そこにいるフェイトの母です。ジン君で良かったかしら？今日はフェイト達をよろしくね」

「母さん、ただいま。」

「はじめまして、ジン〃ヤナギバです。こちらこそ今日は娘さんたちに迷惑をかけてしまつかもしれませんので・・・」

「フフフ、フェイトが言っていた通り礼儀正しい子ね。」

「いえそんなことは・・・」

「もう、ジンも母さんもそんなところで話してないでリビングに行く。エリオとキャロが待ってるよ。」

「そうね」

「そうですね、ルーちゃんと自己紹介するんだぞ」

「う、うん。大丈夫・・・」緊張するルーにリンディが優しく声をかける

「ルーテシアさん、大丈夫。二人とも言い子だから仲良くなれると思うわ。それにそんなに緊張してちゃ折角のかわいい顔が台無しよ」ウインクしながら言うリンディにルーは少し緊張が解けたようだ。一方ジンはさすがにウインクは・・・自分の母親と同年代の人のウインクを見て若干ひきつる。まあ見た目は若いから良いんだろうけど・・・なんとも言えない感じが

「・・・何か？」顔は笑顔なのになぜか寒気を感じる

「いえ、なんでもありません。さすがは母親だな～と思っていたところですよ。ハハハ」背中に嫌な汗が流れたが、あの笑顔はクイントさんの時と同じなのでここで墓穴を掘るような事は言わない。

「それなら良いのだけど、何か嫌な感じがしたから」

「・・・ハハハ」もう笑うしかない

「ほら早く」先にリビングに向かったフェイトからの呼びがかかる。あゝグットタイミング

「じゃー行くぞルー。笑顔でな」

「うん」リビングに入って行った

- - - - -

リビングに入ると

少し赤みの混じった髪の子と桃色の髪の子がいた。何か二人ともぎこちなく座っている

「ジン、ルーテシア、紹介するね。こっちの男の子がエリオで、こっちの女の子がキャロ。さ、二人とも挨拶して」フェイトが二人を紹介する

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエです」

「オレはジン」ヤナギバだ。こっちはルーテシア。ほらルー挨拶して。」

「うん。ルーテシア・アルピーノです。」少し声は小さいがちゃんと言えた。

「それじゃー少し話してみな。お互いの事を知らないと思いつきり遊べないだろ」

「うん」そう言われてエリオ達のもとに向かうルー。フェイトも二人をソファアの方へ移動させこちらに来る。子供たちだけにするようだ。

「とりあえず、問題が無さそうでしたです」

「そうだね、エリオもキャロも昨日会ったばかりだからまだぎこちないんだけど、話していけば大丈夫そうだし、ルーテシアも二人と仲良くなれると思う。」

「そうですね。．．．それでこの後はどうするんですか？もうそろそろ向かいますか？」

「うーん、まだお昼食べてないでしょう？とりあえずお昼を食べてからにしようか」

「だったらもう行きませんか？遊園地ならお昼にできそうなものはあるでしょうし、アトラクションは混みますから早めに言って並んでおかないと．．．」

「あ、それは大丈夫なんだ、今日は貸し切りにしてもらっているから。」

「えー？．．．貸切ってどんだけ金持ってますか、恐るべし」

ハラオウン家！」

「ち、違つよ！私の友達の家が今度あたらしくアミューズメント部門で遊園地を開くからその体験として呼べてるんだよ」

「友達つて月村さんですか？確かに豪邸でしたね」

「うん、すずかじゃないよ。もう一人いるんだ民間協力者で私たちの親友が。今日会うはずだから紹介するね。」

「いいいいです。なんかオレの金銭感覚で付き合えるような方ではなさそうなので遠慮します。月村さんでさえぶっ飛んでますから。これ以上は無理です。」

「ハハハ、大丈夫だよ。確かに二人ともお嬢様だけど私達と同じだよ。」

「いえいえ、あなたと私を同じにしないでください、本局の執務官と地上局員ではかなり給料に差がありますからあなたと私も同じ金

銭感覚はしてないと思います」

「だ、大丈夫。ちゃんと買物だつて行ってるし、商品の相場くらいわかるよ。普通だからふ・つ・う」

「・・・まあいいですけど。どっちにしろ遊園地に行つた方が良
いんじゃないですか？お友達も待っているんでしょう？」

「そうだね、そうしようか。・・・エリオ、キャロ、ルーティ
ア、そろそろ行くよ。車の中もおしゃべりはできるから続きは車
の中で」

「・・・はい」三人の声が重なる。

もう準備はできていたので車のある駐車場に向かった。運転はリン
デイさんがしてくれるらしい。・・・地球での免許はあるのだろう
か？

そんな疑問を抱きつつも車に乗り込み遊園地に向かうのだった。・
・・・車でけえ

- - - - -

遊園地到着

遊園地と言えはにぎやかなイメージがあるのだが、今はオープン前なので人がいない。少しさびしい感じもするがルー達が遊べれば問題ないので気にしない事にする

ちなみにルー達は仲良くなったようだ。最初に話していた頃はちょっと緊張してうまく話せてなかったが、車内でフェイトが話に混ざったりして話しやすくしてだんだんと話すようになった。今では三人で手をつなぎながら歩いている。子供らしい光景だ

「仲良くなれたようで良かったですね」フェイトに話しかける

「そうだね。これからこうやってなんとも会えればいいんだけど・・・」

「なかなか難しいですね。住んでる世界がバラバラで保護者が仕事で忙しいとなると・・・」

「そうだね・・・それでも連絡とか取り合えば大丈夫だと思うし」

「そうですね、オレもたまにならルーを連れてこれると思うし、メガ・又さんだって休暇を取れば大丈夫でしょう。」

「私の方もなんとか合わせてみるよ。メガ・又さんともお話してみたいし。」

そんな感じで話しながら入口に向かうと、何人かの集団がこちらに手を振っている。おそらくフェイトの友達とその関係者だろう。月村さんらしき人がいるので間違いないはず

「来たわね。連絡があつたからみんな呼んだけど、やっぱりお昼が先よね、みんなお昼食べてないって言うし」気の強そうな金髪の女性がフェイトに話しかける

「そうだねアリサ。私たちもまだお昼食べてないからそうしよう。」

それにみんなの紹介もしたいし」

「それじゃー中に入りましょう。」

そう言われてそろそろ中に入っていく食事どころはすぐに有ったのでルーと同じ席につく。結構でかいテーブルでる以外にフェイトやエリキヤロ、月村さんに先程の金髪の女性が座った。他の席には月村さんに似た女性とイケメンな男性、その男性に似た人と高町さんに似た人とリンディさん、黒髪の女性、私服姿のファリンさんともう一人の女性が座った

金髪の女性が代表して注文し食事が来る。比較的オーソドックスなファーストフード。しかし、油が抑えられていて女性にやさしそうである

「それじゃーまずは自己紹介をしましょう。殆どの人は知ってるんだけど、知らない子たちのためにね私はアリサ・バニングスです。向こうに座っている人から・・・」そういつてアリサが俺たち以外を説明しだす。

わかった事は月村さんらしき人はそのお姉さんで忍さんと言い、イ

ケメンな男性が高町恭也さんでもう一人の男性が高町士郎さん。高町さん似の女性は桃子さんと言い黒髪の女性が美由希さんといい全員高町さんの家族らしい。桃子さんに関しては姉ではなく母親らしく女性の神秘を感じる……若すぎだろ

ファリンさんと一緒にいる人はノエルさんと言いファリンさんのお姉さんらしい……ファリンさんとは違いしっかりしてそうである

「そしたらそっちの番ね」そう言っただけから始めようとしたが三人が一斉に立ち上がり自己紹介を始めた。緊張して思わず立ってしまったらしい

「エ、エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシフェ……ルシエです」

「ルーテシア・アルピーノです」最初の二人は少し詰まったがルーテシアは大丈夫だった。それでオレの番になったので自己紹介する

「ジン＝ヤナギバです。よろしくお願いします」ぺこりと頭を下げる。そうすると向こうの席の椅子がいくつか倒れる。高町家のメン

ッだ。しかもこっちに向かってくる始末……何かやらかしたか？

「ええ〜つと、何かご用でしょうか？」

「君がジン君なんだね」土郎が聞いてくる

「他にもジンいると思いますが、一応ジンです」

「なのはを治療してくれた子かい？」

「なのは？・・・そういえばさつき高町って・・・？申し訳ないんですけど、高町なのはさんの事ですか？」

「そうかやはり君が・・・なのはを治療してくれてどうもありがとう。」深々と頭を下げる土郎さん。それに続き他の高町家の人も頭を下げる

「いえ、お気になさらず、医者としての仕事をしただけなんです・・・と言いたいところですが、高町さんのご家族なら退かないと思うので此処は素直にお礼だけ受け取っておきます」

「こちらとしては、それだけでは……あ、そうだ、うちは喫茶店をやっているね、なかなか評判なんだ、うちに来てくれたらサービスするよ」

「……機会があればぜひ。ただ、あいにくとそう頻繁にこちらには来れないと思いますが……」

「それは残念だ、けど機会があったら目一杯サービスするからね」

「ありがとうございます」

「うちの人気商品はシュークリームなのよ」桃子が話に入ってくる

「そうですか、今日は無理でしょうが、明後日くらいならいけると思います。一応3日ほど休暇を取って来てるので」

「ホント、じゃー用意しておくわね」

「すみませんが、たくさんお願いします。うちには大食漢が多くてかなりの量を食べるので・・・」

「あら、大家族なの？」

「そう言うわけではないんですが、昔から家族ぐるみで付き合っていてその子がたくさん食べるんです。それにあと少しすると寮暮らしになると思っているので、お土産でも買っていったらあげようかと」

「まあ、それならいっぱい作るわね」

「お願いします。とにかく沢山です」

「了解」その後当たり障りのない会話をして会話を終了する

その後子供たちは待ちきれないと言う感じで三人仲良く遊びに行ってしまった。保護者としてリンディさんが付いて行ったようだ。フ

エイトには友達と遊んで欲しいようだ。

フエイト達と一緒に行かないかと誘われたが、女の子3人に入って行くほど勇気があるほうではないのでジンはこの場で休憩する事にした。桃子さんと土郎さんはカップルのようにデートを開始する。同様に恭也さんと忍ぶさんもデート。溢れた美由希さんをファリンさんとノエルさんが慰めながら廻る運びとなった。

皆が行って静かになる。こういう日はボくっとしているのが一番だ。持ってきた本を出して皆が戻ってくるまで本を読みふけるのだった

第15話 意外な事実

遊園地に来たのに遊んでいないジン。遠くから見るとみんな楽しそうに園内を廻っている。

持ってきた本もあらかた読み終えたので今はベンチに座ってボウッとしている。ルーが楽しそうにしてるでよかったと思うが、メガ・又さんの代わりに保護者としてきてるのに結構ほったらかしにしてるのは良いのかと思いながらも空を見上げている。

ボウッと空を見てると横から声をかけられた。

「ジン君ちよつと良い？」話しかけられた方向を見ずに答える

「構いませんけど・・・」

「まあ用って程でもないんだけどね、少しお話をしてみたいなうと思つて」

「こちらは構いませんが、面白い話なんてできませんよ。それに他の人たちは良いんですか？」

「あ、うん、アリサちゃん達はまだ園内を調査するって言うてたし、私は疲れたから休んでるって言うて来てあるから大丈夫だよ」

「そうですか、でも疲れてるなら休んだ方が良いですよ。」

「それも大丈夫、そこまで疲れてるわけでもないから。ただ、ジン君と話がしてみたいなと思ったただけだから。」

「自分で言うのも何なんですけど、オレそんなに面白い人間じゃありませんよ。何か興味を引くような事がありましたっけ、月村さん」
「ジンはやつと空から視線を話しかけてきた人物に移す。その人物は月村すずかだった」

「お姉ちゃんとかぶるからすずかで良いよ。それと、最初からファリンと仲良くなれるんだから面白い人だと思うよ」

「まあ出会った時にも言いましたが、年上の人は名前で呼ばないようにしてるんです。なんか慣れなくて……。月村さんのお姉さん

がいる時は、月村さんのお姉さんと呼べば済む事なので」

「でも、それだと大変じゃないの？」

「まあ慣れてますし。それに、一応名前で呼んでる人もいますしね。昔から世話になってる近所の人なんか名前で呼びますし。ちなみに、ルーのお母さんがその一人ですね」

「へえーじゃあ、いつかは名前で呼んでもらえるかもしれないんだね。」

「まあそうでしょうけど、月村さんとこの先お会いすることの方が少ないと思いますけど」

「そんなことないと思うよ。これから地球に来たりするんでしょ？ だったらその时会えるかもしれないし、もしかしたら私がそっちに行くかもしれないし」

「月村さんがミッドに来るなら会うかもしれませんが、オレが地球に来る事はそんなないと思いますよ。今回はたまたまハラオウンさんとの話があって、メガ・又さん・ああルーのお母さんです・その人の代わりについてきただけなので、今後来るとは限りません」

「フエイトちゃんやなのはちゃんと会ったりしないの？あとはやてちゃんとか」

「あの3人とは知り合い程度の関係なんでそれほど親しいわけではないです。それに会うにしたってあの人たちはミッドに来ますから地球で会うことはないんですけど・・・」

「・・・そうだね。みんな仕事で忙しそうだし、その内ミッドの方に引越しちゃうかもね。今はまだ中学生だからこっちにいても来年には此处を出て行っちゃうかもしれないね。」

「そう言えばこちらには義務教育って言うのがあるんですけど？でもあまり意味はなさそうですね・・・」

「ん？どうして？日本の学力は世界的に見ても高い方なんだよ、あくまで地球内だけだ。」

「勉強自体に意味がないと言ってるわけではないんです。以前高町さんとこちらの勉学の事で話したんですけど・・・酷いものでした。」

「

「・・・で、でもなのはちゃんは理系は得意だよ」フォローにまわるすずか

「それもなかなか微妙な感じでしたけどね。執務官になるほどのハラウンさんや捜査官になる八神さんしか比較対象がいなかったのでもないとも言えませんが、高町さんの学力はそれほど高くはないと思っています。魔法学に関してはわかりませんけど・・・。それに管理局勤めでこちらの勉強を疎かにしてしまっているせいでもあるんじゃないかと、それでも問題があります、というよりそれが問題ですね」

「？」すずかが首をかしげる

「おそらく学校側は高町さんを黙認しているのでしょう。学校を休んでもある程度の結果さえ残せばあまり気にしてないように思えます。これは他の二人にも言える事です・・・。そのせいで高町さん達は学校の勉強にそれほど重きを置いていなく、得意教科だけで成績を出してる状態です」

「けど、それは悪い事じゃないと思うけど・・・」

「確かにそうです。得意な事を伸ばす事はむしろ喜ばしい事なのです。しかし逆を言ってしまうえば他の事はやらなくても良いという志向になってしまいます。オレも職業上一点突破型ですけど基本的な知識と言うのは必ず役に立つものなのです、それは仕事に就いた後よく思います。けど地球の場合は義務教育と言う名に縛られて勉強そのものに意味をなしていない気がします。だから学校で出されたものさえクリアすればOKという志向につながるわけです。そもそも勉強やらされるものではなくやるものだと思っています。人は昔からいろんな事知って来ました。それはどの世界でも共通でしょう、では月村さんなぜあなたは勉強するんですか？」

「え、えゝつと将来必要になるからじゃないかな」

「そうですね。それじゃあなぜ勉強が必要だと思いますか？」

「必要だからじゃないの？」

「まあその通りなんですけど。これは自論なんですけど、昔の人たちは勉強を勉強ととらえていなかったんじゃないかと思います。自分が知りたい事があってその過程で必要になるから学ぶ、そしてまた知りたい事が出来て学ぶといったサイクルを続けてるんだと思います。目的があってそれに沿う、これが勉強の本質だと思っています」

す。勉強はあくまでも手段であって目的ではないということです」

「でも私たちの中にも良い学校に入るために勉強している人もたくさんいるよ、それは目的を持っているのとは違うの？」

「オレは何も貴方達を否定してるわけではありません。ただ、良い学校に入るために勉強した人のその先はどうでしょうか？良い学校にはいったは良いものの。その先の展望を考えていなかったため結局はどうしたかったのかが分からなくなる人が多い」

「そう・・・だね。全員がそう言うわけではないと思うけど、良いところに行ったのに結局やめちゃったりする人が多いってよく聞くな。お姉ちゃんなんかは月村家当主としての自覚があったから学校以外でもたくさん勉強してたっけ」

「結局何をするのかではなく、何がしたいのか。そしてそのために何が必要なのかを考える事が大事なんだと思います。義務教育のメリットとデメリットってわかりますか？」

「メリットは最低限の学力の確保、デメリットは・・・思考の均一化かな」

「メリットの方はそうですね。デメリットの方もそれであっていると思います。ただオレは危機意識のなさを招くものと思っています」

「危機意識？」

「はい、義務教育中は義務だから学校に行かなくてはいけない、裏を返せば義務教育中は学校にさえ行っていればいいんです。そんな環境の中で勉強をするというのはなかなか難しい」

「どうして？」

「誰かにやらされるものと言うのは言い訳ができるんですよ。――自分は思っていないけどやれって言われたからやってるだけ――みたいな考えが出てきます。自分に対して責任を負わず他人に責任転嫁する。これは最終的に自立心を生まない結果を生むと思います」

「じゃあ義務教育は必要ないってこと？」

「いえ、必要ではありません。この日本の学力がそれを証明しているでしょう。ただ、それを活かしかれてないというのもまた事実です。折角勉強するのなら実用的なものにするべきなんです。将来的に使わないから……みたいな発想が勉強を阻害しているとオレは思うん

ですよ。他にも遊びたいとか理由はありますが、勉強の時間がとれないほど遊ばなきゃいけない人なんていないと思いますし、要はやる気ですね。それは結局先を見据えてない勉強方針が問題だと思っわけです。」

「へえ、なんかジン君先生みたいだね。」

「そんなことはないですよ、実際この案をやるうとするにはかなりの苦勞が伴うでしょう、昔からの習慣を変えるのはなかなか難しいものです」

「そうだね、今でもいろいろ教育課程が見直されてるけどこれと言つて成果が出てるわけではないからね。」

「難しい限りです」

「……そう言えばジン君はなんでそんなにここの教育に詳しいの？」

「ああ、ミッドにはいろんな世界の事が書かれてる本が保管されているの書庫があるんです。昔そこに入り浸つてまして、そこでいろ

んな世界の事を知ったのです。その中に地球の事もありました。それに高町さんとの約束の事もあるので最近勉強してるんですよ地球の事。」

「約束？」

「ええ、以前模擬戦をした時に運よく勝ってしまったて、それで模擬戦をまた申し込まれそうになってしまつて、こちらの出すテストに合格できれば引き受ける事にしたんです。もちろん範囲は高町さんに合わせてまして。オレもこちらの事を勉強しなおしてるんです。一応オレの方が年下なので高町さんもがんばって勉強してるようです。オレだつて命は惜しいですから生き残るために頑張つています」

「ええ！！ジン君負けたら死んじゃうの？」

「ええ、残念ながらあの砲撃魔の魔の手から生還する手はないでしょう。負けたが最後砲撃の的に成るだけです」

「なのはちゃんはそんな事をしないと思うよ」

「知らないんですか？魔王からは逃げられない・・・これはもはや曲げようのない事実なんです。困った事があるとすぐ砲撃を撃とうとする、あの悪魔はためらわないんです」

「で、でも、なのはちゃんは優しいよ」

「月村さんは本当の姿を見てないだけです。あの人が管理局でなんて呼ばれてるかわかりますか？・・・管理局の白い悪魔ですよ。まず普通の人には付かない名ですよ。きっとその内、悪魔が魔王に変わりますね」

「・・・・・・・・・・」絶句するすずか。親友の新事実言葉が出ないのだろう

「ジン、そうやって騙すのは良くないよ」フエイトが参入してくる

「騙してないですよ、全て本当の事です。貴方だってあの人が砲撃魔である事は認めてるじゃないですか」

「そ、そうかもしれないけど・・・」

「なのはちゃんが変わっちゃったんだね。」遠くの空を見て何か悟った目をするすずか

「すずか！？戻ってきて！なのはは変わってないよ」

「なんと！？昔から砲撃魔とおっしゃるのですか？・・・貴方達よく生きていられたね」

「そう言う意味じゃないよ！」フェイトが叫ぶが場がかなり混沌としてきた

「何？この状況？」アリサ到来

「いえ、楽しく談笑してるだけです。議論の方も解決しました。結果はやはり魔王ということですよ」

「何よそれ」

「気にしないでください。貴方の友達は昔から変わらないということです」

「なんか納得がいかないけど、まあいいわ。それで、ここの感想を聞きたいんだけど・・・」経営者側から感想を聞かれた。なので話を二人に振る

「だそうですよ、どうだったんですか、お二方？」先程回復した二人に振るがなんか微妙な顔をしている。アリサの方を見ると若干方が震えてる

「風邪ですか？」

「あんたに聞いているのよ！！」アリサが叫ぶ

「・・・と言われましてもオレ此处で本読んでただけですし、どこも廻ってないのでわかりません。あ、でも昼はおいしかったですよ。」

「ハァ、あんた今日何しに来たの？」アリサが呆れたように言う

「一応保護者としてきたんですけど、それも微妙なところですね」

「まあいいわ、それじゃー今から何かに乗って来なさい。ついでに園内を見て感想を聞かせて。こういうのはいろいろ意見があった方が参考になるのよ」

「・・・とても面白かったですマル」

「あんたふざけてるのかしら？」アリサがこめかみをピクピクさせながら言う

「いやさすがに遊園地を一人で見るとかなりきつくないですか？主に精神に」

「なら誰かと一緒に行けば良いじゃないの」

「・・・なんですかそれは、オレに女性を連れて歩けとおっしゃるのですか？無理に決まってるじゃないですか、全くもう少し考えて物を言ってください。オレはアニメの主人公みたいにモデルわけではないんですよ、女性と歩くなんてとてもとても」

「じゃあ私と一緒に廻ろうか？」

「・・・何のつもりでしょう、月村さん？」

「だって、ジン君が一人で回るのは嫌だって言うから、二人なら平気だと思うんだけど？」

「そこは、バニングスさんが大人の器量を見せて諦めれば済む事なんじゃ・・・」

「わたしはあきらめる気はないわよ。一人でも多くの感想が聞けた方が良いし」

「わあー経営者の鏡ですね」

「そうよ、だから私のために行きなさい。それにすずかとデートできるなんて相当な事よ。」

「アリサちゃん！！デートじゃないよ」顔を真っ赤にしてアリサに言うすずか

「男女が二人で遊園地を廻るのがデートじゃなかったら一体何がデートなのよ」

「それじゃー行きましようか、月村さん？」アリサを無視して席を立とうとする

「え？いいの？」「すずかとアリサの声がかぶる

「良いも何も月村さんと廻れるのなら役得ですし、オレが回るのはバニングスさん的には決定事項なので一人よりは二人の方が良いじゃないですか。だからと言ってここにいる全員と廻るほどの勇者じゃないですけど」

オレが話しだしている時にフェイトも付いて行くみたいな顔をしてるので先に言っておく。さすがに2対1は辛い

「それじゃーよろしくお願いします」すずかが頭を下げる

「いえいえ、こちらこそお願いします」

そう言って二人で遊園地を廻るのだった。

- - - - -

すずかと園内を廻っていくつかのアトラクションに乗る。意外と楽しめたのはすずかのおかげだろうか、園内を廻りながら会話するのも楽しいものだ。アトラクションもいくつか乗ったので最後は定番の観覧車に乗っている（すずかが教えてくれた）

「こういう狭いところに閉じ込められるのはなんかいやですね」

「そう？ 私はこういうところ好きだな、好きな人と二人きりになれるし」

「申し訳ないです、今回がオレなんかか。月村さんは将来理想の相手と乗ってください」

「そんなことないよ、ジン君はなんか大人びてるしとても魅力的だと思っよ」

「月村さんに言われると照れますね。うれしい限りです」

そのあと何気ない会話がされるが観覧車がちょうど天辺に来た時急に止まった

「あれ、故障ですかね？」

「どうだろう？でもこのままだとちょっと怖いね」

「その点は問題ないですよ、いざとなった魔法がありますから」

「そう言えばそうだね、ジン君も魔法使いだもんね」ジンの言葉を聞いて安心したさすがが軽く返す

「……それならちょうど良いかな」

「何ですか？」

「……ジン君やっぱり私達前にも会ってると思うんだ。小さい頃」

「オレもそのような記憶がありますが、地球に来たのは今回が初めてですよ、オレの覚えてる限りでは・・・」

「でも、小さい頃にジン君と話した事があると思うの」

「ん〜、よくわかりませんが、ちょっと聞いてみますね。母さんなら、オレが地球に来たかどうかかわかると思うので」「そう言っただけで、未を取り出し連絡を入れる。すると、すぐに画面が出てきて母親の顔が映る

「ん？どうしたのジン？今日はルーちゃんと旅行じゃなかった？」

「まあそうなんだけど、ちょっと母さんに聞きたい事があって」

「何？」

「オレって小さい頃地球に来た事あったけ？」

「何、そんな事？あるじゃない、貴方の父さんの御実家に挨拶に行った時に一度だけ」

「嘘！あれって地球だったの？父さんが地球出身なのは聞いてたから知ってたけどあの時は母さんの実家だと思ってた。」

「何言ってるのよ、私の実家には何回か言ってるでしょ。全然違うじゃない」

「そんなのわからないよ、大体部屋の中にいるだけなんだから。」

「まあそうよね。あなた同年代の子がいてもあまりしゃべらなかつたし、友達少ないもんね」

「うっ」ジンの心に何かが刺さる

「でも地球に行った時はずっと女の子と遊んでたじゃない。あの時はジンにようやく友達ができたと思ったわ。たしか、あの人の親せきのご令嬢じゃないかしら……。ええっと月村って言ってたよ

うな気がするわ。やゝね歳をとると物忘れが激しいわ」

「……………」

「どうしたの？」

「今その時のご令嬢と会ってると言ったらどうする？」

「あら良かったじゃない、貴方の初めてのお友達でしょ。なんならお嫁さんでもいいけど」

「もうボケたんですね。いやゝ歳をとると大変ですね。自分の息子の年齢すら忘れるなんて。お歳なので大変でしょう、ではこれで画面の向こうで母親が何か言ってるが無視して通信を切る」

「……………だそうです。すずかさんだったんですね。小さい頃は名字がわからないので名前で呼んでいましたが、まさかあの時の子だったとは……………。よくオレの事覚えていましたね。」

「うん、ジン君は他の子とちょっと違ってたから。それに私の初めてのお友達だし。ジン君に忘れられてたのはちよつと悲しかったけど」

「うつつ、すみません、なんとなく覚えていた感じがだったんですけど、地球に来た事はないと思ってたんで気づきませんでした。」

「フッフ、冗談だよ。それにジン君もさっき会った時会った事がある気がするって言うてくれたし、少しでも覚えてくれてたんだね」

「まあ初めての友達ですから。あれから会うことはなかったけど、オレの最初の友達ですからね」

「その最初の友達の顔を忘れたのは誰かな」

「すみません」

「フフ、じゃあ罰として今日はうちに泊まらない？」

「……なぜそうなるのでしょうか？」

「だってずっと会いたいと思ってた人に会えたんだよ、もっと話したいよ。それにホテルにでも泊るんじゃない？ だったらうちに泊まれば問題ないよ。」

「そうなんでしょうけど、それって問題じゃありません？ それにルイの意見だって聞かないといけないし」

「だったら後で聞いてみよう。それで大丈夫ならお泊り決定つてこ
とで」

「まあオレ的にはありがたいですけど、これでも14なので泊めてくれるホテルをハラウンさんに聞こうと思ってたくらいですから」

「ジン君って案外計画性ないんだね」

「……………」

そんな会話をしていると地面が近づいてくる。いつの間にか動いていたらしい。ようやく地面かと思うとなにやら下に黒ずくめの集団がいる

「あのくつかぬ事お聞きしますがあの下の方で待ち構えてる人たちはお知り合いですか？」

「え……うん、知らないよ。誰だろう？」

「なんか確実にオレ達の事待ってる感じですけど、心当たりあります？」

「……………」「どうやら心当たりがあるようだ

「まったく計画的にお金を借りないからその筋の人に狙われるんですよ」

「ちがうよ！あれはたぶん私達月村家を狙ってる人たちだよ」

「もう借金生活ですか、裕福な頃の生活が忘れられないからそういうことになるんですよ」

「だから違うよ。たぶんうちの親戚が雇った人たちだと思う。私を攫ってお姉ちゃんに交渉する気だと思う。」

「・・・ハア、お金持ちにはお金持ちなりの苦労があるんですね。誘拐なんてパンピーのオレには縁のない話です・・・あれ？最近されたけど・・・まあいいや。とりあえずあの人たちを捕まえれば良いんですね」

「危ないよ」すずかが不安そうな顔で言うが

「オレこれでも局員ですよ。武装した程度連中に後れは取りません。まあすずかさんもいるので慎重を期しますが」

ジンがなにか悪だくみを思いついたような顔で笑った。

第16話 事件解決とその後

「それで結局どうするの？もうすぐ下に着いちゃうよ」

「まあオレが魔法使いつてところを見せますよ。とりあえずしゃがんでください。」言われた通りしゃがむすずか

「とりあえず転移で場所を移しましょう。ここにちゃんと身代わりを残して」

「そんなことできるの！？なのはちゃん達に魔法を見せてもらったことあるけど、そう言うことできなかったよ」

「オレはあの人たちと違ってこういうセコイ感じの魔法が得意なんですよ。・・・それじゃ移動しますね」

そういつて場所を移す。今いるのは黒服達が見えるところ。あちらがこちらに注意を払えば気づけるが、上にいる罔を見ているためこちらには気づかない。

「そろそろ罔が地面に着きますよ。とりあえず見ててください」

そう言われてじつと状況を見守るすずか。すると観覧車が地面に着いた瞬間黒服達が一斉に入り中にいる二人を取り押さえる。偽ジンと偽すずかは抵抗しているように見えるが銃を突きつけられおとなしくしたようだ。

それを見て黒服達は油断し偽ジンが行動に出る。正面にいたやつに飛びつく。相手の方もとつさに避けようとしたが油断していたためそのまま押し倒される。その事に怒りを覚えたのか偽ジンに向かって銃を発砲

偽ジンが崩れ、偽すずかが叫ぶ。これを聞けば入り口近くにいるフエイト達にも聞こえるだろう。男たちも慌てて偽すずかを連れて立ち去る

しばらくしてから騒ぎを聞きつけた高町家や月村家が到着した。倒れてるジンを見て顔がこわばるが、さすがにそろそろ良いかなと思いをかける

「どうかしましたか？怪我人でも出たのなら治療しますが」

「そうだ、ジン。ジンが撃たれてここで倒れて・・・あれ？無事なのかジン」慌てていた恭也がジンに詰め寄るが撃たれたと思っているジンが現れてビックリしている。他のメンツも同様である

「魔法かい？」意外に冷静な士郎がジンに尋ねる

「ええ、身代わりをここに残しオレ達は別の場所に移動しました。すずかさんも無事です。」そう言って後ろにいるすずかを出す

「すずか！」姉の忍がすずかに抱きつく。心配をかけさせてしまった

「で、でも先程連れて行かれたすずかちゃんは・・・」ファリンが混乱しながらも聞く

「あれも身代わりです。それよりもどうしますか？一応オレの魔法なんで居場所はわかりますが、しばらくすると消えちゃうんですけど」

「そうね、まず首謀者を捕まえに行きましょうか。私の妹に手を出

そうとした報いを受けてもらっわ」忍が何かドス黒いオーラをだす。若干周りが引いている

「ま、まあオレ達も協力するさ。こういうやつは徹底的にやらないと調子に乗るからな」恭也が協力を宣言する

「ありがとう恭也。それで居場所はどこかしら？」

「ここから2キロ先を移動中ですね。なんか港の方に行くって言ってます」

「会話がわかるのかい？便利な魔法だね、うちのなのはもこういう事ができるのかい？」士郎が感心したように言う。

「いやできないと思いますよ。オレはどちらかと言うと裏方なんだからこういう魔法の方が得意なだけです。ハラオウンさんだって無理だと思っています」

「そうか、すごいんだね。ジン君って」美由希も会話に加わる

「それじゃー恭也、行きましようか。ノエル準備してちょうだい。ファリンはすずかと一緒にいてあげて」

「畏まりました」「はい」

「敵戦力は大体10人くらいですね。ボスらしき人を除けば全員武器を所持してますね。あとなんか人じゃない感じの人もいますね。・
・・おそらくロボットか人形みたいな感じですね。感的にはエーアリヒカイトさん達に近いですね」

「!?!」周りが驚く。

「それでも医者ですよ。見ればわかりますよ」

「そ、そう。・・・この事は・・・」忍が言いづらそうに言う

「別に何もしませんよ。人間でないだけで人ではあるんですか」

「どういう事?」すずかが真剣な表情で尋ねる

「生物学的には人間と言う区分に入らないんでしょうが、エアリヒカイトさん達は貴方達の家族なんでしょう？それに感情もあるようですし、そこまであつたら十分に人でしょう。種族が人間ではないというだけの事です。」

「・・・でも普通の人とは違うんだよ？」

「やけに食いつきますね・・・それで、それがどうかしましたか？」

「え！？」

「普通と違う、確かにそうでしょうが普通と違う人なんてこの世に一杯いますよ。そもそも正確に普通と言える人なんてほとんどいませんよ。どこかしら違うんです。だってそれが人ですよ。みんなが同じなんてありえません。世の中には良い人だっている。それに善人過ぎればあなたから見ればそれは異常ですし、根っからの性格破たん者だっている。それに普通と違うって意味ならオレだって十分に異常ですよ、魔法が使えるんですから。」

「・・・」

「普通でない事に問題なんてないんですよ、他人の迷惑にならなければ・・・要は他の人になんと言われようとしつかりと自分を保てばいい、そして自分の事をわかってくれる人を見つければ良いんです。万人に好かれる人なんてそうそういませんよ。みんな普通にそうやって生きてます。だから人間じゃない事に問題なんてないんですよ」

そう言うはずかは泣きだした

「ええ！？何でそこで泣いちゃうんですか？なんかオレが泣かしたみたいじゃないですか」

「うちの妹を泣かすなんて、責任とってちょうだいね」忍がニツコリと笑う

「そうだぞ、女の子を泣かせた責任はとらないといけないな」恭也も乗ってくる。ここでひいては後は弄られるのみ・・・ならば

「そう言う意味では高町さんのお兄さんも余程多くの責任を取って来たのでしよう。先達としてご教授願いませんか？」

「グッ」

「ハハ、そうだよ、恭ちゃんいろんな女性を泣かせちゃってるもんね」美由希が乗る

「恭也……」士郎が息子を蔑むような目で見る

「違う！オレはそんなことしてない！！」

「自分の非を認めるのも男らしさですよ……たぶん（ボソ）」

ジンをからかう筈だった状況から無理やり恭也に移す。恭也がイケメンなのでそう言う事があるんじゃないかな程度で話してみたが本当だったようだ。

そんな感じで場が和んでいるとすずかが落ち着いたようだ

「ジン君、後で話があるから」そう言っすずかがファリンと一緒にアリサ達の方に向かった

「・・・オレなんか悪い事したっけ？」お話しが、O・H・A・N・A・S・H・Iに聞こえてしまうのはどうしてだろうかとジンは深く悩むのだった

その後場が元に戻って作戦会議が開かれる

「それじゃーオレと父さん、ノエルが突入して、忍と美由希は後づめで待機してくれ。制圧次第連絡する」

「そうね、それで行きましょう。向こうには自動人形がいるみたいだし、無茶はしないでね」

「あのーちよつと良いですか？」

「何？」

「場を制圧するだけで良いのならオレができますよ」

「嘘！？ジン君ってお医者さんじゃないの？」美由希が驚きながら聞いてくる

「まあそうですね、一応武装局員でして・・・荒事の対処もある程度できます」

「ホントに大丈夫なのかい？無理はしなくて良いだよ？」土郎が心配そうに聞いてくるが

「別にオレが直接制圧に行くわけじゃないんで危険はないです」

「どういつこと？」忍が聞いてくる

「オレの能力ですね。油断してる相手なら余裕で鎮圧できます。ただその自動人形だけはどうなるかわかりませんが」

「それでも他の連中を倒してくれるのなら大助かりだ。あとはこちらで対処できるから」恭也がそう言う

「それじゃー行きましようか。早く終わらせないとルー達心配するので」

「それじゃー早速移動しましょう。ノエル車を出して頂戴」

「その必要はないですよ・・・言っただけじゃないですかオレ魔法使いなんです」その言葉が終わると同時に転移した

- - - - -

「え？」美由希が声を漏らしたが自分が今どういう状況にあるのかわからないようだ

「静かにしてください。気づかれます」小声で言う

「ちょっとこれどういう事!？」美由希も焦っているようだがちゃんと小声で話す

「オレが転移で皆をここに連れてきただけです。早く準備をしてください、他の方はもう準備できてますよ」

「え？」周りを見てすでに戦闘態勢に入っている事に気づく。どうしてこんなにも早く順応できるのだろうか、私の方がおかしいのだろうかと思ってしまう美由希

「美由希もまだまだだな。帰ったら鍛えなおさないと」恭也が物騒な事を言う

「冗談だよね!？恭ちゃん」

「静かにしてくださいって」

「そうだぞ美由希」

そっぴわれて落ち込む美由希

「それではこちらから仕掛けます。仕掛け終わったら中に転移させますんで中の人たちの捕縛をお願いします」

「わかった。それでどう仕掛けるんだい？」

「オレには魔力を爆弾に変える能力があるんですよ。ちゃんと非殺傷だから死にはしませんし、衝撃で昏倒するくらいの威力にするんです。あとはお願いします」

「でも、その爆発させるものなんてあつたけ？」復活した美由希が聞いてくる

「すずかさんがいなくて良かった。身代わりとはいえ自分が爆発するところなんて見たくないでしょうから」

「まさか！？」美由希も何が爆発するかわかったようだ

「行きます」その言葉と同時に轟音が鳴り響き、美由希が何かを

言う前に転移させた。

結局戦闘はほとんど行われなかった。ジンが最初に行った爆発でほぼ全員が気絶、残っていた自動人形も主人を失い沈黙。命令がなかったらしくそのまま忍とノエルによって停止された。高町家は気絶した者たちをすぐさま捕縛。捕縛された者たちは警察の御用となり、忍によってトラウマを植え付けられてしまったためこの先出所したとしても月村家に関わろうとはしないだろう。

ちなみに忍のトラウマを植え付ける姿を見た恭也は忍は絶対に怒らしてはならないと心に刻み込んだらしい。

誘拐騒動も粗方方が付いたので遊園地に戻る。戻った後は何をしていたのかアリサ達に問い詰められたが適当にごまかして何とか逃げた。誘拐犯を捕まえに行ってましたとは言えないし、人助けとはいえ魔法も行使しているのでフェイトやリンディ辺りにバレるのはまずい。適当にごまかすしかなかったともいえる

その後、納得してないアリサだったが、さすがが助け船を出してくれたのでなんとか引き下がった。だが、今度は遊園地の感想を聞かれる事になりずかと廻ったのはそれほど多くないので、少ないながらも良い点と悪い点を述べた。と言うか空戦魔導師に絶叫系の感想は無理なんじゃないだろうか、もっとすごいアクロバティックなことをしてるのに怖いとか楽しいとか、そんな感想出てこないと思う

とりあえず、こちらの感想に満足したらしく（他の人たちはあまり悪い点は述べなかったらしいので悪い点まで言ってくれた事が良かったようだ）それ以上絡まれることはなかった。

それと今回のお礼がしたいということなので忍が自宅に招待してくれる運びとなった……先にすずかに誘われているんですが……

その事もあって、ルーに確認をとる事にした。ルーに確認したら快く了承してくれたが、泊る場所を考えてなかった事にダメ出しをされてしまった。6歳児にダメ出しをされるオレって……

遊園地の調査はここで終了。子供たちは大いに喜び、当初の目的は達成できた。ルーも他の二人と友達になれたようで良かった。しかしここで問題が発生。なんとキャラがルーともっと話したいと言い出した。こちらとしては良い事なんだが、今はタイミングが悪い。

ルーをハラウン家に預けるという選択肢があるが、さすがにメガ・又さんの代わりの保護者として来てるのでそれは拙い。でも、すずかや忍との話も大事そうなので断れない。そのことをフェイトとすずかに話したら、なんとエリオとキャロも泊れば良いと言い出した。当然保護者としてフェイトも来る。さらには便乗してアリサも泊るという始末。……どうしてこうなった？

- - - - -

その後ノエルさんが運転する車に乗り込み月村家へ移動。ルーとオレの荷物はリンディさんの車から移してある。フェイト達はいつたん帰って準備してから来るらしい。

フェイトが来る前にすずかを含めた月村家の方から大事な話があるという。なぜか恭也もいるが、おそらく関係者なのだろう。ルーは今ファリンさんに面倒を見てもらっている

「とりあえず、今回の事に関して、月村家当主として、お礼を先に言わせてもらいます、ありがとうございました。」向かいあったイヌから立ちあがって頭を下げる忍

「いいえ、お気になさらないください。たまたまです。あの状況ですずかさんを見捨てるという選択肢はなかったですし、オレも一緒に誘拐なんてされる気はなかったので。ただお礼だけは受け取っておきます」

「そうしてもらえると助かるわ。それでここからが本題なんだけど・・・これはなぜずかが狙われたのかから話す必要があるわね」

「身代金とかじゃないんですか？・・・でもそれだったらバニングスさんも狙うか・・・」

「お金じゃないわ。理由は月村家にあるの」

「エーアリヒカイトさん連絡みですか？」

「そうね。うちは夜の一族と言うものでその中でも月村家は由緒正しい家柄なのよ。ここから先はずかが言いたいそうだから、聞いてあげて」

「夜の一族？」ジンがすずかに聞く

「私はたちは特殊な人間なの」すずかが言い辛そうに言う

「特殊？それは俺たちみたいなものですか？でも魔導師には必ずあるリンカ―コアがありませんよ。」

「ジン君達とは違うの。私たち夜の一族は吸血鬼の集団なの」それを言うときすずかが下を向いてしまった

「吸血鬼ですか・・・地球で言うとき血を吸う妖怪の類でしたっけ？なんかの本で読んだ事があります」

「正確には吸血鬼のようなものと言うのが正しいわ。妖怪と言うわけじゃないの。ただ普通の人間とも違うわ。突然変異が定着した種族で、美しい容姿と明晰な頭脳、高い運動能力や再生能力、あるいは心理操作能力や霊感など数々の特殊能力を持つ集団なのよ。これらの代償として体内で生成される栄養価、特に鉄分のバランスが悪いため、完全栄養食である人間の生き血を求める。私たちは人の血

を吸うのよ」「すずかの代わりに忍が説明を入れる

「そういえば、吸った人を吸血鬼にできるんですけどっけ？」

「さっきも言っただけ私たちは吸血鬼に似ているだけで完璧に吸血鬼であるわけじゃないの、だから血を吸ったからと言って吸血鬼にできるわけではないわ。せいぜい貧血になる程度ね。中には死ぬまで吸うやつもいるけど」

「それで、それをオレに話してなんか意味があるんですか？」下を向いたまま、その言葉を聞いてすずかが答える

「ジン君は怖くないの？私たちは化け物なんだよ！」

「そんなこと言ったらオレだって十分化け物ですよ。普通の人に魔法なんて使えないんですから」

「でも、私たちは人の血を吸うんだよ」

「まあ、それだって人を襲って吸ってるわけじゃないんでしょ？さすがにそう言うことされたらあれが……」

「そんなことはしてないよ！今は輸血パックから吸ってるから」

「でしょう？だったら怖くはありませんよ。他人に害をなしてないなら恐れるような事はありません」

「でも、人よりも力が強いから相手を傷つけちゃうかもしれないよ」

「そんなの誰だってそうですよ。今日子供でさえ人を殺したりするんですよ、それに物理的にやらなくても精神的に人を傷つける人なんて一杯います。力が強い事が悪いわけじゃない。使い方が問題なだけです。使い方を誤れば力の大小など関係なく人を傷つけます」

「随分としつかりとした考え方ね。でもみんながみんなあなたの言うような考え方ができるわけではないわ。人は異端を嫌うものなのよ」忍が今までの経験から語る

「それはどんな動物だってそうですよ。でも、異端でなくたって嫌いの物は嫌いだし異端であつても好きなものは好きこれもまたどんな動物だって変わらないと思います。だから高町さんのお兄さんはあなたと共にいるのでしょうか？」

「・・・そうね、確かにその通りだわ」

「だから、オレにとって貴方達は別段普通と変わらない。まああくまで地球外の人間の意見ですけど・・・」

「それじゃ、ジン君は私の事を気持ち悪く思わないの？」　「さすがが訴えるような顔をして聞く」

「他の人がどう思うかは知りませんが、オレ個人ではそんなこと思わないですよ。逆に聞きますがあなたはオレが気持ち悪くないんですか？」

「私もそんなことは思わないよ」　「さすがはつきりと答える」

「それは良かったです。初めての友達に嫌われるのは嫌ですから」

「私もそうだよ」すずかが嬉しそうに答える

「それじゃー話もまとまったところで契約に入りましょう」忍が真剣モードをとりて明るい声で言う

「契約？」

「そ、契約。夜の一族の事を他言しないようにしてもらったためにする契約よ」

「何するんですか？」

「簡単よ。すずかと恋人になればいいのよ？」

「お姉ちゃん!!」すずかが顔を赤くして言う

「冗談よ。ただ誓ってくればいい、ただその誓いを破れば……」

「大丈夫ですよ。誓います、この事は誰にも口外しません」

「宜しい。本当は月村家の身内にするために結婚とかさせるんだけど、貴方達にそれはいらないわね。なんかすぐにくつつきそうだし」

「もうお姉ちゃん!!」

「ハハハ、冗談よすずか。でも頑張りなさい、彼みたいな人はなかなかいないから、絶対に逃しちゃダメよ」

「……うん」すずかが顔を赤くしながらもちいさく頷いた。
当のジンは恭也と話して見ていない

話し終えた頃にフェイト達が到着しみんなで夕飯を食べることになった。すずかの事はフェイト達には話しているのかと尋ねたら、まだだったらしく、全員が揃った時に打ち明けるようだ。今日の事で決心が付いたらしい。

- - - - -

夕飯も終わって各自が部屋に戻る。子供たちは同じ部屋でフェイトやアリサはすずかと一緒にいる。溢れたジンが一人さびしく一人部屋になるかと思っただ、ルーがまだ見知らぬ土地で寝るのは心細いらしくオレが子供部屋で寝ることになった。フェイトもエリオとキヤロを心配して一緒に寝ようとしたがさすがにそれは拙いので、何とか説得して引き下がってもらった。

今は部屋も決まったのでそれぞれの部屋でお話をしている。さすがに子供の会話に入っていくわけにはいかないのですずか達の部屋に御厄介になる。これはこれで問題があるような気がするが・・・

「今日は楽しかったね」

「そうだね、すずか。アリサも今日はありがとう。おかげでエリオ達もすごく喜んでくれた」

「別に気にしないでいいわ、こっちも協力してもらったわけだしお互いさまよ」素直にお礼を言われて照れて見えるようなアリサ

「あれがツンデレなんですね。初めて見ました。実際見るとなんか面倒な感じですね、すずかさん」

「ジン君、あれはすごくかわいいんだよ。うれしいけどそれを素直に表せないそんな乙女の表情なんだよ」

「なるほど、深いです。自分はまだその域には達していませんでした。これから精進します」

「頑張つてね、アリサちゃんはすごくかわいいから。」

「ちょっとその二人聞こえてるわよ！誰がツンデレよ」

「え！？」「二人の声が揃う」

「何、その自覚ないの」って感じの反応は！！私はツンデレなんかじゃないわよ！」

「またまた」

「だ・か・ら」ホントはわかってるくせに」「みたいな反応はやめなさい！」

「アリサ落ち着いて」

「離さないフェイト、あのニヤニヤした顔を止めさせないと」

「ジンもすずかもあまりアリサをからかつちゃダメだよ」

「フッフ、ごめんねアリサちゃん。アリサちゃんがかわいくてつい」

「すみませんね、バニングスさん、ただ暇だったんでからかっただけですよ」

「あなたの方は性質が悪いわ!」

「冗談ですよ、[冗談……2割くらい(ボソ)]」

「最後の言葉聞こえてるわよ!もう!!!」

「バニングスさん、夜中なんだから静かにしないと近所迷惑ですよ」

「大丈夫よ、すずかの内の近くに家はないわ!」

「そついう問題ではないですけど……ハア」

「な・に・よ、その反応はー！！！！」

「アリサ落ち着いて、ジン！これ以上アリサを怒らせないで」

「了解です」ひとしきりいじったのでとりあえず満足しておく。

「ところでさあ、あんたとすずか妙に仲良くなったじゃない？すずかだけ名前で呼んじやったりして」ニヤニヤしながら話を変えるアリサ

「ああそれですか。これには深い事情がありまして詮索無用でお願いします」

「何よ、良いじゃない教えてくれたって」

「アリサあんまり無理言っちゃダメだよ」

「まあ、別にかまわないんですけど」

良いのかよ！みたいな顔でジンを見るアリサとフェイト。すずかはただ笑っているだけ

「大したことではないんですけど、すずさんはオレにできた初めての友達ですから」

「……あんだ、大変だったのね。今まで友達ができなかったなんて……私でよければ友達になるわよ」

「ジン、言ってくれば……」盛大に勘違いする二人

「え、いや、あの、勘違いしないでください。別に今日友達になったわけじゃないですから」

とりあえず弁解から始めるジンだった

第17話

空気ヨメ

「オレとすずかさんは小さい時に一度会ってるんです」

「でもあんたはあっちの世界の人なんでしょう？　だったら会えないじゃないの」

「ええ、オレもそう思ってたけど最初に会ってすずかさんに聞かれた時はわからなかったんです。すずかさんは気づいたようなんですけど」

「ジン君忘れてたもんね」

「うっ。・・・その時似たような子とは会った事あるけど、あれは管理世界での出来事だと思ってたんで気づかなかったんです。それで遊園地に行つて二人で話してた時にやっぱり会った事があるんじゃないか？という話になりました、母さんに聞いてみたんです。すると、オレが管理世界だと思ってたのは実際は地球で、似ている子じゃなくて本人さんだった訳です」

「へえ、そんな事があったんだ。だからすずかは私達と友達になった時、一番最初って言わなかったのね。なのはや私はそうだけど、

「ずかは一入いるって言ってたもんね。ただ会えなくなっちゃったって言っただけ、こいつがそうだったのね」

「そうだよ。ジン君とは小さい頃にあつてそれっきり。連絡先はわからないから会えなかったんだ。親戚の集まりで行けば会えると思つてたんだけど、それ以来一回も会えなかったんだよね」

「母さんが仕事が忙しくなかなか動けなかったもので、その後オレが8歳の時にちよつとした事件に巻き込まれて、下半身不随になつてしまつたんです。オレはそれを治すために医者になることを決めました。母さんの治療は終わったけど、今度はオレが忙しくなったものですから、なかなか遠出する機会がなかったんです」

「世の中って狭いのね。でもなんでジンはこつちの世界に来たの？」

「オレの父さん、オレが生まれてすぐ事故で死んだらしいですが、父さんが地球の出身らしく母さんが親戚に挨拶に来たんです。オレはそれにくつついて行っただけです」

「ごめんなさい。知らなかったとはいえ・・・」アリサが謝る

「父のことですか？気にしないで良いですよ、オレも覚えてるわけではないんで実感わかないんで。ちゃんと父代わりみたいな人はいましたし」ゼストの事を思いながら言うジンの表情はどこか辛そうなものだった。ジンは3人とは違う方を見ながら言ったので顔自体は見られてない

「そう、なら気にしないわ」

「切り替えの早い事は良い事ですよ。どんな職場についても重宝されます。」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

「普通に褒めてます・・・あ、照れてますね？すずかさん、これもツンデレですね。ちょっとわかったような気がします」

「うん。これはなかなか判りづらいところだよ。よくわかったね」

「そこ！本人を前にして変な会話すんじゃないわよ！」

「すみません・・・わざとです」

「ムキイイイイ！！」アリサの臨界点が突破した

「ジン、そう言うの良くないよ。すずかも。・・・でも結局ツンデレってなんなの？」アリサを抑えながら、疑問に思った事を口にするフェイト

「アリサちゃんの事だね」

「そうですね。アリサ・バニングスとかいてツンデレと読むくらいのレベルです。彼女のためにあるような代名詞でしょう」

「そうなんだ。かわいいって事かな？」天然なフェイトの対応がまぶしかった

「それで良いと思います」「うん」オレとすずかの同意にフェイトは良かったと思い一息ついた。アリサはもう何も言わなくなった。これ以上反応してもまた弄られるだけだという事を理解しているようだ

ある程度話も終わったのでそろそろ寝ようと思わずか達の部屋を後にする。フェイトも一応子供たちの様子を見るためについてくるようだ

子供部屋に着いたが何か騒がしい。何かで盛り上がっているのかなと思いながらも、二人で部屋に入る

「随分盛り上がっているようだけど、なんか面白い話題でもあったのか？」

「あ、お兄ちゃん。・・・お兄ちゃんからも言っただけで、お兄ちゃんの方がフェイトさんよりもすごいって！」ルーが珍しく気合が入っている。その気合の入り具合にちよつと引いた

「フェイトさんの方がすごいよ」「そうだよ」エリキヤロも応戦

「ええ〜っと何の話かな、ルーテシアさん？」

「私がお兄ちゃんの事がすごいつて教えてたら、エリオとキャロがフェイトさんの方がすごいつて言うから……」

「ちよつと言い合いになったと……意外にルーも子供だな〜」
二人随分仲良くなれたようで良かったと思うが、言い合いまでするとは……しかもその内容が自分を擁護するもの……ちよつと恥ずかしい

「子供だもん」プイっと顔をそむけるルー

「フェイトさんからもルーちゃんに言つてあげてください、フェイトさんの方がすごいって！」キャロも気合が入っている

「え、あの、うん、その」普段見ないキャロをみて困惑するフェイト。ここで助け船を出そう

「それじゃー三人に聞くが、何をもってすごいと言えると思う？ 戦闘か、頭脳か、はたまた別のものか？」

「よくわかんない」「僕も」「私も」子供に出すような問題ではなかったようだ

「ハハ、悪かったな、まだ難しかったな。でもこれだけは覚えておいてくれ、すごさにはいつぱいあるんだ。だから、他人と比べたって仕方がないってことだ。人のためになるならどっちがすごいとか関係ないだろ」

「うん」「はい」「はい」どうやらわかってくれたようだ

「でも、お兄ちゃんとフェイトさんならお兄ちゃんの方が強いよね？」前言撤回、あまりわかってくれてないらしい

「フェイトさんの方だよ」「そうだよルーちゃん」

「オレの言った事がわかってもらえてないようであれだが、戦闘だ

「だったらオレが負けるんじゃないかな。オレどちらかと言うとサポーター派だし」

「ほらルーちゃんのお兄さんだってそう言ってるよ」

「お兄ちゃん……」嬉しそうにするキャロにちよつと泣きそうなルー。子供特有の優越感だろう。ルーを悲しませるのはあれだが、下手に何かを言ってフェイトと戦う事になる事になったら目も当てられないのでここは黙っておく。すまんルー、意気地のオレを許してくれ

そんなこと思っていると事態を悪化させる天然さん登場……空気
ヨメ

「そんなことないと思うよ、ジンはなのにも勝つくらいだから、私だって勝てないかもしれない」

その言葉を聞いてルーの顔に笑顔が戻った

「それじゃーどっちが強いの？」ルーが聞いてくる

「ちょっとわからないかな。やってみないと・・・」危ない発言をするフェイト・・・バトルマニアか！

「いやいや若くして本局の執務官になれるほどのハラウンさんに一般局員のオレが勝てるわけないじゃないですか」。冗談はよしてくださいよ、ハツハハハ」

「ジンだって小さい頃に医務官になったんでしょう？私と変わらな
いよ」

「何をバカなこと言ってるんですか？医務官と執務官では戦う場所
が違つてしょうが」

「でも、なのはにだって勝つたし」

「あれもたまたまですよ」

「お二人が戦えばいいんじゃないでしょうか？」何とかごまかそう

としてるのに、エリオが余計な事を言う

「ちょくつとエリオ君、お話しようか？主に君の空気の読めない事に関して。大丈夫きつちりとわからせてあげよう」オレの表情をみてエリオが後ずさるが、その前にフェイトが立つ

「ジンでも、エリオをいじめると許さないよ」

「何を言ってるんですか、オレは男として空気の読める男にしてやるうと・・・」

「ジン勝負だよ！」

「話を聞いてください」

その後説得を試みようと奮闘したが、親バカっぷりを発揮したフェイトには何を言っても通じず、子供の方を懐柔しようたしもフェイトが阻止して結局模擬戦をする事になった。その話がアリサ達にもバレたため、明日その模擬戦を観戦するらしい。しかも迷惑がかからないようにバニングス家が所有する何もない無人島のようなところで戦う事となった。模擬戦が決定してからアリサが驚くべき速さで場所を抑え、フェイトがリンディに封鎖領域を展開してもらった

束を取り付けた。管理外魔法使用はダメじゃないのか？オレが言えた義理じゃないけど・・・

どうやらリンディが許可を取り付けたようだ。恐るべしハラオウン一家

- - - - -

翌朝、起きたら船の上にいた。正確には船の個室にあるベット。オレが寝てる間にアリサが運んだらしい。驚かせようとしたらしく、丁寧な睡眠薬まで嗅がせて起きられないようにしてまでやる仕込みっぷり。どんだけ

とりあえずムカついたので不貞寝。なぜかルーがオレの上で寝てたが気にしない事にする。その光景を見たアリサからロリコン疑惑をかけられたが、

「家族愛ですけど、何か問題がありますか？まさか、バニングスさんは家族に欲情するんですか？・・・ちよつと近付かないで貰えませんか、ルーの教育に悪いので」と言ったら烈火のごとく怒りだし鉄拳を振る舞う。からかい過ぎるのも考え物だなーと思いながら意識がおちて行った。

次に目覚めると船が到着していた。海鳴市はまだ寒かったがここは

非常に暖かい。プライベートビーチらしくお金持ちのすごさを改めて痛感した。

「それで、いつからやるんですか？」

「ジンが準備できればいつでもいいよ。母さんもいつでも良いって言ってるし」

「それじゃあ、あと5年位待ってもらえます？それくらいには準備できると思うので」

「うん、わかった……っジン！また人をからかって」

「いや、割と本気なんですけど……」

「もう準備できてるなら、外に行くよ。みんな待ってるから」そう言われてフェイトに引っ張られながら外に向かうのだった

- - - - -

審判はリンディさんがしてくれるらしい。すでに封鎖領域も展開されているので仮にこの島に人が来たとしても問題ないだろう。アリスとすずかは魔力がなかったのでリンディが少し調整して二人だけ中に入れた。なかなかすごい能力である

「それじゃー始めましょうか。ルールは撃墜されるか、戦闘不能になった方の負けと言う事で良いわね」

「あゝ一つお願いがあるんですけど・・・」

「何かしら？」

「この戦闘の記録を残さないで欲しいんですけど。すぐに負けてしまいそうなので、そんな恥ずかしい映像が残されるのはちょっと・・・」

「わかったわ」

少し考えたようだがリンディが了承してくれた。実際そんな理由で言ったわけじゃない。基本的に自分の戦闘記録が残されるのはジンのとって良くないため、この提案をするしかなかった。リンディが本当に記録しないとは思っていないため、ファントムを使って撮影機材にハッキングをかける。仮に撮影されようともこっちで勝手に消せるし、どこかに送られようとしてもファントムが阻止するのでこれで問題なく戦える。あちらがこちらのハッキングに気づいたとしても言質をとったのでなんとでもなる

「それじゃ、始め！」リンディの合図で試合が始まった

まずはフェイトがこちらに突っ込んでくる

「ハアアア」形態をアサルトフォームにして鎌をを振り上げながらこちらに来る

さすがにそんな簡単に接近を許すわけにはいかないの、牽制弾を撃って足止めしている。ファントムの形態はワンハンド型。第二形態がトゥーハンド型。第三、四形態もあるがここでは使わない、奥の手は見せないのが普通だ

自分の足元に数発撃ちこまれたため、フェイトも減速。こちらの様子をうかがいながら近づいてくる。

「接近してしまえば勝てると思ってます？甘いですよ。オレがそんなこと許すわけじゃないですか。ファントム、シルエツト」
そう言って五体ほどの分身を出す

「オレの能力は以前説明しましたね？フェイクだと思って甘く見るとケガしますよ？」

「知ってるよ。甘く見るつもりはないし、油断もしない。それにジンの全力を私は知らない」

「オレはだいたい知ってるんですけどね。有名人ともなると戦闘記録が残っているのだからあなたの戦闘パターンは分析済みですよ。さすがに全力まではわかりませんが、予測はつきます。先に言っておきますが早さが主体の相手ならオレにとって相性は最高ですね。オレ的に一番相性が悪いのは高町さんですから」

「その手には乗らないよ。こつちを焦らそうとしても無駄」

「残る念、高町さんなら簡単に引つかかるのに……。でも嘘に聞こえる本当っていうのもあるんですよ」そう言つと自分の分身をフェイトの周りに転移させる

「クッ、でもこれくらいならなんとでもなるよ！このシルエット自体は少し頑丈つてただけなんだから」そう言つて自分の正面のシルエットに斬りかかり、そして斬りつけた……。がしかし

「キャー！！」フェイトが切りつけた瞬間シルエットが爆発した。その反動でフェイトが吹っ飛ぶ

「高町さんのとの模擬戦を見て判断したんでしょうが、少し不注意ですよ？オレの能力は魔力を爆弾に変えられるんです。シルエットだって例外じゃない」

「……。でも、これでシルエットから離れた。今度はこつちの番だよ」そう言つてソニックムーブでこちらに近づこうとするが

「甘いですね」フェイトが突っ込んでくるところにシルエットを移動させ防御する。接近戦主体の魔導師封じの鉄壁の防御。自分から近付いて攻撃するタイプの魔導師は攻撃しないとダメージを与えられない。しかし攻撃した相手は爆発するとなると攻撃もできない

「あなたは速さが売りなんだろうが、そんな物オレには無意味です。早く動いて消えたように見えても、実態はあるのですからオレまでは届きません」

「私にだって射撃魔法くらいある！ハーケンセイバー」フェイトから斬撃が飛んでくる

「ご苦労様です」そう言う間魔法陣が登場しハーケンセイバーを吸収してフェイトの間後ろに転移させる

フェイトも魔法陣が出た段階で素早く反応し自分に向かってくる攻撃を回避する。が急な回避で態勢が崩れる

「そろそろお終いにしましょう。これでチェックです」魔力弾を5発フェイトに向かって撃ち、シルエットも特攻させる

フェイトも何とか回避するが次に来たシルエットへの対処が間に合わない。自爆覚悟で魔力弾を放ち誘爆させようとするが、今度のシルエットは爆発せずに魔力弾はそのまま通り抜けた

「チェックメイト」虚を突かれたフェイトは転移で後ろに回り込んだジンに反応できず頭に銃を突きつけられたので敢え無く降参となった。

- - - - -

フェイトとの模擬戦も終わり観客の所へ戻る。ルーは大喜びでエリオとキャロは驚いた様子、リンディに関しては表情に出さないようにしているが何か考えている

「二人ともお疲れ様。すごかったよ」さすがが労いの言葉をくれる

「そうね、フェイトに勝てるとは思わなかったけど、あんた意外とやるじゃない」ツンデレ

「ホントね。フェイトはかなり強い方なんだけど、簡単に勝ってしまっただわ」リンディ

その後子供たちからも同じような感想を貰った。ルーだけはやけに褒めちぎっていたけど・・・

フェイトにも同様に労いの言葉がかけられているようだが、簡単に倒されてしまっただうやら落ち込んでいるようだ。面倒なので励ましたりはしないのだが・・・

「ちょっと良いかしら？」リンディに呼びとめられる

「何ですか？」

「あなたの魔法について聞きたい事があるんだけど・・・」

「ノーコメントで。魔法技術に関しては個人の判断で情報を提供もしくは遮断ができるので、こちらからお教える事はありません。撮影がされてない以上オレの情報は漏れませんし」

・ 「そうね。仕方ないわ」簡単に引き下がるリンディ、この感じだと・

「ちなみにあなたが約束を破ってこの戦闘を撮影してる場合があるので、こちらで撮影機材にハッキングしたのでたとえ記録されてても消去済みです。同様に情報を送ろうとしても無理なのであしからず」

「え!？」

「その反応をみると、やはり撮影していたのですね？地上の戦力でも調べようともしましたか？そう言う事をやってるから本局の人は嫌われるんですよ。約束を守らないのは人として最低です」

「……」ニコツとして表情を崩さないが、逆にそれが無様に見える

「休暇中なのであれですが、上官の方に失礼な事を言っすみませんでした」

「いいえ、こちらに非があるようだし、今は休暇中なので問題ないわ」

「そうですか、ではこれで」そのまま去っていくジン。リンディはジンに不信感を抱かせただけだった

第18話　もう一人の告白と友達の定義

模擬戦が終わったので、折角プライベートビーチに来たのだから泳いで行こうとアリサが提案した。というかもともとそのつもりで来たらしい。

泳ぐなんて疲れる事をしたくないので、水着を持って来てなどいないという理由でコテージで休ませてもらおうかと思ったが、さすがはお金持ち、全員分の水着を用意してあるとのこと

子供たちは昨日に引き続きはしゃいでいるようで何よりだが、こっちは疲れるような面倒なことはしたくないのだ。だから、模擬戦での疲れが出たと言って休もうとしたが、アリサが大して動いてないじゃないと発言、その言葉を聞いてフェイトがぶつぶつと何かを言いながら落ちこむ

すずかはずっとニコニコしてるだけだが、助けてくれる気はないようだ

仕方なく水着に着替えてビーチに向かう。すでに子供たちは全開で遊んでいるようだ・・・若いていいな

ビーチに来たのは良いのだが、いかんせん、泳ぐ気が全くない。疲

れることは基本的に嫌いなのだ。でも、ただボくっとしてるのもあれなのでサンドアートでもすることにした

・・・・・・30分後

「意外と大作になってしまった。適当に作ろうかと思ったけど、一度凝ると妥協できなかつたな」

そこには等身大高町なのは（魔王バージョン）が立っていた。他を圧倒するほどの威圧感。どうやって砂で表したのかわからない目の色。ハイライトが消えて無表情となっている。魔王の愛機、レイジングハートまで精巧に作られている

子供たちが見たら真っ先に逃げ出すであろう代物が出来上がってしまった。これはもうこの島の守り神としてここに置いておこう・・・

- ・魔力で強度を保ちジンはその場を後にした

・・・その後ジンの作ったサンドアートは子供たちに見つかり、キャロが号泣。エリオも膝が震えていた。ルーに関しては何とか持ちこたえたようだ

フェイトは作った犯人であるオレの所まで来て説教を開始。子供たちを脅かしてしまった事が問題らしい。ちなみに出来を聞いてみたところ、フェイトが震えだした。どうやら何かトラウマを抉ってしまったようだ

他の人たちの反応もあまり良くなく、

すずかは「上手だけど、なのはちゃんじゃないよ」ホントの姿を知らないとはなんて幸せなことだろうか

アリサには殴られた。こうなったら本人に聞くしかあるまい、とりあえず大作を撮影してなのはに送る。面白そうなのではやとりインにも送っておいた。タイトルは「魔王降臨」……芸術大賞でもとれるんじゃないだろうか？

……しばらくしてメールが届く

はやて「ハアハハ、最高やわ！自分随分とうまく作ったな。ただ、これがなのはちゃんにバレたらスターライトブレイカーやな」最後にサムズアップマークまでつけて送ってくる———なんだと！？

リン「うう、ジンさんのバカ！少し怖くて泣いちゃったじゃないですか（あ、これは皆には秘密です）この写真のせいで空港火災の時のことを思い出しちゃったじゃないですか！あの時リンが止めてなかったら二人とも海に散っていたのですよ！・・・今日はやてちゃんと一緒に寝る事にします・・・夢に出てきたら恨みます」

リンにとって呪いのビデオ的なものになってしまったらしい。この写真が他の人に回ると「オレ」が殺されてしまうかもしれないのすぐに消去するようにと返信しておいた

そして最後になのはからのメール。メールを開く前から汗が止まらない——しかし見なくてはならない、死ぬとわかっている戦場に送りだされる気分だ——いざ！

「ジン君、次会った時には・・・わかってるね？全力全開のスターライトブレーカーと全力全壊のスターライトブレイカー、どっちがいい？答える時は受けるか当たるかで答えてね？」最後のマーク以外女の子とのメールで出るものじゃないんだけど・・・会わないようにしよう、うん、オレの命のために——いや、いつそ見なかった事にしよう、そうすれば回避できるはずだ

恐怖のあまり返信するのを忘れて現実を直視できず、自分から死地

に行った事を深く後悔するのだった

- - - - -

自爆して、恐怖から精神的にガリガリ削られて、日頃の三倍以上疲れた。海でのバカンスもいったん休憩にしてどうやら昼食をとるようだ。豪華にバーベキューらしい。さつきからせつせと準備をしている。オレは基本的に料理ができるまで子供たちの相手だ

「ルーは楽しんでいるか？」

「うん、お兄ちゃんが変なの作らなきゃもっと楽しかった」

「ウツ、でも実際そっくりだから！自分でもビックリするくらい
の出来だ」

「フェイトさんからなのはさんの写真見せてもらったことあります
けど、全然違いますよ」エリオの空気ヨメない発言

「黙りなさいKY。お前は真の高町なのは知らないんだ！あの人は普段の状態からあと変身を2つ残している。」

「変身するんですか！？」キャロが驚きの様子で聞いてくる

「ああ、第一段階がノーマルなのはとするなら、第二段階が高町なのはversion悪魔、そして最終形態がああ魔王だ」

「うつつ」キャロが思い出したのかまた泣きそうな顔をしている

「ああ、泣くな。大丈夫だ、魔王には弱点がある」

「な、何ですか？」エリオが聞く

「頭が弱いんだ、残念なくらい。倒すなら頭を狙え。」

「頭ですか？」

「ああ、でもお前らもちゃんと勉強しないとだめだぞ。最近相手も

頑張っているらしいから」

「勉強？・・・でも勉強すれば倒せるんですね？なら僕頑張ります」
「私も」勘違いした二人が一生懸命勉強しているのを見てフェイトが困惑するのはまだ先の話。そもそもなのは倒すことが前提になっている

「ああ、頑張れ。だが無理はしちゃダメだぞ。わざわざこちらから仕掛ける必要はない。下手に出てご機嫌をとり、戦わないというのが一つの手だ。あの人は魔王だが、一応誇示がある、子供相手に突っかかりはしないだろう」

「わかりました。でもいざという時のために勉強はしたいと思います」エリオとキャロがなのはに對してかなりの偏見を持ってしまっただが、これも未来ある若者のために仕方ないことだとここに記述しておく

「ちなみにほとんど嘘だね？お兄ちゃん」二人に聞こえないようにルーが話しかけてくる

「ああ。でも本当の事も混ざってる。魔王であるのは事実だし頭が弱いのも事実だ。ただ話をすこし誇張しただけだよ、問題ない」

「問題あると思うけど・・・」その後ルーがなのはに普通に話しかけているのを二人が見て慌てて謝らせようとしたのも先の話である。

――――

その後ずか達が用意してくれた昼食を終え昼休みとなった。結構な量だったのだがほとんどをエリオが食べつくしたのは正直引いた。あの小さい体のどこに入るのだろうか？少し調べてみたいと思った。

今は外に出されたイスに座って本を読んでいる。そこにフェイトがやって来た

「ジン今いいかな？」

「見てわからないんですか？読書中です。お静かに」

「う、うん、ごめん・・・ってそうじゃなくて話があるの」

無視して読書をしようとしたが、どうせ後で聞かれるので話を聞く

ことしに本を閉じた

「で、何の話ですか？」

「さっきの模擬戦の事なんだけど……」

「反省会ですか？そんなの一人でやってくださいよ。オレ自分の手の内を明かすの嫌いなんですから」

「ごめんね。でも、どうしてあんなにあっさりと負けたかわからなくて……」

「……ハア、それ話したらもう良いですか？」

「うん」

「理由はいくつかあります。まず第一オレがあなたの情報を知っていた事。相手の戦闘スタイルを知ってるのと知らないのでは大きく違います」

「うん、それはわかってる」

「次にオレとあなたとの相性です。これは模擬戦の時にも話しましたが近接主体の人はオレにとって相性のいい相手となります。普通遠距離型のタイプの人は相手の接近を許さずに勝つ方法を考えます」

「うん、なのはなんかは接近されても対処できるけど、はやてなんかは遠くから攻撃するね。」

「まああの二人は魔力値が高いのでそれで良いんですが、オレはあの二人よりも魔力値低いですから遠くから攻撃してもスピードを得意としてる人には回避されてします。そうなると魔力切れを起こしますから、普通ならオレとあなたの相性は逆転するんです。高町さんみたいに弾幕を張って相手の動きを封じることができませんから」

「でも、私とジンの相性はジンにとって良い」

「そうです。オレは近代ベルカ式なのに剣や槍を持つての近接が得意ではありません。なのでベルカ式には珍しい遠距離型なのですが、
・この事は他言しないようにお願いします」

「うん」

「オレは砲撃系の魔法が一切撃てません。収束することはできませんがそれを放てないんです。」

「……」黙って聞くフェイト

「でもオレにとってそれは大した問題ではありません。なぜなら……」

「レアスキル」

「そうです。収束はできるのですから後は爆破させれば立派な武器になります。使いどころは難しいですが……」

「そうだね、爆発は範囲が広いから」

「だから基本オレはバインドなど使って捕獲、その後爆破で大抵勝ちます」

「捕まってしまったら、なかなか防げないもんね。なのはは防いだみたいけど」

「まああれは手加減したというのかもしれませんが、基本は捕えてさえしまえばオレの勝ちです。しかし・・・」

「私のようにスピードを重視するタイプは捕えるのが難しい」

「そうですね。ここまでだと、完全にあなたは天敵なのですが、オレは後方支援系の魔法がすごく得意なんです」

「それは知ってる。医務官だから回復系はもちろん、転移、幻術といろいろ出来るもんね」

「はい、だから、何もバインドにこだわる必要はないんですよ。転移で後ろを突いても良い、幻術を接近させて爆破しても良い。オレは戦闘技能で戦うのではなく、いかに相手を自分のフィールドで倒すかを考えます。あなたのように遠・中・近すべて兼ね備えるオーラウンダーではありませんが、自分の場に引きずり込めば関係ありません」

「私の砲撃では貯めが長くて撃たせてもらえない。射撃魔法でも転移で送り返される。かと言って接近しても爆撃されるだけ」

「そう言う事です。八神さんみたいに広域殲滅なんてされたらそれこそ逃げるだけです。接近主体で防御力の薄い相手ではオレは負けません。あなたがオレに勝てるとしたら、オレより早く魔法を發動し一気に叩くしかないですね。そんな事させませんけど」

「ジンの短距離転移の方が私より速いもんね」

「そうですね、あなたは消えたかのように見るぐらいのスピードなんでしょうが実態はありますので壁を用意すれば突破はされません。オレは点から点に移動してるので実際に消えてるんです。速度の領域であなたに負けるとは思いません」

「だから、私ではジンに勝てないと・・・」

「ええ、大体そんな感じです。場所が変わればまた別なんでしょうけど・・・」

「どうすれば勝てるかな？」

「どんだけ勝ちたいんですか？・・・まあ高町さんのように防御が硬く砲撃に特化してれば勝てるんじゃないですか？あなたはあの人

と違って頭の回転が早そうですし、簡単には倒せないでしょう。チエックをかけるまでに何手必要になるかわかりません」

「無理だよ」

「だったら弱点でも探してください。オレにだって弱点はあります・
・教えませんか」

「うう。イジワル！」

「自分の弱点を人にさらすなんてバカのある事です。ちなみに高町さんの模擬戦の時、オレの魔法の説明をしましたがかかなり嘘が混じってますんで」

「ウソ!？」

「冗談ですよ。ホントかもしれないけど・・・オレの言葉はなるべく信用しない方がいいですよ」

「うん。でもそれじゃーさっき言ってた砲撃ができないっていの

も・・・」

「さあどつちでしょっ?」

「ジーン」。嘘は良くないよ」

「ホントかもしれませんが? 答えは神のみぞ知るってやつですね」

「ハアゝもう良い。だけどこれはちゃんと教えてジンの魔力ランク
って何なの? ジンくらい強かったら結構有名になると思うんだけど
・」

「空戦Cランクです」

「ジンまたそうやってウソついて!」

「これはホントですよ、疑うんでしたら管理局のデータベースで探
してみてください」

「うう、ジンが何を言っても嘘にしか感じない」

「じゃあ別に信じなくても良いです。」

「ウソだよ、信じるから！・・・何でジンはCランクのままなの？」

「忙しくて試験を受けなかったというのがありますが・・・」

「が？」

「オレの戦い方の問題です。ハラウンさんはオレの戦い方をどう思いますか？」

「そんなに見た事があるわけじゃないから、なんとも言えないけど、勝つ方法を取ってるって感じがする。私やなのはだってもちろん勝つ気でやってるけどジンみたいに深くは考えていないと思う」

「まあ貴方達には魔力がありますから、当然と言えば当然なんですけど。・・・それでオレの戦い方は管理局特に本局の人たちには嫌われる戦い方です。いかに相手を畏にはめるかに重きが言っているので正義を謳う本局の方には理解されない事が多いんです。セコイとかそれでも管理局員か！みたいなことを言われたこともあります。そんなオレが試験を受けると色々言われるんで、めんどくさいから受けただけです。幸い医務官としての階級があるのでそこまで昇進にこだわりませんし」

「で、でも」

「言いたい事はわかりますが、実際魔導師ランクなんて昇進を目指してる人以外には邪魔なものでしかありません」

「え？なんで？」

「相手に自分のランクがバレているんですよ？対処されてしまうじゃないですか。仮に敵対する組織がいたとして、こちらを襲う計画があったとします、その場合自分のランクが知られているという事は敵の人数も決まるという事です。自分と同ランク、もしくは自分

「よりもランクが低いけど人数が何倍もいるなんて状況になりえます。」

「そうだね。」

「後はリミッターですね。結局フルで自分の能力を使えなくなる事が多いので魔導師ランクが高い事は良い事ばかりではないということです。たしかに利点がありますが」

「利点？」

「1つは昇進。後は相手へのけん制です。こちらにはこれだけ強力な魔導師がいるぞ！という。でもこれも高町さんやあなたのような高ランクの人でしか意味を為さないです。」

「でもジンなら高ランク魔導師になれると思うけど・・・」

「オレは貴方達のようにバトルマニアじゃないので好き好んで戦いにはいきません。オレにとって魔導師ランクなんて枷でしかないですよ」

「私はバトルマニアじゃないよ！」

「寝言は寝てから言ってください。人の話を聞かずに模擬戦をしようとしたのはどなたでしたか？」

「うっ」

「自覚がないなら早めに自覚してください。自覚のないバトルマニアほど面倒なことはないのですから」

「……う、うん。……それとも一つだけ聞いていいかな？」

「・・・何でしょうか？」もう話終わりだと思った矢先に話を続けられ心底嫌そうな顔をするジン

「その顔は傷つくよ・・・遊園地の事なんだけど」

「企業秘密です」

「私知ってるんだ。ジンとすずかが何を話してたのか」

「は？」

「ジン少しだけ魔法使ったでしょう？バルディッシュが反応してね、それで気になってサーチャーを飛ばしてみたんだ」

「・・・サーチャーか、あの時は周りに注意を向けてなかったからな、気づかなかった」

「うん、私もジンやすすか達を見つけた後気付かれないようにしていたから」

「盗聴は犯罪ですよ」

「それを言うなら管理外世界での魔法行使もそうだよ」

「こちらから言わせてもらえば人助けです。どちらかというと興味本位で魔法を使ったあなたの方が問題あるのでは？」

「ううん」やはり口ではジンに勝てない

「・・・もしかして提督にバレています？」

「ううん。母さんには言っていないよ。母さんはデバイス持ってきてないから気付かなかったみたいだし」

「それは良かった。あの人は何かとめんどくさそうなので」

「娘を前にして言う言葉じゃないよ」

「これは失敬」

「ハア、まあいいけど。・・・それでずか達の事なんだけど」

「ご本人に聞いてください。その内話すって言っていましたから」

「うん、それは良いんだけど、ずか達に言った事ってホント？」

「とうとう？」

「人間であるかどうかは関係ない、人であれば良いって事」

「本当です。なんですか？人間じゃなければダメみたいな発言をするタイプですか？嫌いですよ、そう言うの。個人の自由なので強制はしませんけど、すずかさんが悲しみますよ」

「ち・違うよ！私だってそんなこと気にしないよ。・・・ただ」

「？」

「私も普通の人間じゃないから」

「へえ、実は魔王の生まれ変わりとかですか？魔王はあの人だけで十分です」

「なのはに言っちゃうよ」

「ごめんなさい。それであなたが普通ではないとおっしゃいましたが、そんなの知ってますよ」

「え!？」

「だってリンカーコアなんてあるんですよ、オレもそうですけど、普通じゃありません」

「確かにそうなんだけど・・・私のはもっと違うの・・・」

「言い辛いんなら言わなくても結構ですよ。すずかさん達にも話してないんでしょう?」

「うん。なのはとか母さんは知っている事だけど、ジンになら良い…むしろ知って欲しい。当然その内すずか達に話すけど」

「オレ的には聞きたくないんですけど・・・聞いた事で何か不都合な事が生じますか?」

「うっん、何もないよ。ただ、私の事が気持ち悪くなるだけ」

「なら大丈夫です。あと内容にもよるので後者に関してのコメントは控えさせてもらいます。実は高町さんと結婚して子供がいるんですとか実は男でしたみたいながあつたらちよつと反応に困ります」

「……実は」ジンのコメントを普通にスルー

「私クローン人間なんだ。人の手によって作られた人造魔導師なの」

「へえ、それは随分とすごいですね。クローン技術はなかなか問題があり短命と聞きますが、あなたを見る限りそんなことはなさそうですね」

「うん、検査でも問題ないって言われてる。……嫌だと思わない？」

「嫌だと思われないんですか？」

「え？」

「あなたは人造魔導師としての自分に何か思うところがあるようですが、そんなこと大した問題ではないのです。むしろ医学的な見地から見れば素晴らしい事です。母体が弱くて子供が産めない母親に自分の遺伝子を持った子供授ける事が出来るのですから。確かにクローン技術は臓器移植用に作られたり、死んだ子供の代用など様々な面で問題がありますが、それは使った人の問題で生まれてくる子供に罪はありません。子供は生まれ方を選べないわけですから」

「・・・」

「普通に産まれたオレが言っても説得力はないでしょうが、それでも産まれたことには変わらないんです。オレの知り合いにもいます元気な育ってます。あなたが自分の事に負い目を感じるのは勝手ですが、自分と同じような子供達を否定するのはやめてください。いくらオレでもそれには腹が立ちますんで」

「やっぱジンは違うね。私の事を知った人も気にしないと言ってくれたけどそんな風に言ってくれる人はいなかった。母さんのことを褒めてくれる人はいなかったから」

「・・・提督がその技術を？」

「あ、ち、違うの。私の本当のお母さん、プレシアっていうんだけど、その人が私を造ってくれ・・・ううん産んでくれたの。もう死んじゃって会えないけど」

「ああ、だからテストロッサの姓があるんですね、納得です」

「私はもとと母さんの本当の娘アリシアのクローンとして生まれた。最終的には母さんに拒絶されたけど、やっぱり母さんは母さんだから、私はあの人の娘でありたい」

「随分とすごい人ですね。自分の娘のためにクローン技術まで生み出すなんて。よっぽどそのアリシアって子が好きだったんでしょう。でもそのアリシアは二度と戻らない事を気づかなかった。いくらクローンでもあなたとそのアリシアって子は全くの別人。その事に気づけば二人目の娘だったんでしょうね。アリシアとしてではなくフエイトとして見れば別の結果だったのかもしれないね。今更ですけど」

「ありがとうジン。やっぱりジンに話してよかった。これから私は自分の生まれにちよつとずつだけど自信が持てる。エリオもきっとそうなってくれる」

「ああ、あの少年もそうなんですか？そうするとキャラも？」

「キャラは違うよ。キャラはアルザスの龍の召喚士で強すぎる力のためにね……」

「追い出されてしまったと。人は異常を嫌いますからね……子供を守ってやるのが大人の責任でしょうに。」

「だから、私が保護責任者になつたんだ。」

「15歳で二児の母ですか、地球で言うとヤンママですね。髪も金髪ですし、ピッタリです」

「私はヤンキーじゃないよ！」

「義務教育の学校をサボっている人が何を言っているんですか？十分にヤンキーです。不良娘になってしまってお母さんも悲しんでいるでしょう」

「うっう」

「あゝあ、冗談ですよ、泣きそうにならないでください。ハラオウンさん仕事以外だと意外とポンコツですよ。すぐ泣きそうになるし、高町さんと子供が絡むと暴走するし」

「うっう」

「泣かないでくださいよ」

「じゃあ、フエイトって呼んで」

「いや何故に？」

「ハラオウンだと母さんとかお兄ちゃんと区別つかないよ」

「大丈夫です。役職をつければ問題ありません。それにハラオウンがダメならテストロッサの方を使えば問題ないです」

「でも、なのはは友達になるには名前で呼べばなれるって言うんだよ！」

「どんな理論ですか？ナンパしてきた人が名前を読んだら友達ですか？あの人いっぱい友達がいるんでしょうね。自分でなのははいよって言うてますもんね」

「で、でも、ジンは私と友達じゃないの？」

「まあ、違いますけど」

「ガーン」地面に両手両膝をついて落ち込むフェイト・・ort

「効果音を自分で言う人初めてみました」

「ジンにとって私って何なの？」

「まあ一応上司ですね。執務官がどれくらいの階級が知らないですけど」

「友達じゃないの？」泣きそうな顔をするフェイト

「どうなんでしょうね、オレには友達が少ないからわかりませんが、少なくとも今現在では違うのでは？すずかさんって例外はいますけど、あなたとの会話なんてほとんどなかったわけですから、知り合い程度が妥当でしょう」

「じゃあ、友達になつて！」

「嫌ですけど」

「ガガーン」また落ち込む

「やっぱ面白い人ですね。あなた個人と友達になる事は全然構わないんですけど、オプシオンとして魔王とか八神一家が付いてくるのがいただけないです」

「うっ」

「全くすぐ泣くのはやめた方がいいですよ。女の涙は安くないってメガ・又さんが言っていました。あなた安売りしすぎです、バーゲンセールですか？」

「……」そう言われて必死にこらえようとしてるが泣きそうである

「ハァ、オレなんかと友達になっても面白い事はないでしょうけど、それで良かったら友達になりましょう」

「え？」

「嫌なんでしたら構わないですけど」

「い、嫌じゃないよ！こちらこそよろしくジン」そう言って手を差し出す

「よろしくお願いしますハラオウンさん」そう言って握手をする

「・・・フェイトって呼んで。もう友達でしょ」

「無理ですね」

「うわあぁーん、ジンのバカ！！」そう言って泣きだして走り出したフェイト。それを見たアリサがとび蹴りしてきた事は言うまでもない・・・普通に避けたけど・・・顔面からの着地は痛そうだなと思った

第19話 魔王×帰還×それから

フェイトからの相談の後、子供たちは遊び疲れ寝てしまい。アリサはジンを殴る事に苦心し、色々と策を巡らせたようだが、逆にジンのトラップに引っ掛かってしまい、疲労困憊になって倒れた。

実はアリサが追いかけていたのはただの幻影で、本体は優雅にすずかとティータイムを満喫していた。その事実を後で知ったアリサは烈火のごとく怒りだし本来のフェイトを泣かせたから殴るという目的を忘れ、ひたすらジンを追いかけた。

当然のごとくジンはまた幻影と入れ替わってアリサをからかう始末・・・鬼畜すぎる。アリサがようやく捕まえたジン（偽）に勝ち誇ったかのように色々言っていたところをビデオに抑え後ろからドッキリの看板を出しながら登場した時にはアリサの顔は真っ赤だった。その顔も撮影しアリサのツンデレ記録なるものを作っている（すずかと共同で）

「これは良い物が撮れましたね、すずかさん。タイトルは『ツンデレアリサここに有り』で良いでしょうか？」

「うーん、無難に『ザ・ツンデレ』とかで良いんじゃないかな？」

「あんな・たち…いい加減にしなさあああいい！！」

「アハハハハ」二人で逃げる。意外とすずかも人が悪かったりする。けどそこは長年の付き合いなのか基本的に怒りの矛先はジンの方向に当たっている。あ、またすり替わった

ひとしきりアリサを弄った後、疲れたのでコテージに有る風呂に入る。当然男女別に分かれているわけではないので、ちゃんと男子入浴中の札をかけて風呂場に入った。うっかりハプニングなど起こさない

まったりと風呂に浸かって、夕食まで休むことにする。子供たちは起き出して今は風呂場、フェイト達が洗っているようだ。6歳児だから男女一緒でもかまわないだろう。

子供たちが風呂から上がり夕食タイム。昨日に引き続きエリオの食事量には驚かされる…なんか見ているだけでお腹がいっぱいになる。その内エリオダイエットなるものができるのではないだろうか？スバルとギンガを入れたら完全に食欲が失せるだろう

夕食後はまたしても雑談会。ただジンは面倒なのでさっさと就寝。アリサに何か言われたがそれも幻影を使って逃れた……。魔法使い過ぎな気がする

翌日 ジンの休日も最後と言う事になり海鳴市に戻る。さすが達とは連絡先を交換、アリサの連絡先は拒否しようとしたが強引に交換された

遊園地での約束も有って高町家が経営する喫茶店でお土産を買ってからミッドに戻る運びとなった。なので今喫茶翠屋の前にいるが…
…入りたくない

あの恐怖の大魔王が接客してるのが見えてしまった。先日の一件もあり見つけたら死ぬ可能性がある。早めに謝らなかつた事を後悔する

……。物陰に隠れ悩む事5分、ルーには呆れられてしまった。

ルーが

「魔法使えば良いんじゃ……」それだ！何も自ら死地に訪れる必要はない。そう思ったら行動は早い、周囲に人がいない事を確認しシルエットを発動する。――管理外世界で魔法を使い過ぎな気がするが命には代えられない

準備も整ったので翠屋に入る（偽ジン）

カラン／＼コロン

「いらつしゃいませ……あ、ジン君」なのはがこちらに気づいたようだ

「いらつしゃいジン君、それにルーテシアちゃん。約束通りサービスするよ」士郎もこちらに気づいたようだ

「それでは遠慮なく。ここで食べれる用のケーキをルーの分お願いします。あとお土産にシュークリームを20個程ください」

「20？それはまた随分と多いね」そんな事を言いながらも厨房にいる桃子さんに注文を届けに言った。

その間に、ルーと席に座り待つ事にする。当然なのはが来るのだが、接客中と言う事もあり、すぐに注文を取りに行った。あとはシュー

クリームが出来上がるのを待つ　早くしないと死んでしまう。休憩時間にでもなったらオレの命が…

シルエツトなのに汗をダラダラ流しながら待つ。1分間がこれほど長く感じたことはない。神に祈るような思いで待っていたのだが、どうやら神様はオレの事が嫌いらしい

「なのは、そろそろ休憩でもしなさい。あつちでジン君と話してくと良い」おお神よ、私はあなたに嫌われるような事をしましたか？

「ありがとう、お父さん。」なのはが笑顔だ……。それが逆に怖い。トコトコとこちらに近づいてくる。その足音が死刑判決を待つ罪人の心境を思わせる

「ジン君、ここ良い？」

「良くないです。今ルーと家族の団欒をしてるので、できれば遠慮してください」

「別にいいよ」

「ルーさん!？」まさかのルーからの攻撃

「ありがとう。え〜っと」

「ルーテシア・アルピーノです。」

「私は高町なのは。なのはで良いよ。よろしくね、ルーテシアちゃん」

「はい、いつもお兄ちゃんが世話になってます」地球に来た時とはえらい違いで、緊張せずにルーは挨拶する。とても6歳児には思えない挨拶だ。兄的ポジションにいるオレとしてはうれしい限りなのだが、いかんせん今はその優秀さが憎い

「ジン君が言ってた通りしっかりしてるね」

「ハッハハハ、自慢の妹分ですから。学力だって高いんですよ」こっとなったら昨日の話に持って行かせないようにする。自分の頭の残念さを悔やむと良い!

「ハハ、そうみたいだね。それでジン君昨日の事なんだけど」
N〰〇〰ん。なぜ今日に限って釣られない。この後テストの話に持って行こうとしたのに！オレのバカ、最初からその話題を振っておけば良かった

「ええ〰つと何かございましたか？昨日は何分、ツンデレさんに追われてまして大変だったんです。だからあまり昨日の事は覚えてないんですけど」

「ジン君？」目のハイライトが消えて声に抑揚がない。しかもルーには見えないようにしている。なんという周到さ、これではルーを引き合いに出して逃げることもできない。

「昨日は申し訳ありませんでした。溢れる創作力を抑えきれなかったんです。」

「ふ〰ん、そうやってまだふざけるつもりなんだね？いいよ、それなら……」

「ウソです！冗談です！ごめんなさい」必死に頭を下げる

「もう！初めから謝ってくればいいの！女の子にああいう事やっちゃダメって前にも言ったでしょ。今頃の女の子はすごく傷つきやすいんだから！」

「すみません」女の子？みたいな顔をしてしまったが、一応謝っておく

「何？その顔は！私だって傷つきやすい女の子なんだよ！」

「……はい」

「だ——か——ら、その間はなんなの！ジン君は一体私の事どう思っているの！？」

「魔・・・いや、ちょっと無茶しがちな元患者さんですね、はい。」

「最初の魔は何？しかもその後取ってつけた言い方はなんなの！」

「他意はありません」

「……ハアゝもういいよ。ジン君は変わっちゃったんだね。昔はもう少しかわいかったのに……」

「昔の話ですね。それに昔を語られる程あなたとは親しくはないです」

「うっ」

「昔は医者と患者。今は上司と部下の関係です。それ以上でもそれ以下でもない」

「友達じゃないの？」

「違いますね」

「ガーン」

「その反応はもう見たので面白くありません。ネタがかぶるのは芸人として失格ですよ」

「私芸人じゃないもん！普通の女の子」

「寝言は寝て言ってください。あなたが普通だったらむしろ異常が何なのかわからなくなります。普通っていうのはルーとかすすかさんみたいな人を言うんです。けしてツンデレや魔王ではありません」

「ま、また、そうやって・・・うつうつ」

「あんまり家のなのはを泣かせないでくれるかな？」苦笑いしながら土郎が話に入ってくる。どうやら代えのコーヒーとジュースを持って来てくれたようだ

「泣かせてるつもりはないんですが、いつも事実を言つと取り乱すんです」

「事実じゃないもん！」

「ここであなたの武勇伝を語れと？……わかりました、直接見たものは空港のみですが、聞いた情報をもとにわかり易く解説してあげましょう。いかにあなたが悪魔、魔王と呼ばれる存在か」

なのはが防ごうとしたが他の客にわからないようにバインドをかけて椅子に固定。その後なのはの武勇伝を誇張しながら士郎とルーに話す。

……しばらく経って

「なのは……」

「なのはさん……」

二人が遠い目をする

「これが現実です。受け入れてください」

「何勝手にまとめてるの！？ジン君が言ったのは話を誇張してるよ！」

「いえいえ、そんな事ありませんよ。実際オレとリインさんだって海の藻屑と消え果てるどころだったんで誇張というわけではありません」

「誇張だよ！」まあ最後以外は自分の主観がかなり入ったものではないが、断じて誇張ではない・・・はず

「あら？楽しそうね。」

「高町さんのお母さんも聞きますか？娘さんの武勇伝」

「ジン君、もういいの！」もうやめてという顔をして止めに入る。いつの間にかバインドも解いている

「聞きたいのはやまやまなんだけど、まだ仕事があるからまた今度お願いね。」

「わかりました。ネタを仕入れておきます。管理局にいれば勝手に入ってくる情報ですので」

「お願いね。・・・それでシュークリームの方なんですけど、注文の20個完成しました。袋にも詰めましたので、そのままお持ち帰りください」お客様用の口調に変えた桃子に少し驚いたが、こういうところははじめをつけてるのだろうと思いシュークリームを受け取って帰る準備をする

「ジン君、もう帰っちゃうの？もっとお話しようよ」不満そうにいうのは

「話してる暇があるなら、勉強でもしてください。すずかさんとも話しましたがあなたの成績は残念な感じらしいので。オレとの勝負に勝てませんよ？オレ的にはその方が良いでしょうけど…」

「うう、今勉強してるもん！見ててジン君のテストなんかすぐに合格して模擬戦してもらうんだから！」

「はいはい」 適当に流す

「そ、その余裕、ぜったい後悔させるんだからね！」

「はいはい」

「うう」 また泣きそうになるのは。 涙腺が限りなく弱いらしい

「それじゃーオレ達はこれで。 すぐかさんの家に挨拶してそのまま帰ります」

「そう言えば、さっきから思ってたんだけど、何でするかちゃんだけ名前で呼ぶの？私が何回言っても呼んでくれなかったのに」

「企業秘密です。」

「お兄ちゃんの初めての友達なんだって」ルーが横から言ってしまう

「ジン君……」

「誤解してるようですから言っておきますけど別に今回で友達になったわけではないですよ。小さい頃に友達になったんです」

「でもジン君ってミッド出身じゃないの」

「面倒なのですがかさんにも聞いてください」

とりあえずこれ以上いてもあれなのでするかの家に向かう。途中で本体と入れ替わるのも忘れない。あまり幻術を使った意味はなかったが、保険を掛けとく事は大事だ、万が一魔王が降臨したら軽く死ねる

- - - - -

月村家到着

すでにフェイトがいて準備してくれている。彼女もミッドに用があるらしく一緒に帰る事となった。エリキヤロはまだ地球にいるらしく、朝に別れを告げたので問題ない

「こちらも用が済みました。いつでも帰れます。ハラウンさんさんの方は？」

「こっちも大丈夫だよ。それからフェイトって呼んでって言うていいでしょう！」

「すずかさん、今回はここでお別れです。時間が取れたらまた来ますのでその時はよろしくお願いします」スルー！？とフェイトが何か言っているがここは敢えて無視しておく

「うん、またねジン君。でも連絡先を交換したんだから連絡くらいは欲しいな」

「はい、近況報告なんかはしたいと思います。それじゃ、元気で」

「そっちなね」

うっう 私だけ無視されてると嘆いてるフェイトを引っ張り転移ポ―

トに移動する。ルーはフェイトを慰めながらついてくる。

転移ポートが光出しミッドに戻った。ここでフェイトとも別れる

「今回はありがとうございました。おかげでルーにも友達ができました。」ルーの頭に手を当てながらお礼を言う

「うん。こちらこそありがとう。エリオとキャロもすごく喜んでくれたから、また会ってあげてね。もちろんルー・テシアも」

「時間が合えば」「はい」

「ではオレ達はこれで。ハラオウンさんは仕事以外ではポンコツなので気をつけてください」

「わ、私はちゃんとしてるよ!」

『……………』オレとルーが無言のアピールをする。ルーもこの3日間でフェイトのポンコツぶりが理解できたらしい

「うつうつうつ」

「もう、泣かないでくださいよ。こんな所で泣いているとオレ達が悪いみたいじゃないですか」

「悪く見えるのはお兄ちゃんだけだけど」

「ルーさん！？……随分と強かになっていませんか？」

「お母さんの娘だもん」

「微妙に納得です」この3日間でルーも成長を遂げたようだ。最初の初々しいルーはいなくなってしまうたんだな

「うつうつ」さつきから放置されてまだ泣いているフェイト

「フェイトさん、泣き止んでください」

「えー！？今ジン、名前で——」

「幻聴じゃないですか？現実と妄想のくらい区別してくださいよ。
イタイ子に見えますよ」

「ジン！今、絶対名前を呼んだよ」

「はいはい」

「もうっ！」

「それではお元気で。」

「さよなら」そう言って立ち去るオレとルー。後ろで何か言っているが無視だ。

――

ナカジマ家到着

なぜか全員集合する時はナカジマ家に集まる。クイントさんやナカジマ夫妻も仕事から帰ってきている。序に家の母さんも。ギンガだけ訓練校にいたのでいない。お土産はまたいつか買う事にしよう

「ただいま帰りました。メガー又さん、ルーも元気です」

「あら、ルーちゃんに手を出さなかったの？根性ないわね」

「オレはメガー又さんに言ったんだけど、歳をとると耳が遠くなるからな、それに正しく言葉を理解できなくなるぐらい知能が低下してしまったのか？病院で検査した方が良いんじゃない？母さん」

「フッフ、相変わらず先輩とジン君は仲が良いわね。それとルーテシアの事ありがとうジン君。ルーはお友達はできた？」

「うん。また会おうって約束もした。」

「それは良かったわね、今度はお母さんがルーのお友達に会いたいわ」へへとアルピーノ親子は楽しそうにやり取りをしている

「^{スバル}ワンコ、^{お土産}エサ買って来たぞ」

ドタドタと走りながら来る

「ジン兄なんか変に聞こえたんだけど――」

「^{スバル}どうしたワンコ？何か変なところがあるか？」

「やっぱり、なんか変。でも良いや、それよりお土産な？」

「お前の憧れのエース様の母上が作られたシュークリームだ。結構有名らしい。」

「え！？なのはさんのお母さん？」

「ああ、あの魔王とは違って優しそうな人だった。どうやったらあのような魔王が生まれてくるのか」

「もうっ、ジン兄！なのはさんはそんなじゃないって言っているでしょ！！なのはさんは強くて、優しくて、かっこいいんだよ」

「それは幻想だ。いいか？本当は、砲撃魔で破壊神、そして頭が残念な人だ。これしっかり覚えとけよ、訓練校のテストで出るかもしれないぞ」

「出ないよそんなの！一体どんなテスト！？」

「管理局の砲撃魔は誰？答えは高町^{魔王}なのはだ。これはきつと出るぞ。しっかり復習しとけ」

「出ないよ！」そう言ってシュークリームだ奪って居間に行くスバル。食料は確保していくんですね

その後皆でシュークリームを食べながら3日間の事を話した。ルーに友達ができた事をスバルも喜んでくれた。ただスバル…シュークリームそんなに食って気持ち悪くならないのか？

話し終えた後は食事をし一同解散という流れになる。オレも明日から仕事になるので早く帰って寝ようと思ってゲンヤさん達に挨拶をして帰ろうと思ったが

「ジン、おめえ明日聖王教会に行つて来てくれ」

「はい？」なんかメンドイ事になりそうです

第20話

ハアゝ行きたくないんですけど（前書き）

かなり独自の解釈があるので気にしないという方だけご覧ください

第20話

ハアゝ行きたくないんですけど

「はい？」

「ん？だから明日聖王教会にだな――」

「いや、そうじゃなくて何でオレが」

「ああ、あのチビ狸が要請してきたんだ。お前のレアスキルの申請」

「いつの間に……」

「最近、あいつの研修に付き合う事が多くてな、その時言われた。お前の昇進にもつながるから了承してきたんだが――拙かったか？」

「ゲンヤさん、オレが聖王教会嫌いなのは知らなかったんですか？クイントさんなら知ってるはずですけど　それと今の階級で十分です。昇進とかいいです。だから、断れませんか？」

「そうだったのか、すまねえな。しかし、あちらに連絡入れちまつたからな——悪いなジン」

「ハァー、クイントさんに言いつけますね、ゲンヤさんが若い女の子に懸想しているって。ちなみに離婚調停の場合、浮気をした方に罰金が発生するので 気をつけてください」

「お、おい！いくらなんでも——」

「では」

「ま、待ってくれ！ジン、ジーン——！！」

ゲンヤが後ろで騒いでいるが無視。当然クイントさんにも誇張して報告。クイントさんが

「フッフ、久々に私の拳が火を噴きそうね。待っていないさいあなた。」

「ドス黒いオーラを出してゲンヤさんのもとに向かった。なんか数秒して

「待ってくれ、クイント！オレがそんな事」

「言い訳は聞かないわ！」

「ジン！覚えていろよー！！」その後人間が殴られた音ではない音が聞こえた。やはり、若い女に嵌ってお金を貢いだりしていると言ってしまった部分が問題なのだろうか？それとも年増よりやっぱり若い方がいいと言ってしまった事だろうか？……確実に後者だ、まあ問題ない

問題なのはオレの方だ。……聖王教会か、嫌な思い出しかない。ハア〜と息を吐いて、明日の事を思って暗くなりながらも家路につくのだった。

――――

翌朝

出勤してすぐ部隊長室に向かう

コンコン

「ゲンヤさん、入りま す。」入った瞬間見たのはモザイクが掛けられて人前には出せないような有様になったゲンヤさんがいた

「だ、大丈夫ですか？」

「おめえが言うな！あの後大変だったんだぞ。誤解が解けるまでオレがどれだけ」

「心中お察しします。クイントさん怒ると怖いですもんね」

「おめえのせいだろうが！適当な事言いやがって、オレはクイント一筋だ！」

「惚気は結構ですよ。それにもとあと言え、ゲンヤさんが悪いんじゃないですか。聖王教会なんて所にオレを送りだそうというのですから」

ゲンヤの顔がいつの間にかもとに戻ってまじめな顔をして聞いてくる。これが所謂ギャグ補正か？地球で見た文化はためになるな」とのん気な事を考えている

「何か有ったのか？」

「まあ昔の事ですけどね。それで、オレはいつ向かえば良いんですか？」

「ああ、もう少し待ってくれ。もうすぐ来るはずだから」

「一緒に行かないといけないんですか？現地集合で良いじゃないですか」

「なんでもおチビの空曹さんが一緒に行きたいんだとさ」

「リインさんですか？なら仕方ないですね」そう言われて少し待っているとはやてが着いたという連絡が入り部隊長室までやって来た

「失礼します」独特なイントネーションの声が聞こえた

「失礼なので帰ってください」

「そうですか？それじゃーさいなら……ってちゃつやる！」

「部長長室ですよ、お静かに」

「は！すみませんナカジマ三佐」

「ホント頼みますよ」

「お宅には言われとうない！」

「リンさん久しぶりですね。お元気でしたか？」

「はいですう。ジンさんも、お元気でしたか？」

「無視か？無視なんか！？」

「あれ、いたんですか？八神一尉。すみません気づきませんでした」
ぺこりと頭を下げる

「お宅数秒前の会話を思い出してみい！明らかに気づいたやつだやろ！」

「幻聴でも聞こえたんじゃないですか？ダメですよ、薬物は犯罪です。どうしましうか部隊長、薬中を捕縛しますか？」

「お前ら、いつもこんななのか？」

「いえいえ」

「褒めてねえからな。呆れてるんだ。
：とりあえず八神と一緒に
に聖王教会に言って来い。一応レアスキルの申請で行くが、何かあるようならやめても良いからな」

「はい。それじゃーあちらと喧嘩になったら部隊長に責任が行くという事でよろしいですね？良かったです、これで気兼ねなく行けます」

「お、おい、ちょっと待て！」ゲンヤが何か言っているが

「リンさん行きましょう」「はいですう」そう言って二人は出て行ってしまった。

「八神 置いてかれているぞ？」

「もういいです。ハア」そう言って二人の後追うはやてだった。

- - - - -

ポートからベルカの自治領に移動し今は聖王教会の前にいる

「帰って良いですか？」ダメもとではやてに聞いてみる

「ダメに決まっとするやる！さ、行くで」はやてが中の人に連絡して入る許可を待った。しばらくすると中から人が出てきてこちらを案内してくれるようだ、

「あ、あなたは」

「お久しぶりですシスター。まだいたんですね？」

「なんや、ジン君。シスターシャツハと知り合いなんか？」

「昔、ちょっと会っただけですよ。もともと教会は好きではなかったんですけど、それに拍車をかけた原因になった人の一人です。」

「黙ってしまうシャツハ」

「なんや、良うわからんけど、シャツハは良い人やで。」

「ええ、そうなんでしょう。昔いかに聖王様が偉大でベル力の騎士

がすごいのか、そりゃーもう熱く語ってくれましたから、こっちがうんざりするくらい。主に肉体言語で。たかだか数分で嫌いになりましたね」

「アハハ シ、シャッハ」 はやてもフォローできない

「しかも、聖王に関する記述が特にないのには私は聖王様の事はわかるんですと言わんばかりのテンションで説明しだすし、聞かないと戦闘したがるし、全くここには嫌な思いでしかありません」

「申し訳ありません。あの時は、私も、若かったもので」 シャッハが当時の事を思い出したのか、申し訳なさそうに謝る

「宗教信者に有りがちなパターンですよ。しかも信仰上、聖王様のためなら何でも許されるという勝手な妄想。あの時ほど、ここの人たちを捕まえてやろうと思った事はなかったですよ。」

「すみません」 深々と頭を下げるシャッハに、同情したのか、はやてがとりあえず中に入ろうと言っていったん話を切る

「それじゃー帰っても良いですか？このままいくと原因その2が出てきそうなんですけど・・・」

「だからアカンって言うとりやろ！」

「リインも一緒に行きますから、行きましょっ」

「仕方ないですね、じゃあ行きましょっか」

「何でお宅、リインには甘いねん」

「リインさんですから」

「ですすう」ねーと二人でわかり合っている。そんな二人を見て、はやてはタメ息を吐くばかりであった。

ある部屋に到着

「騎士カリム、お客様がいらっしやいました。」

「どうぞ」中から声がかかったので入る事にする。シスターシャツハは飲み物を用意しに行ったようだ

「カリム久しぶりや」

「はやて、いらっしやい。あなたもお久しぶりですね、ヤナギバ三尉。」

「ええ、お久しぶりですね。息災のようで何よりです。」言葉は丁寧だが、目が物語っている、話しかけてくるなど

「やっぱ、カリムとも知り合い何か？それにシャツハの時みたいに何か有ったみたいやな」

「シスターが教会嫌いになった原因その1なら、騎士グラシア殿はその2ですね。今では教会騎士の重鎮はほとんどが嫌いになりましたけど」

「カリム？」はやてが疑問に思つてカリムの方を見る

「あの時は本当に申し訳ありませんでした。あの時のような事がないように教会としても気をつけまので」

「許せとでも言いやがりますか？ハッ！なかなか人を苛立たせるのがうまいですね。良い特技です。誇つて良いですよ」

「で、でもあなたもあの時の事を解消したいから今日こちらに来られたのではなかったのですか？」

「それに関しては申し訳ありませんね。八神一尉がうちの部隊長と勝手に話を進めてしまったために起きた事で、来たくて来たわけではないんですよ。随分と自分達に都合のいい解釈をお持ちのようで」

「！！」ジンがああの時のわだかまりを解消しようとしてくると勝手に思ったカリムが、勘違いに気づき驚いている。宗教信者はどこまでもお気楽らしい

「なあ、何があつたん？ジン君もちよつと態度が変やで、いつもとちやうやんか。」

「その狂信者にでも聞いてください。」

「カリム……」

「……はやて、私達が悪いのよ。今思えば、彼には最低の事をしたわ。」

「な、何したん？」

「実は……」

………回想

ジンがゼスト隊に配属され、部隊が壊滅する少し前。ゼストとクイントと共に教会に訪れていた。ジンは医務官として教会の依頼を受けゼストとクイントはその付き添いと教会騎士との訓練のためである。

「今日は教会の人を見れば良いんですね？」

「そうだ。」

「無限書庫で本を読んだ時、いろいろ教会の事についても見ましたけど、なかなか胡散臭いところですよ、聖王教会って」

「どういうこと？」

「聖王様を奉っているようですが、やってる事はそこら辺の犯罪者と大して変わらないということです。聖王の名を使い市民から寄付金を募る、挙句その寄付金はお偉いさん方の懐に入っている始末。ベルカの自治領として統治しているようですが、貧富の差が激しいところですね。宗教の所なんて大概そんなもんでしょうけど。それに聖王縁のロストロギアを集めているらしいですけど、ぶっちゃけ聖王のロストロギアなんて記述はほんのわずかなんですよ。聖王のゆりかごぐらいじゃないですか、はつきりとわかっているのは。それをなんだかんだ難癖をつけて奪い取っているんですよ。それにレアスキルの事だって、聖王にそのスキルがあったからって、レアスキルと呼ばれるものはすべて聖王様の施しによるものだなて言っで、教会で認められないとレアスキルではないという程の傲慢さ。魔力変換資質なんかは関係ないでしょうに。なんか嫌な所ですよ」

「というか、ジン君あなたどれだけ調べたのよ。」

「え？意外とあの書庫なら何でも出てきますよ。もしかしたら。管理局の悪事とかもいっぱい出てくるんじゃないですか？」

「余計な話はせずに、さっさと行くぞ。こちらは仕事できたんだからな。」ゼストが特に気にした様子もなく言う。管理局にも後ろ暗い事があるのは知っているようだ

「はい、でもゼストさん。もし、あちらの対応が悪かった場合はどうしますか？」

「その時の判断はお前に任せる。レジアスも言っていたがあちらにこちらへの命令権がないから頭に乗ってきたら、ブツ飛ばしてやれと言っていた。実際ブツ飛ばしたら問題なのだろうが、そこら辺はレジアスが何とかする」

「じゃあ。模擬戦でブツ飛ばしても構わないんですか？よかった！私加減とか苦手で」

「オレもよかったです。以前病院で働いていた時、ここら辺に住ん

でいる人の治療をしたことがあるんですけど、その人の話だと教会騎士団の重鎮や司祭の人はなにかと傲慢らしく、良いのは表向きの顔だけだそうです。オレも我慢できるかわかりませんから」

まあ、程ほどになんと言って、そのまま教会に連絡を取り入っていった。

——とある部屋

現在ゼストとクイントは騎士たちと訓練中である

「失礼します。ジン・ヤナギバ医務官、教会の依頼より参上しました。して、患者の方は…」

「なんだ、ただの子供じゃないか。管理局は聖王教会をなめているのか？」

「失礼ですが、子供でもちゃんと資格があるのでご心配なさらず。それにリンカーコアに関する治療とのことでしたので、私に話が回って来たのだと思います。リンカーコアについては他の医務官の方

よりも詳しいと思うので」「それもそのはず、母親のために必死になって学んだためジンのリンカーコアに関する知識は他の医者とは一線画する。

「生意気な子供だな。まあ良い、さっさと治せ」偉そうな態度で言うてくるオッサンにさすがに我慢できず

「あの、私はあなたの部下じゃないので命令しないで貰えますか？」

「なんだと？私はこの騎士の中でも――」

「あなたの立場など関係ありません。あなたがここでどんなに優れていたとしても、管理局とは別なので私に対して命令する権限はないのです」

「な！？貴様！」

激昂して文句を言おうとしてるところに、金髪の女性とシスターらしき人が入って来た。

「失礼します。騎士カルトス、治療の方はどうですか？おじい様が

聞いて来いとおっしゃられたので」

「ああ、騎士カリム。治療はまだしていない。そのガキがふざけた事をぬかすからな。」

「な！？管理局はこんな子供を送って来たのですか？」シスターが驚いて言う

「子供でも資格があるのでお気になさらず。どうしても嫌だというなら私以外の人をお願いしてください。私は頼まれただけなので、ふざけた事を言われてまで治療する気なんてないです。」

「な！？貴様さつきから聞いておれば頭に乗りおって！」

「あなた程ではないですよ」無礼には無礼で返せ。母の教えである。一応管理局員なので問題は起こしたくないのだが此処は仕方ない。上司でもない人に偉そうにされるのはたまったものじゃない

「落ち着いてください騎士カルトス。そして、あなたも言葉を慎みなさい。ここにいる騎士カルトスは歴戦の猛者なのです。聖王様の

ご加護を受ける大変立派な方なのです。そんな方を治療できるなんて本望でしょう」カリムが偉そうに言う

「いえ全く」

「ハアゝあなたには聖王様の偉大さがわかっておられないようですね？良いですか――」

「まるでご自分は知っているかのような口ぶりですけど、本当に知っているんですか？」

「勿論です。そもそも、この聖王教会は聖王様が立ちあげて、その時に協力したグラシア家がいまでも聖王教会に深く関わっています」

「聖王が教会を立ち上げたという記述はどこにもないんですよ。しかも戦乱の真つただ中に自分の宗教を立ち上げる人なんて普通いないでしょう。一体何を根拠に聖王教会なのか教えていただけませんか？ちなみにこちらの情報は無限書庫ですので」

「それは、代々グラシア家に語られる」

「そもそも、当時の戦争の中でグラシア家が聖王に協力したとして、なぜ教会なんて物を作ったのでしょうか？戦争中にそんな無駄な金があるとは思えません。しかも、当時まだ崇められるほどの人物ではない聖王を祀ったとして、民は一体何に祈りを捧げるのですか？仮に聖王様に祈りを捧げていたとして、戦争は聖王がゆりかごを発動するまで止められなかった。そして発動したゆりかごにより多くの死者が出た。祈りの結果が死ぬような宗教なのですか？」

「あなた！聖王教会を侮辱しましたわね」カリムが怒りだすが

「客観的事実を述べたまでです。それにベルカの自治領内での信者は随分を貧富の差が激しいようで、貧しい人の祈りは届かず、裕福な人の祈りが届くとは、聖王教会では祈りにお金が必要なんですか？」

「貴様！さつきから聞いていれば」おじさんも怒りだした。自分の発言が問題あるのはわかっているが止められない

「あなたも聖王様のご加護を受けた騎士なのでしょう？だったら現

代医学に頼らずお祈りすればいいじゃないですか？祈りで治るとは
思えませんか」

「逆巻けヴィンデルシャフトー！」

「おお、口で勝てないとわかって暴力ですか？さすがに騎士らしい」

「黙りなさい。シャツハ、聖王様の偉大さをその身に刻み込んであ
げなさい」

「はい！ ハアアアア」デバイスを展開して突っ込んでくるが、こ
ちらも展開し

「うるさいです。どこかに行ってください。」強制的に転移させ
暴力シスターをどこかへ飛ばす

「な！？シャツハ！」そのことに驚いたカリムが叫ぶ

「どこかに転移しただけです。瞬時だったので場所は遠くありませんが、まあ問題ないでしょう」

「あなたなんて事を！これは問題行為ですよ」

「先にふざけた態度を取ったのはそちらですよ。攻撃を仕掛けてきたのもそちらです。まさか無防備で殴られるとでも言つつもりですか？」

「その通りだ！聖王様を侮辱した不埒ものに我々騎士団が鉄槌を落とすのだ！」

「神にでもなつたつもりですか？聖王様でさえ神ではなかったのに」

「黙れ！」もう一人の騎士もデバイスを展開しようとするが、ジンは素早くデバイスをバインドで固定し爆破した

「！？私のデバイスが！貴様何をした！」

「さあ？神様の罰でもあったんじゃないですかね？祈りが足りなかったんじゃないですか？」

「あなたもレアスキルがあるのですね？なぜ、聖王様のご加護がありませんか……」

「この力が聖王様のご加護と言うなら、オレが聖王様を崇拜するのではないでしょう。昔、ベルカの騎士に襲われましてね、その時に発現した力です。」

「そんなのは貴様の聖王様への信仰が足りなかったからだ！」

「この世のすべての人が聖王様を信仰してとおっしゃるんですか？そしたら今頃ミッドは全域に信者がいますね？」

「ミッドの連中は聖王様の偉大さがわからないほどのバカなのだ！わが自治領にいる領民はその事をわかっておる」

「妄信者も此処まで行くと滑稽ですね。あなたの言う領民が自分にお金をくれるだけの人ならわかりますが、他の人はそんなこと思っていないですよ。以前ここの領民を治療する機会があつて話を聞いたのですが、本当に聖王様を信仰してるのはごく一部で殆どの人は貴方達の怒りを買わないためだそうです。しかも、この地から逃げようとすると聖王様のゝとか言つて武力行使を行うそうですね？自分の信仰がなくなれば、潰す。随分と器量の狭い王様だことで」

「あなたには何を言つても無駄なようです。聖王様の事がわからないなんて、ベルカ式の使い手にとって恥ずべき行為です。あなたは騎士にはなれませんか」

「こちらこそお断りです。祈つてどうにかなるのなら、オレ達家族はここにはいない。オレ達が此処にいるのは、昔から受け継がれてきた人類の英知のおかげです。断じて祈りによるものではありません。祈りで世界が救えるなら戦争なつて起こらないんですよ。では失礼します」そう言つてこの場を立ち去るジン

うしろで何か言っているが無視した

その後ゼストの所に行く

「すみません隊長。喧嘩を売られたの買っちゃいました」とかわいく言ってみたら殴られた。ゲンコツは痛い

「隊長だって、騎士の人達ブツ飛ばしてたないじゃないですか」

「ナカジマそれはおまえだ」

「だってこの人たち、我々は聖王様に」とか言って鍛錬もサボっているくせに言う事だけいっちょ前でムカついたんですもん。」

「それはオレも同感だな。」その後帰ろうとしたところに、先程のカリムとシャツハがやってきた。

まだ終わらないのか
…

第21話 仕事後とツンデレ

今は帰ろうとしているところである。仕事で来たけど、オレ自体何もしてないのでおそらく何か言われるだろうが、それでも、我慢できないものだったので仕方がない。レジアス少将もやってしまえと心の中で言っていたので、お咎めがない事を祈るばかりだ

そんな気分で帰ろうとしているところに、まだ何か用があるのか、二人がやって来た。二人とも不機嫌さを表しながらのご登場だ

「ゼスト隊の皆さん、お待ちください。先程の事について、おじい様——現聖王教会理事がお話があるようです。会って行つては貰えませんか？」シスターは苦虫をつぶしたような顔をしているが、カリムは何とか顔には出さず言ってくる

「どうしますか隊長？あちらの様子だと、会って欲しくなさそうな顔をしてるんですけど…特にシスターの方」こちらに指摘で気付いたのか、慌てて表情を変えようとするシスター

「あちらの理事がお会いしたいというなら、会わないわけにはいかないだろう。すまないが案内してもらえるだろうか？」

「はい。こちらです」一瞬、眉が上がったがすぐに反転して歩き出す二人。どれだけ、会わせるのが嫌なのだろうか？

……少し歩いて理事の部屋に到着。途中騎士団の方からの視線は酷いものだった。中には直接罵って来た人もいる。それでもクイントさんが負け犬の遠吠えにしか聞こえないというと、顔を真っ赤にしながら押し黙った。クイントさんかっけ。

カリムが入室の許可を求めて、中から許可があり入室する事にする

「おじい様、ゼスト隊の皆さんをお連れいたしました。」

「うむ、御苦労。」なかなか貫禄のある老人だ。特にあの長いひげが雰囲気醸し出している

「ゼスト隊の方々、今回は誠にありがとうございました。」

「「??」」教会理事に頭を下げられるという予期せぬ事に驚いて一瞬対応が遅れる。でも、すぐさま隊長が対応した

「頭をお上げください。感謝されるような事はしてないと思います
が…」

「いや、今回そちらに訓練を頼んでよかった。最近の騎士たちはベ
ル力が最強だと言つて驕り鍛錬を怠ける者が多い。ミッド式を卑怯
者と罵り、1対1なら負けないと吹聴する始末。魔力ランクが高い
者もあるが、いかんせんそれだけじゃ。本当の強者ではないので
お、あなた方のような本当の強者で騎士である人に一度叩き潰して
もらいたかつたんじゃ。それでも驕りが治らんものはそこまでの器
じゃろう」

「そう言う事でしたか、しかし、あまり効果があつたようには思え
ませんが」

「ナカジマ！」事実を言うクイントさんにゼストさんが苦言を呈す

「よいよい。貴方達が見たのは自分に酔いしれてるバカ者じゃ。骨
の残つてそんな者は、今必死になつて鍛錬しておる」フオフオフオ
と言いながら髭をさする理事。自分たちの騎士にちゃんとした評価
を下せるあたりこの人はすごいであろう

「そこにいる、二人はあまりわかつていらつしやらないと思います
けど」

「こらジン！」クイントさんに便乗して聞いてみる。隊長のストレスは溜まるばかりである

「おお、そうじゃったな。我が孫ながらどうしてこうなってしまったのか 教会という限られた中で育ってきて周りにああいう輩がおったのだから仕方がないと言えは仕方がないのだが」

「おじい様！」

「黙れカリム！お主に発言など許しておらんわ！勝手に聖王様を語りよって、グラシア家に恥をかかせる気が！」

「し、しかし その少年は聖王教会を侮辱したのですよ」

「シャツハ、貴様に発言を許したつもりもないわ！それにお主たちの話を聞いていればそう言う事言われても仕方がない。お主らが教会の創設の事を曲解し勝手に解釈したのが原因じゃろが！妄信と崇拜は別物だという事がまだわからんのか！」その迫力にカリムとシャツハが後退する

「あの〜どういう事でしょうか？教会設立には立派な理由があるのですか？」無限書庫で調べた時には出てこなかった情報だが、このご老人は知っているようだ

「おお、お見苦しいところを見せて申し訳ないな。して若くして医務官になったヤナギバ殿、貴殿の情報は無限書庫で調べたものであろう?」こちらへの対応がしつかりしている。やはりかなりの人格者のようだ。最初に会った3人とはまるで違う

「はい、医務官として働く前に無限書庫で勉強していまして、その時に教会の——というよりベルカの事です、興味を持ちまして色々調べてみたんです」

「若い頃からの努力見事じゃ。カリムにも見習わせたいものじゃ。素質はあると思うのじゃが、古代ベルカのレアスキルを継承したからのお、ちよつと驕っているのじゃよ。おっと、今は設立の本当の理由じゃったな。」理事の発言に自分でも自覚があるのか黙りこむカリム

「はい。戦争時に教会を作られても」

「確かに、そう言う見方もできる。しかし、あの当時の教会設立の真の目的は信仰のためではない。」

「「「???」」」なぜか、カリムやシャツハまで首をかしげている

「お主ら二人は知らなければいかんじやろう。そんな事だから間違った解釈を与えてしまうのじゃ。聖王様を穢しているのは己だと知れ！」

「申し訳ありません」自分たちの浅慮さを指摘され顔が暗くなる。自分たちが勝手に聖王様を語っていた事がわかったらしい。

「それで、本当の目的とは？」

「おつとすまんの、こやつらを見ると話が脱線してしまう」

「構いません。こちらとしても、客観的に判断したとは言え間違った解釈をしているのなら謝らなければなりませんから」

「立派な少年じゃ。 当時、戦争が激化してたのは知っておるな？」

「はい」

「その事を嘆いていた聖王様は自分の民が傷つく事を嘆いていた。だから、民を守るための防衛施設を建てる事にした。」

「それが教会。しかし、なぜに教会なのでしょう？」

「当時の戦争の火種は宗教による相互の不理解が原因じゃ。」

「それでは、尚更おかしくないですか？さらに争いの火種を作ってしまうのでは？」

「確かにそうだが、暗黙のルールがあつた。」

「暗黙のルール？」

「教会を襲つてはならない、これを破りし者は何よりも先に滅せられるというルールじゃ。当時は宗教が世界のルールであつた。信仰する神が違ふにしろ、教会とは神聖なものだと思われている。だから教会を襲ふ事は憚られたのじゃ。逆に言えば、教会のない地域は無神論者として襲われる事は有つたのが……。それに教会には苦しんだ民しかおらず、当時の王国が教会に軍人や武器など置く事は許されなかった。だから、教会は言うなれば境界線じゃ。教会にいるものは戦わない民のみ。戦うものは教会から出て行くのじゃ。それ故、聖王様は教会を作り、被害を最小限にまで抑える事にした。その事を教会に匿われた民達が感謝し聖王様の死後、聖王様を祀る事にした。その時、名を聖王教会とし、もともと崇める神の居なかつた教会は聖王様を祀つたのじゃ。それで教会設立に深く関わつたのが、このグラシア家という事じゃ。」

「……大変申し訳ありませんでした。そんな理由があるとは知らずに書物から勝手に判断し、聖王教会を侮辱してしまいました。」

「よいよい、最近ではこの話を知らずに勝手に聖王様を語る者がおるのでな、嘆かわしい限りじゃ」そう言ってカリムとシャツハを見る。二人とも俯いたままだ

「レアスキルの申請に教会が関わるのは聖王様を尊んでの事。聖王様のような能力があるものが将来世界を平和にしてくれるという願いを込めて、聖王様のご加護という事にしたのだ。断じて聖王様に認められた選ばれし者というわけではない。新たな聖王様のような人が出てくる事を願ったのじゃ。最近ではそれを勘違いした教会騎士団が神の遣いのような態度を取っておるがお。ホントに嘆かわしい」

神の遣いになりきっていた二人はもう顔を上げる事が出来ない。自分の勝手な聖王像を勝手に広めていたのだから

「しかし、私達のような者に話しても良かったのですか？」

「ゼスト殿、これはむしろ知ってもらいたい事なのじゃよ。一部の司祭や騎士たちが己の利益のために聖王様の名を語り寄付金を巻き上げているのが現状じゃが、聖王教会はそんなものではないという事を知って欲しい。わしも全力をあげてそういう者たちを排除してきたが、もう年じゃ、若いものに任せたいのじゃが、若い者もそう言う輩に言葉巧みに洗脳されてしまったてのお。」

「だから、私達に訓練の依頼をなさったんですね？」

「そうじゃ。本物の騎士とはどういうものかを見せれば何かが変わるかもしれないと思ったのじゃ。他力本願的で情けないようじゃが今のわしでは、ここらへんが精一杯じゃ。よろしければこれから時々騎士たちを鍛えては貰えないだろうか？愚か者は容赦せずに叩いて構わんから…」

「そう言う事なら喜んで引き受けましょう」ゼスト隊長が珍しく、にこやかな顔で言う

「おお、それはありがたい。司祭の方はわしやカリム、後は信頼できる者たちで何とかしようと思う。カリムできるか？」

「はいおじい様。全力にて完遂して見せます！」

「シャッハ、お前には騎士たちの事を頼みたい、やれるか？」

「はい、お任せください！」

「うむ、二人とも頼んだぞ」

「「はい！」」

――――回想終了

「こうして、今の聖王教会になったの。まだ完全とは言えないけど、おじ様が目指した形に近付いてきているわ。昔の事だったとはいえ、本当に情けない事をしたと思っているの」

「そう言う事か、うちが此处に来てすぐの頃はなんや、やな連中がおったけど、最近ではそういう連中も少なくなったから疑問に思ってた。これで納得やな。」はやてが事情を理解したようだ

「この理事も今では亡くなってしまつて、オレとしてもここに来るのは嫌だったんですけど、騎士グラシア殿がおっしゃったように、改善されつつはあるようですね。領民たちに前ほどの悲壮感がありません」

「はい、一部の者たちが行っていた強制的な寄付金の回収を徹底してたたきましたから。それに、住むのに困っている人には教会の一室をあげ、職を斡旋し普通の暮らしができるようにしています。それでもまだ完ぺきではありませんが。」

「理事の言葉実行なさっているようで何よりです。」

「それが、私達の使命ですから。聖王様を穢してしまった事は許されざる事なので、これから償って行きたいと思います」

「理事もそれを聞いて安心でしょう。それでは、私はこれで……」自然な流れのまま帰ろうとするが、狸が邪魔をする

「ちょい待ちい！お宅ここに何しに来たのか覚えてへんのか？レアスキルの申請に来たんやろ！」

「だから、先ほども言ったじゃないですか、改善されつつあるとは言え、理事亡き後の教会は基本的に嫌いなんですよ。それに、オレは昇進にはあまり興味がないので別にいいです。」

「お宅もベルカ式使うんやろ？だったらレアスキル持ちのほうで教会でも何かと待遇がいいで。私も昔はそうやったから。」

「教会での待遇が良くなる事がオレに何の関係があるのですか？全

く持っていていりません。」

「なんで、そこまで、嫌がるんや？」

「それをあなたが言いますか？もともとオレはこの能力は持っていないかったんですよ。まあここの教会の人の仲間みたいに思われるのが我慢できないという事もありますけど……」

「……すまん」はやてが思い出したのか、辛そうな顔をしている。彼女に非がないので何とも言えないが、このスキルはある意味オレの道標であり咎である。大切な人を守れなかった事を忘れずにいさせてくれるし、これを使って守れる事もできることを教えてくれた。

「いえ、オレも言い過ぎました。」

「それじゃーせめてお茶でも飲んで行ってください。」話を変えようとカリムが提案

「いえ、オレはこれで失礼します。」そう言って部屋を出て行ってしまった。

はやてとリンはそのまま残り話をしているようだ。オレとしては教会に行った後は仕事はないので今日はもうオフ。明らかに仕事を

サボっているように見えるが仕方がない。時間が空いたので久しぶりにティアナの様子でも見に行くとする。

――魔法学校到着

今日は休日らしく寮生の生徒は各自適当に過ごしている。一応休日での見学は認められているので、たとえ入ったとしても侵入者に間違われる心配はない

ティアナも此処にいる。おそらくあいつは練習でもしてるだろうから、練習場にも知るだろう。いた

「ティアナ、元気してたか？」

休憩でもしてたのか、若干息が荒い。こいつは基本的に真面目なのだが、真面目すぎるところもあるため練習でも飛ばし過ぎてしまう

「あれ、ジンさん？お久しぶりです。今日の仕事はサボりですか？」

この生意気な態度を先輩が見たらどう思うだろうか？

「誰がサボりだ！今日は聖王教会に行った後はオフだから、生意気なツンデレを心配して見に来てやったんじゃないか。」

「誰がツンデレですか！それにジンさんでも神様にお祈りを捧げる

「ようになっ たんですね？ 似合わない事してると、罰が当たりますよ。」

「知らないのか？ 医者には頼らない。お前オレが医務官である事覚えてないだろう？」

「そう言えばそうでしたね。すっかり忘れてました。」

「お前、今度治療してもらった時気を付けろよ？ うっかり手が滑ってかなり痛くなるかもしれないから。大丈夫、傷は治るからな。……ただ痛いだけだ」

「……ごめんなさい！ もう生意気言いませんので許してください」

前に一度だけティアナを治療した時、人の言う事を聞かずに無茶をして怪我してきたので、ちよつときつめの治療をしてやった。そのときティアナは泣きまくり、それ以来この治療法はティアナにはトラウマでしかない。自分が泣き喚く姿を人に見られたくないのだから。ケガ自体はすぐ治るのだけど

「聞きわけの良い子は好きだぞ。オレだって小さな女の子が泣き喚くところは見たくないしな。」

「喚いてはいません！ ちょっと声が出ちゃっただけです！ ジンさんそうやって女の子の過去をバラすなんて最低です、悪魔です！」

まさかあの悪魔と同列に扱われる日が来ようとは

「ティアナ」

「な、なんですか？」

こちらが急に真剣な顔をしたので焦り出すティアナ。どうやら怒られると思っただけらしい。意外とビビりだ

「お前はまだ、本物の悪魔を知らない。本物は別格だぞ？困ったならなんでも砲撃で解決、屠った人は数知れず、倒れてる相手にも容赦なく砲撃をかます。それが、本当の悪魔、いや魔王と言い変えて良いだろう」

「ど、どんな人ですか！いい、いませんよそんな人」

とか言いながら若干信じてる。こういうところが意外とかわいい。

「ティアナ世界は広いんだという事を知っとけ。世の中常識では考えられない事はたくさんあるんだ。オレの命もその人に見つかってしまったら紙クズ同然になる。」

「ジ、ジンさん、も、もしかしてその人と知り合いなんですか？」

「ああ、名を高町なのは、職業は魔王」

ティアナがズッコケる。しかも地球で見た芸人さん張りのリアクション…腕をあげたなティア

「その人ってエースオブエースの人じゃないですか！そうやってすぐ嘘をつくのは良くないですよ」

「」

ティアナを数秒見て、おもむろに空を見上げる。その悲壮感ただよふ表情が何よりも物語っている

「 本当何ですか？」

「 …ああ。」

「 そうですね……」数秒の沈黙。

「あ！そう言えばジンさん今日オフなんですよね？だったら私の訓練見てくれませんか？」ティアナが話を変えるために自分の訓練を見てくださいと言う

「 そうだな、久しぶりに見てみるか。少しはうまくなったか？」

「 当然です。見ててください」

そう言って自分の訓練の成果を見せようとするティアナだった。

- - - - -

ティアナとの訓練後どうせなら一緒に食事でもしませんか？とティアナが言うので学校の食堂に来ている。一応学生と一緒になら外部の者でもここで食べれるらしい。

「それにしてもうまくなったなティアナ。だんだんと先輩に似てきている。」

「そうですね？兄さんに教わった事はありませんでしたけど、自分では良くなりません。ジンスさんの真似をしているだけです。」

「まあ教わった人が同じだから似ているのは当たり前か。オレも先輩の真似をしてたからな。シスコンという欠点を除けばかなりすごい人だったからな。」

「兄さんって仕事場ではどんな感じだったんですか？」シスコンのところでは少し眉をひそめたが兄が褒められるのは嬉しいようで兄について聞いてくる

「仕事は優秀だったし、人当たりも良いから人望もあつたけど、それを台無しにするくらいシスコンだった。基本パートナーを組んでいたけど、仕事後のお前の自慢話はかなり聞かされた。」

「兄さん …」

「まあそれでも尊敬してるし、オレの師でもある二人の内の一人だ。」

「二人？もう一人の方もいるんですか？」

「ああ、オレを魔導師にしてくれた人だ。人生の師でもあり父親みたい人だ。」

「ジンさん」「ジンの様子がいつもと違っていたのでそれ以上テイアナは何も聞かなかった。」

「あ、そう言えば、お前、士官学校の試験受けなかったんだってな。お前なら受けると思ったけど」

「前にジンさんに治療された時までは受けようと思ってましたけど、空戦適性もあまり高くないし、無茶してもあれなので普通に陸士の学校に行くつもりです。執務官を諦めたわけではありませんけど…」

「先輩の夢だったからな。お前が叶えてくれれば先輩も本望だろうよ。ただそれに囚われ過ぎて自分の人生を台無しにするような真似

はするなよ。それは先輩の望んだことじゃないからな」

「わかっています。前にそれでジンさんに怒られてからは自分の意志で目指そうと決めたんですから。それに空戦だって諦めたわけじゃないません。当面の目標は執務官、次にジンさんを倒す事ですね」

「おかしいぞツンデレ。なぜ、執務官の次がオレを倒す事になる？」

「だってジンさんに勝つてみたいじゃないですか。それに執務官になればジンさんより階級が上になりますし、ジンさんを倒せば、私が部下としてコキ使っても文句が言えないじゃないですか。」

「ツンデレ、そんな面白くない冗談はやめなさい。オレがツンデレの下になる？バカ言っちゃいけないよ。寝言は寝て言え。」フッフ、明らかにジンの空気が変わった。

「だってジンさん、昇進には興味ないみたいだし、私が顎で使ってあげますから、それまで待っていてくださいね。」フッフ、ティアナの様子もおかしい。周りがそんな二人の雰囲気を感じたのか、どんどん離れて行く

「上等だ！表出ろこの野郎！ツンデレごときがオレに勝つなんて10年早えって事を証明してやんよ！」

「野郎じゃありません」。性別も見分けられないくらいおかしくなりましたか？医者に診てもらった方が良いですよ？あ、そう言えば

ジンさん医者でしたっけ？ 医者は自分で自分の事が見れないから大変ですね〜」

「おし良く言ったぞ小娘。泣かしちやる、絶対泣かしちやる。表出るや！」

「小娘ってジンさんとあんま年変わらないじゃないですか！ しかもキレて女性に手を出そうなんて最低ですね！」 売り言葉に買い言葉。二人のケンカはこの学校ではよく見かける。ジンがティアナの様子を見に來ると大抵はケンカになり最終的に和解して終わる。ケンカの理由はくだらないものだが・・・

「ふん！ 女性だ？ あと5年経ってから出直してこい。お前みたいなお子ちゃまが女性だと？ 笑わせんな！ ツンデレ度も女性としてもバニングスさんには及ばないわ！」

「誰よバニングスって！ いいわ、私が立派なレディである事を証明してあげる」 そう言っ て訓練場に向かうティアナ。 それについて行くジン。 周りの観客も観戦モードに突入する。 今の所ジンの全戦全勝である

- - - - - 訓練場到着

「いつも通り、ハンデはこちらが射撃オンリー、お前が何でも有り

で良いか？」

「ええ、今日こそ勝つわ！それでごめんなさいって言わせるの！」

「残念ながらそれは無理だ。そしてお前はオレの治療を受け泣き喚く羽目になる。謝るなら今の内だぞ？」

「誰が謝るもんですか！喰らいなさい」一気に三連射してくる。

「そんな物効かぬわ！」キャラが変わってしまったジンだが、全て撃ち落とす。

「どうした小娘、これで終いか？」

「そんなわけないでしょ！これなら——」先程と同じように三連射だが、今度は別々に飛ばす。ティアナはジンとは違い誘導弾の方が得意なのでスピードよりも操作性を重視する

「毎回見てる物がオレに通用すると思ったか！」迎撃に入るが

「思っていないわよ！」誘導弾が分裂してジンを襲う

「！？」それは先輩の技だろ！と突っ込みながらもなんとか回避する。だが回避した際に弾が地面に当たり視界が見えなくなる

「猪口才なことを！小娘がやりおる」とかふざけながらも冷静にティアナを探す見つけた！

「詰めが甘いぞ小娘！魔法陣がバレバレだ！オッラ！」と接近しながら銃で殴りにかかるがティアナが消える

「それはこっちのセリフよ！」後ろから現れたティアナが弾丸を放つ。ジンも攻撃した後なので回避が間に合わない・・・が

「最初からわかってたぜ。甘い小娘！」そう言っただけで空中で銃を放ち、その反動で弾丸を回避する。ティアナも勝ったと確信したのか、ガッツポーズまでして喜んでいる。

「勝ったと思った時が一番危ない、一つ良い事が学べた小娘。」油断していたティアナはジンから放たれた弾丸が回避できず直撃した。ジンも気を使ってダメージの少なそうな所に攻撃したので意識はとんでない

ジンに撃たれて座りこむティアナ。両手両足を撃たれたので、動けない

「ティ～ア～ナちゃん、さ治療の時間ですよ。」につこりと笑ってティアナに近づく。ティアナは死刑宣告でも受けたような顔をして青ざめて行く

「す、すみませんジンさん。先程の事は謝りますから、ど、どうかお情けを！」ほぼ半泣きの状態のティアナの懇願を

「あ、それ無理」無情にもその願いが届く事はなかった。

その場に残されたのは少女の悲鳴だったという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0518v/>

これがオレの人生だ

2011年11月15日00時21分発行